

聖剣伝説 LOVELIVE of MANA

バーサーク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世で8人の学生時代の友人達と共に東京へ旅行に来ていた主人公の手塚寿（てづかひさし）は友人達と宿泊していたホテルの火事に巻き込まれて逃げ遅れていた人達の人命救助をした矢先に逃げ遅れてしまい友人達と共に死んでしまった。

死んだはずの彼らの前に聖剣伝説3のマナの女神が現れて、彼ら9人にラブライブ！の世界に聖剣伝説3に登場した悪の勢力達とその悪の勢力に加担する悪質転生者達がμ'sを狙っている事を聞かされる。

寿達はマナの女神に転生させる事を引き換えに悪の勢力達と悪質転生者達を倒しμ'sを守って欲しい。と頼まれる。

マナの女神から事情を聞いた彼らはμ'sを守る為に悪の勢力達と悪質転生者達と戦う事を選ぶ。

初の小説投稿です。今までは読む専門でしたが自分も挑戦してみたいと思い投稿しました。

ラブライブ！と聖剣伝説3、テイルズオブシリーズのクロスオーバーの小説です。初心者の為至らぬ所があるので皆さんどうかご了承下さい。主人公達の容姿等はテイルズオブシリーズのキャラクターにする予定です。独自設定もありますがその内容も出来ればご理解お願いします。

聖剣伝説3とテイルズオブシリーズの内容に詳しい方もそうでな

い方もぜひ読んで下さい。

注意：他のゲームやアニメの要素が追加される事があります。何でも許せるならどうぞ読んでください。文章力等も無い上にメンタルも弱い方なので暖かく見守って下さい。

目次

プロローグ	1
キャラ紹介	4
転生編	
女神との対面	13
修行終了そして・・・	21
転生の始まり	28
原作介入前編	
転生後の出来事 寿編	32
転生後の出来事 敦也編	37
転生後の出来事 龍馬編	43
転生後の出来事 総司と健司編	51
転生後の出来事 博人編	56
転生後の出来事 啓太編	61
転生後の出来事 恭介編	69
転生後の出来事 賢編	73
原作介入後編	
廃校阻止の対策	81
テスト生の検討	86
突然の呼び出し	89
決意の旅立ち	99
μ's編	
音ノ木坂学院へ	104
全校朝礼での自己紹介	110

運命の再会	115
昼休みの出来事	120
昼休みの出来事	136
昼休みの出来事	145
歌の女神となる少女との触れ合い	153
歌の女神となる少女との触れ合い	167
歌の女神となる少女との触れ合い	175
聖剣の勇者達の情報交換	188
番外編	
新たななる聖剣の勇者	192
別世界では「人殺し」になってしまったある姉妹の弟を救え	197
鹿角家との交流	205
己の覚悟と信じる正義	219
転生後の出来事	226
転生後の出来事	226

プロローグ

俺の名前は手塚寿（てづかひさし）。俺は学生時代の友人達と夏季休暇で東京へ旅行に来たものの。今火事になって宿泊しているホテルで学生時代の友人達と逃げ遅れている人達の人命救助をしている最中である。えっ！どうして人命救助をしているかだって？

何故かってそれは来るはずの消防車が居眠り運転していた運転手のトラックと接触事故を起こしてしまい、さらに他の消防車だけでなくレスキュー車さえも事故の影響で到着が大幅に遅れてしまうと書いていたからだよ。

それで俺は元からほっとけない性格だから人命救助をしているわけだよ。俺一人なら良かったはずなのに友人達まで俺と人命救助を手伝っている流れになってるんだよ。理由を聞くとホテルの人達をほっとくわけにはいかない。というのも理由だが何より一番の理由は俺の事をほっとく事が出来ないからだって。

正直俺は嬉しかった。俺と友人達は性格は違えども人の命を見捨てる事が出来ない所は同じである事もそうだが何より俺の事をそんな風に思ってくれていた事が泣きそうになる程嬉しかったのだ。俺は最高に良い友を仲間を持つ事が出来て良かった。と改めて思っている。

しかし、最悪な事態になってしまった。逃げ遅れていた人達を逃がす事は出来たものの俺達は逃げ場を失ってしまったのだ。正直俺は後悔した。自分だけなら良いが大事な仲間達を巻き込んでしまった事に。

寿「ごめん敦也（あつや）、龍馬（りょうま）、総司（そうし）、健司（けんし）、博人（ひろと）、啓太（けいた）、恭介（きょうすけ）、賢（けん）。

俺がこんな性格だから皆をこんな目にあわせて、本当にごめん皆。」

俺は仲間達に深く謝罪をした。恨まれる覚悟をしていた。でも思いがけない言葉が返って来た。

敦也「何謝ってるんだよ。寿は何も悪くねえよ。俺も皆も自分の意思で人命救助を手伝ったんだ。」

龍馬「敦也の言うとおりでだよ。寿は何も悪くない。それは僕達がよく分かってる。」

総司「そうさ。俺達は誰も寿の事を責めたり何かしないさ。」

健司「そうだぜ。俺も兄貴と敦也、龍馬と同じ意見だ。俺達は血肉を分けた友情を結んだ仲間も同然だろ。」

寿「でも俺が人命救助をした為に皆をこんな危険な目にあわせたんだ。俺は皆の仲間としての資格何かもう無い。」

博人「バカヤロー。いつまで自分を責めてんだ。それ以上言ったら怒るぞ。」

寿「だけど俺のせいで。」

啓太「そんな事無いよ寿。僕達自身が自分で選んだ事なんだ。」

恭介「その通りだ。ここで死ぬ事になってしまうけど、僕達は絶対に寿の事を恨んだりしない。」

賢「自分の信じた行動に何も恥じる事なんかないだろ。だから胸を張れよ寿。」

8人「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

キャラ紹介

登場人物一覧

手塚寿（てづかひさし）

本作の主人公。聖剣の勇者のメンバーで転生者の一人。

身長180cm。

容姿はテイルズオブヴェスペリアの主人公ユーリ・ローウエル。

一人称は俺。目上の人には僕。

性格は少しドジな所はあるも友達思いで他者を思いやる事が出来る優しさを持っている。

また融通のきかない所があるも仲間との絆を常に大切にしており、例え仲違いしてしまった相手すらも今でも仲間だと信じる心を持つ程である。しかし、心が傷つきやすく繊細な所もある。

前世では幼い頃に母親の幼児虐待が原因で両親は離婚し、父方に引き取られてからは母親変わりとなった父方の祖母に育てられる。

しかし、父親は自分が小学5年の時に自分と祖父と祖母を裏切って付き合っていた女性と結婚して家を出ていってしまい、その事で父親を毛嫌いし疎遠となる。祖父は小学6年の時に大腸癌で他界。その後中学3年の時に祖母は肺炎で亡くなり、子供がいない父方の叔母夫妻の元に引き取られ、叔母夫妻の援助で高校と大学に通っていた。

前世で小学校〜大学時代に剣道をやっていたので剣術の技術が高い。大学卒業後は介護職の仕事に勤めていた。

また、ラブライバーでもあり推しは穂乃果。
予定ヒロインは穂乃果。

転生後の家族構成は祖父母との三人構成。

クラス3はパラディン。

誕生日8月23日

血液型O型

CV 鳥海浩輔

北郷敦也（ほんごうあつや）

聖剣の勇者のメンバーで転生者の一人。

身長175cm。

容姿はテイルズオブグレイセスの主人公アスベル・ラント。

一人称は俺。

性格は明朗活発で明るく前向き。仲間を大切する事と弱き者を守る事を心情にしている。感情的な所がある。

前世では寿とは保育所時代からの幼馴染で親友。

高校1年の夏に両親と弟が旅行先で交通事故に巻き込まれて世界し、それが原因で心を閉ざしていた時期があった。

しかし、寿達によつて励まされて本来の明るさを取り戻し、それ以降は両親の残した遺産と親戚の助けで一人暮らしを始めた。

寿と同様小学校→大学時代に剣道をやっていた為剣術の技術がある。大学卒業後は警備会社に勤めていた。

ラブライバーの1人で推しは絵里。

予定ヒロインは絵里。

転生後の家族構成は両親と弟の四人構成。

クラス3はソードマスター。

誕生日12月26日

血液型O型

CV 櫻井孝宏

高梨龍馬（たかなしりょうま）

聖剣の勇者のメンバーで転生者の一人。身長は168cm。

容姿はテイルズオブイノセンスの主人公のルカ・ミルダ。

一人称は僕。

性格は優しく朗らかで素直だが、人から頼まれると断れない性分で優柔不断な所がある。

両親の影響で幼い頃から花が好きで父親のフラワーコーディネー

ターの仕事に興味を持つきっかけとなった程である。

寿と敦也とは小学校時代からの幼馴染で親友。

前世では小学3年の時に両親は強盗に殺されてしまい、その後は親戚達からたらい回しにされていた。さらには施設へ行くように強制されていたが事情を知った優しい母方の叔母夫妻によつて引き取られる。

なお両親を殺した強盗は警察に逮捕され、恐喝、傷害罪等の前科持ちであった上に窃盗・銃刀法違反・殺人罪により死刑となる。

叔母夫妻に引き取られてからは小学4年の春に寿と敦也のクラスに転校して来て、寿と敦也と一緒に遊んでからは仲の良い友達となり、親友になった。

叔母夫妻の養子になった後は引き取ってくれた上に、大学まで通わせてくれた事も含め、居場所を与えてくれた叔母夫妻に恩返しをする為に家事の手伝いと叔母夫妻との間に生まれた娘である義妹の面倒を見ていた。中学〜大学時代は陸上部に所属し、大会で高成績を残した実力者でもあった。柔術の心得もある。

大学卒業後はフラワーコーディネーターの仕事をしていた。

予定ヒロインはひとり。

転生後の家族構成は両親との三人構成。

クラス3はワンダラー。

誕生日3月12日

血液型A型

CV 木村亜希子

遠野総司（とおのそうし）

聖剣の勇者のメンバーで転生者の一人。身長167cm。

容姿はテイルズオブエクシリアの主人公ジユード・マティス。

一人称は俺。

健司の一卵性双生児の双子の兄。性格は明るく猪突猛進な所があるも弟思いで悪く言った相手には感情的になって口調が荒くなる。

前世の時、小学校時代から弟の健司と共に空手を習っていた為、格

闘術は高く勉強面も優秀。弟の健司を大切な家族であり弟として大切に思っており、悪く言う相手に怒りを向ける事があり、たとえ両親であっても怒鳴る程の弟思いである。

中学1年の時に弟の健司と共に寿と同じクラスとなった事がきっかけでアニメとゲームの話題で仲良くなり、その後寿が敦也と龍馬を紹介後に交流を経て友達になった。部活動は違っても一緒に帰る等の仲だった。

前世で健司と共に製菓学校1年の時に両親は仕事の取引先でガス爆発に巻き込まれて亡くなり、その後二人でバイトをしながら製菓学校に通っていた。卒業後、健司と共に亡き両親の友人が経営する洋菓子店でパティシエとして働いていた。菓子作りが得意。

予定ヒロインは凜。

転生後の家族構成は両親と双子の弟の健司の4人構成。

クラス3はデスハンド。

誕生日5月25日

血液型A B型

CV代永翼

遠野健司（とおのけんし）

聖剣の勇者のメンバーで転生者の一人。身長167cm。

容姿はテイルズオブエクシリアの主人公ジュード・マティスで髪の色はジュードの父ディラック・マティスと同じ。

一人称は俺。

総司の一卵性双生児の双子の弟。性格は冷静沈着で現実主義な所があるも他者を理由もなく助ける等、不器用ながらも優しいところがある。前世の時は兄の総司と共に小学校時代から空手を習っていたので格闘技の技術は高く勉強面も優秀。

しかし、小学校時代に双子の兄の総司より少し劣っている事がある為、両親だけでなく周りの人間から比べられていたのが原因で両親とは不仲になっていた事や兄の総司を嫌っていた時期があるも総司が両親と周りの人間に自分の事を悪く言った時、激しくキレた時に家族

で双子の弟である自分を大切に思ってくれていた事を理解した。

さらにその事が十分身に染みたのか両親を始め、周りの人間から深く謝罪を受けて以来、双子の兄の総司を大切な家族として和解し、両親とも和解した。総司と同様菓子作りが得意。

前世で寿達との関係と職業は上記の総司と同じ。

予定ヒロインは花陽。

転生後の家族構成は上記の総司と同じ。

クラス3はゴッドハンド。

誕生日5月25日

血液型A B型

C V代永翼

宮野博人（みやのひろと）

聖剣の勇者のメンバーで転生者の一人。身長168cm。

容姿はテイルズオブシンフォニアアーラトスクの騎士の主人公
エミル・キャスタニエ。

一人称は俺。

性格は自由奔放でひょうきん者でお調子者な所があるも家族愛や友情に熱く義理堅い。またロマンチストの一面もある。仲間内ではムードメーカー的存在であり破天荒な部分があるも何処か憎めない所がある。

啓太とは幼い頃からの幼なじみであり従兄弟で親友でもある。

前世で高校1年の時に同じクラスで寿と敦也に自分から声をかけた事がきっかけ。その後、アニメとゲームの話で仲良くなり従兄弟の啓太を紹介して啓太も2人と仲良くなった。寿と敦也に龍馬と総司と健司と恭介を紹介してもらい顔見知りになった。最初は健司とは仲が悪く喧嘩ばかりだったが、啓太がクラスメイトに暴力を受けていた時に一緒に啓太を助けた事がきっかけで今までの事を互いに謝罪してからは友達の1人となった。小学校時代からダンスをやっていた為、ダンスの技術がある。

母親は自分と妹が幼い頃に乳癌で亡くなり、父親は自分が高校2年

の時に妹が中学3年の時に仕事の無理が祟って病死する。

高校卒業後、妹の広美の高校と音大の費用の為に就職する事を選びコンピューター会社で働いていた。頑張りがあつてか高い地位を得し、妹の夢を叶える手助けが出来た。妹は音大卒業後、夢であったバイオリニストになる事が出来たが海外公演の為に乗っていた飛行機が墜落事故を起こして他界する。

家族を失った喪失感から仕事ばかり打ち込む様になってしまい、やや自暴自棄状態であつた時に啓太と寿達の必死の説得で立ち直る事が出来た。

寿と敦也と同じラブライバーで推しは希。

予定ヒロインは希。

転生後の家族構成は両親と妹の4人暮らし。

クラス3はナイトブレード。

誕生日2月16日

血液型B型

CV下野紘

本宮啓太（もとみやけいた）

聖剣の勇者のメンバーで転生者の一人。身長165cm。

容姿はテイルズオブデスティニー2の主人公カイル・デユミナス。一人称は僕。

性格は天然な所があるが、自分の選んだ事を最後までやり遂げる芯の強さを持つており、実直な性格でもある。また一途な所もある。

前世で高校1年の時に従兄弟で幼馴染兼親友の博人に寿達を紹介された事がきっかけで寿達と仲良くなった。

博人とは幼い頃からの幼なじみであり従兄弟で親友。一緒にダンスをしていた為ダンスの技術がある。

前世の時、中学時代に生まれつき病弱だった妹の愛子は病死。両親は大学時代に轢き逃げにあつて亡くなってしまう。轢き逃げ犯は判明したが自ら自殺をして死亡。家族を失ってしまい、悲しい気持ちであつたが「立派な大人になってくれ。」という死ぬ間際に言つた両親と

の約束を守る為に頑張つて生きる事を選ぶ。

家族亡き後は両親の遺産とバイトをしながら大学を通い続けて、大学卒業後は弁護士となる。

予定ヒロインは海未。

転生後の家族構成は両親と妹の四人構成。

クラス3はニンジャマスター。

誕生日11月1日

血液型O型

CV福山潤

浅見恭介（あさみきようすけ）

聖剣の勇者のメンバーで転生者の一人。身長167cm。

容姿はテイルズオブハーツの主人公シンク・メテオライト。

一人称は僕。

性格は少し頼りない所があるも面倒見が良く愛情深い。さらに共感力が強く情緒的で人の気持ちを考えることも出来る。

前世で家柄は何代も続く医者や看護師、薬剤師の家系の生まれ。両親が多忙で家を空けている事があった為、妹を幼い頃から面倒を見て来ていた影響か大人びている所がある。中学1年の冬に祖父と両親と妹は祖父と母親に逆恨みをした集団に殺害されてしまい孤独の身となってしまう。逆恨みをした集団は警察に逮捕され、反省の様子はなく殺人罪により死刑となった。その後、遠方の親戚に引き取られて、中学2年の春に寿と敦也と龍馬のクラスに転校してきた際にゲームを通じて3人と仲良くなった。その後、総司と健司とも趣味が合う友達となった。

幼い頃から習っていた為かフェンシングが得意である。勉強面は優秀であり、前世は東大医学部を首席で卒業した経歴の持ち主だった。大学卒業後は外科医として活躍していた。

予定ヒロインは真姫。

転生後の家族構成は両親と祖父と妹の五人構成。

クラス3はロード。

誕生日 7月7日

血液型 A型

CV 柿原徹也

杉村 賢（すぎむら けん）

聖剣の勇者のメンバーで転生者の一人。身長171cm。

容姿は顔に模様が無し、のテイルズオブレジェンディアの主人公セネル・クーリツジ。

一人称は俺。

性格は明るく社交的で、公正な判断が出来るしつかり者。面倒見が良く子供に好かれやすい。

前世の時中学2年の時に母親を亡くし、父親が仕事で忙しい間は幼い弟二人と妹一人の面倒を見ていたので面倒見が良い。さらに幼い頃から父親に料理とジークンドーを習っていた為、料理スキルと格闘技術は高い。

高校1年の冬に父親と弟2人と妹は飲酒運転をしていたトラックの運転手との接触事故が原因で他界してしまい、それが原因で性格が180度変わってしまい少し荒れていた時期があった。

家族の死後、引き取ってくれた叔父の仕事の都合で高校2年の春に寿達の高校へ転校してきた時に寿達と出会う。最初は家族を失ったのが原因で寿達やクラスメイトとは関わろうとしなかったが、寿に暴言を言った事が原因で敦也と喧嘩になってしまい、喧嘩の最中に家族を失った事を全て話した事が切っ掛けで寿と敦也、龍馬、博人、恭介がそれぞれ自分の悲しい過去を話した事で謝罪し合ってから寿達と仲良くなった。その後は以前の性格に戻った。高校卒業後は調理師専門学校に進学し、卒業後は料理人となる。

転生後の家族構成は父親と弟2人と妹の五人構成。母親は故人。

予定ヒロインはここ。

クラス3はウォーリアモンク。

誕生日 9月28日

血液型 AB型

C
V
鈴村
健一

転生編

女神との対面

火事現場で焼死した寿は謎の空間で気絶して倒れた状態であった。

寿「うーん。は（。 ㇿ ）！此処は何処だ？」

目が覚めた寿は周りを見ると仲間である敦也達が気絶した状態で倒れていた。

寿「敦也、龍馬、総司、健司、博人、啓太、恭介、賢。すっかりしろ皆大丈夫か？」

8人「「「「「うーん。あ！寿。あれ？俺（僕）達は一体？というか此処は何処だ？」「「「「「」

寿「わからない。でも俺達は確か一緒に火事に巻き込まれていた時に急に意識が遠のいて倒れたんだ。つまり倒れていた間に火事で死んだという事だ。」

龍馬「でも気絶していたとしても火事の炎で焼かれて熱さと苦しみで目が覚めて苦しんだ筈。でもそんな苦痛を感じた記憶も無いよ？」
敦也「そうだよな。でも俺も火事で焼かれて苦しんだ記憶すら無いぞ。気絶した事までは覚えてるけど。」

総司・健司・博人・賢「「「「ああ。俺達も気絶した所までは覚えてるぜ。」「」

啓太・恭介「「僕達もだ。」

寿「もしかしてあれは夢だったのか？でも夢ならホテルのベッドの上で目が覚める筈だぞ。ひよつとして俺達は同じ夢を見ていてまだ夢から覚めてないのか？」

？「残念ですがこれは夢などではありません。」

9人「「「「「誰だ！」「「「「「」」」」」」」

寿達は声のした方に振り向くが見当たらない。辺りを見回すも姿が無い。寿は声の主を探していると前から光が現れてその光の中から声の主の姿が現れた。

9人「「「「「えっ！嘘だろ（でしょ）何で貴方が。「「「「「」」」」」」」

寿達は正直混乱していた。無理も無い何故なら彼等の前に現れたのはあの聖剣伝説3に登場していたマナの女神だったのだ。

寿「マナの女神様？そんな馬鹿な。聖剣伝説3のゲームで出てきたマナの女神様がどうして？まさか俺達は夢か幻を見ているのか？」

マナの女神「突然の事で混乱するのも無理はありません。ですが皆さんこれは夢でも幻でもありません。今から話す事をよく聞いて下さい。皆さんは火事で人命救助をしていた事と貴方達の身体の周りを不思議な光に包まれていた事を覚えていますか？」

9人「「「「「は！はい。「「「「「」」」」」」」

マナの女神「あの光は貴方達に苦痛を与えない様に私の力を施した光なのです。」

総司「それじゃああの光のおかげで俺と健司達は火事に焼かれていたにも関わらず、苦痛を味わなくて済んだという訳ですか。」

健司「でもマナの女神様どうして俺達にそんな事をしてくれたんですか？」

マナの女神「貴方達は危険を顧みずに逃げ遅れていた人達を助けていたではないですか。それに貴方達はどんな状況であつても仲間を信じていたからです。私はその光景を見ていました。出来れば火事から助けだしたかったのですが、残念ながらそこまでする事を他の神々に禁じられていたのです。出来る事ならせめて苦しまない様にするしか方法はなかったのです。本当に申し訳ありません。」

マナの女神は寿達に深々と頭を下げた。彼等は思った彼女は出来る限りの事をしてくれていたのだそれなのに責め立てる等間違いだと思つた。当然彼等の言葉は。

啓太「マナの女神様。どうか頭を上げて下さい。貴方の責任ではありません。どの道僕達はあの火事で助からなかったんですから。」

博人「そうですね。俺達が火事の炎に苦しむ事なく最後を迎える事が出来たんですから。寧ろマナの女神様貴方には本当に感謝しています。」

賢「確かに火事で身体が燃えて苦しんで死ぬなんて正直言って嫌だったからな。」

恭介「そう考えるとマナの女神様は僕達の為に配慮をしてくれたんです。おかげで苦しまなくて済んで良かったです。」

敦也・龍馬「俺（僕）達はマナの女神様には本当に感謝しています。」

寿「という訳ですよ。僕達は皆マナの女神様のご配慮とお心遣いには本当に感謝しています。本当に有難うございました。」

9人「「「「「有難うございました。」」」」」」

普通なら責め立てる筈なのにも関わらず彼等9人は逆に感謝をしていた。その姿にマナの女神は涙を流していた。

マナの女神「素晴らしい。貴方達こそ私が探し求めていた人達です。もしかしたら彼らなら。」

小さな声で言った。寿達には聞こえていない様子だった。

寿「あのところでマナの女神様。僕と敦也、龍馬、総司、健司、博人、啓太、恭介、賢はどうなるんですか？死んだなら天国に行けば良いですか？」

寿はマナの女神に尋ねると意外な言葉が返って来た。

マナの女神「いいえ。貴方達はこのまま天国に行くのは惜しいと思えました。だから貴方達を転生させる事にしました。」

9人「「「「「はいーw(。o。)w?」」」」」」

寿「待つて下さいマナの女神様。転生つてあの二次創作でいう別の世界に行く。というあの転生ですか？」

マナの女神「そうです。貴方達には転生してもらおうと思います。」

敦也「ちよつと待つてくれよマナの女神様。どうして俺と寿達を転

生させるんですか？あと、俺達は何処の世界に転生するんですか？」

マナの女神「貴方達にはラブライブの世界に転生して頂こうと考えているのです。」

9人「!!!!!!!!ラブライブ!!!!!!!!!!!!」

ラブライブと聞いて寿達は驚いた。ラブライブとは寿達が前の世界で見えていたアニメの題名なのだ。アニメだけでなく映画も見たのでよく覚えている。特に寿と敦也、博人はラブライブが大好きな所謂ラブライバーなのだ。一作目と二作目のサンシャインもDVDをレンタルして何回も見ていたのを覚えている。彼らに誘われる様に龍馬、総司、健司、啓太、恭介、賢も暇な時に付き合わされて一緒に見ていた事があるので3人と同じラブライバーという訳ではないがラブライブの登場人物や内容を覚えているのだ。

博人「本当に！本当ですかマナの女神様俺と啓太と寿達はラブライブの世界に転生出来るって。」

博人は真っ先に食いついた。ラブライバーというのも理由だが推しのキャラクターに会えると思うと興奮してしまったのだろう。

啓太「博人落ち着いて。ラブライブの世界に行けるのが嬉しい気持ちにはわかるけど。」

啓太は幼馴染で従兄弟で親友の博人を苦笑いを浮かべながらなだめる。他の皆も苦笑いを浮かべたり、行ける事が嬉しいのはわかるが興奮し過ぎだろう。と呆れたりする者がいた。特に総司、健司、賢の3人が。

恭介「でも、どうして僕達をラブライブの世界に転生させる事にし

たのですかマナの女神様？」

賢「もしかして何か理由があるんですか。」

恭介と賢はマナの女神に理由を尋ねた。

マナの女神「そうですね。わかりました全てお話しましょう。実はラブライブの世界に危機が迫っているのです。」

9人「「「「「「ラブライブの世界に危機が迫っている？」「「「「「」」

マナの女神「そうです。聖剣伝説3に出てきた悪の勢力達がラブライブの世界を支配しようとして企んでいるのです。さらに厄介な事にμ'sを手に入れようと欲望に駆られて悪の勢力達に加担した悪質転生者達もいるのです。その者達はμ'sを狙っているのです。」

龍馬「でも、どうして僕達に頼むんですか？僕達よりも他の人に頼む事が出来たのではないですか？」

マナの女神「私自身ずっと探していたのです。新しい聖剣の勇者になるに相応しい人達を。それが、貴方達なのです。火事現場で人命救助をし、どんな時でも仲間を信じる姿。そしてさつき私が謝罪したとき非難もせずに逆に感謝をしていたその心は素晴らしい。と感じたのです。だから貴方達には大変ご迷惑をおかけしてしまう形になってしまいますがどうかμ'sとラブライブの世界を守って下さい。お願いします。」

マナの女神は寿達に頭を下げて頼んだ。応じてくれるかどうか不安だった。何故なら下手をすればまた死ぬ事になるかもしれないのだ。もし断られたら仕方が無いと思っている。しかし、彼女の心配は杞憂に終わる事となった。

9人「「「「「「わかりました。」」」」」」」

マナの女神「良いのですか？此方が頼んだとはいえ下手をすれば貴方達はまた死ぬ事になるかもしれないですよ。」

マナの女神はそう言うも寿達は迷いの無い目をしており、皆の代表であるかの様に寿は答えた。

寿「そんな大変な事態になっっているのに知らん顔なんかしたくありませんから、それにこれは僕達皆の総意です。」

寿がそう答え終えた後でマナの女神は寿と敦也達を見ると全員首を縦にふった。彼ら全員決心した顔をしていた。

マナの女神「有難うございます。皆さんには本当に感謝します。」

マナの女神は感謝の言葉を述べると次に寿が言葉を出した。

寿「マナの女神様。一つお願いがあります。」

マナの女神「何でしょうか寿？」

寿「僕と敦也、龍馬達を此処で修行させて下さい。このまま転生しても勝つ事が出来ないと思います。だから僕達は鍛えたいんです。」

マナの女神「どうしてですか？それに転生する時私の力で転生特典をつけて肉体を強化する事が出来ますよ。」

敦也「それじゃあ駄目なんです。それを選ぶと本当の自分の力ではなくマナの女神様に頼っているだけの偽りの力も同然だからです。」

そうなる俺も寿も龍馬達だって本当の意味で駄目になってしまう
と思うからです。」

7人「「「「「俺（僕）達からもお願いしますマナの女神様。」」」」」

マナの女神「やっぱり貴方達を選んで正解でした。わかりました貴
方達の修行を許可します。私も協力を惜しみません。あと貴方達に
は聖剣伝説3の技が使える様に出来る事とクラスチェンジが出来る
様に協力します。」

9人「「「「「有難うございます。」」」」」」

こうして寿達はラブライブの世界に行く前に悪の勢力達と戦う為
に、sを守る為に修行する事を選んだのだった。

修行終了そして・・・

寿達がマナの女神の元で修行してから長い年月が過ぎた。そして今日は修行最後の日であり聖剣の勇者の為の最終試験でもあった。

寿「閃光剣」

敦也「真空剣」

龍馬「バラの舞」

総司「青竜殺陣拳」

健司「白虎衝撃波」

博人「分身斬」

啓太「影潜り」

恭介「魔法陣斬」

賢「玄武百裂脚」

ドーーーーーン。ドカーーーーーン。ドドーーーーン。

今寿達はマナの女神が用意したラスボスの竜帝、仮面の道士、黒の貴公子を倒したのだ。正し本物ではなくマナの女神によって作られたコピーである為本物よりも実力は低い。しかし、強いのは確かで実戦の為にダメージを受ける様にもしている。当然寿達がマナの女神に頼んで実戦に慣れる為にこの設定にしたのである。

これまで寿達は聖剣伝説3に出てきたモンスターとボスモンスター、神獣や各勢力の幹部達と戦い勝利をした。たった今倒した竜帝、仮面の道士、黒の貴公子だけでなく。神獣や幹部達には苦戦を強いられたものの仲間との絆と連携や戦略を駆使して勝利をしたのだった。

最初クラスチェンジの為に寿達は前世でスポーツをしていたのでその経験を活かすために戦うタイプとクラス1を選んだのだ。

寿と敦也は剣道を恭介はフェンシングの経験があるのでファイターを、総司と健司は空手を賢はジークンドーの経験があるのでグリップラーを、龍馬は陸上競技と柔術を博人と啓太はダンスと柔術の経験がある上に3人は体の身のこなしが得意の為シーフを選んだのだ。長い年月を掛けてクラス2とクラス3になる為に必死に修業を続けてきた結果今の自分達があるのだ。

さらに、マナの女神から修行だけでなく、勉強もする様に言われたので寿達は修行と勉強を両立していた。敦也と博人は勉強を嫌がっていたが身体を鍛えるだけでなく転生後の事を考えて勉強も出来る様にしなければならぬ。と言われたので敦也と博人も仕方なく勉強する事にした。しかし、勉強したおかげでマナの女神が出すテストで良い点数を取ることが出来た。他のメンバーはというと寿と啓太は元から努力家の為前世でも学生時代の成績は良く。龍馬と総司と健司と恭介と賢は元々頭が良いので成績は問題無しだった。

マナの女神「見事です。寿、敦也、龍馬、総司、健司、博人、啓太、恭介、賢。貴方達全員最終試験問題なく合格です。これまで良く頑張りました。貴方達はクラス1〜3までの技と戦いの技術も身につけ、連携と戦略を駆使して勝利をものにしました。自分達の力でクラスチェンジも出来る様になる為に努力を惜しまずに修行を続けていた事で今の貴方達の力に繋がっている事を私はそう感じています。貴方達はきつと立派な聖剣の勇者になると信じています。」

9人「「「「「有難うございますマナの女神様。」」」」」」

マナの女神「ですが皆さんよく覚えておいて下さい。さっき貴方達が倒した竜帝達は私の力で作り出したコピーも同然。これから貴方達が戦う事になる竜帝達の力はきつと比べ物にならない程である事を覚えておいて下さい。ラブライブの世界でどう戦うかは貴方達の手にかかっています。」

寿「はい。分かっています。現にあのコピー達すらもあの強さでしたから本物はきつとより強大な強さを誇っていると考えています。僕達は絶対に油断せずに戦います。」

寿はマナの女神にそう言うのと今度は敦也達の方に顔を向けて言葉を発した。

寿「いいな敦也、龍馬、総司、健司、博人、啓太、恭介、賢。本物はきつと比べ物にならない強さだつて事を絶対に忘れるな。みんな油断せずに行こう。」

8人「「「「「おう!!」」」」」」

マナの女神「それを聞いて安心しました。では転生する前に説明しておかなければなりません。貴方達の生活の為の住居とお金は此方でご用意させて頂きます。そして貴方達は同じ年なのでラブライブの世界では原作に関わる前に中学1年生からスタートしてもらいます。まだ原作キャラ達には関わっていない時間軸にしています。よろしいですか?」

9人「「「「「はい。わかりました。」」」」」」

「マナの女神」では転生特典ですが此方の紙に書いて下さい。」

マナの女神にそう言われて寿達は記入していった。しばらくすると寿達は記入した紙をマナの女神に手渡した。

寿の記入した内容

- 1、テイルズオブヴェスペリアの主人公と同じ容姿。
- 2、悪質転生者がわかる為の道具（全員分）。
- 3、自分と仲間に聖剣伝説3の装備品とアイテムの使用。

敦也の記入した内容

- 1、テイルズオブグレイセスの主人公と同じ容姿。
- 2、仲間全員を長寿にしてほしい。
- 3、仲間が事故等に遭わない為の神の加護。

龍馬の記入した内容

- 1、テイルズオブイノセンスの主人公と同じ容姿。
- 2、自分と仲間に聖剣伝説3の魔法の使用。
- 3、聖剣伝説3に登場した精霊達を仲間にさせてほしい。

総司と健司の記入した内容

- 1、テイルズオブエクシリアの主人公と同じ容姿。
- 2、自分と仲間の前世の記憶をそのままにしてほしい。
- 3、マナの女神様と連絡が取れるようにしてほしい。

博人の記入した内容

1、テイルズオブシンフォニア―ラタトスクの騎士―の主人公と同じ容姿。

- 2、自分と仲間に聖剣伝説3のリンクアビリティの使用。
- 3、自分達がすぐクラスチェンジが出来る特別アイテム。

啓太の記入した内容

- 1、テイルズオブデスティニー2の主人公と同じ容姿。
- 2、自分と仲間の前世の亡き家族の形見の品。
- 3、前世で自分と仲間達が遊んでいたゲーム機とソフト。

恭介の記入した内容

- 1、テイルズオブハーツの主人公と同じ容姿。

- 2、高齢になってもあまり老けない身体にしてほしい。
- 3、病気にはならない身体にしてほしい。

賢の記入した内容

- 1、テイルズオブレジェンディアの主人公と同じ容姿。
- 2、自分と仲間全員が鍛える事による身体能力の向上。
- 3、聖剣伝説3のアイテムを収納する携帯用特殊ケース（全員分）。

マナの女神「全員記入されましたね。でもどうして皆さんは3つだけにしたのですか？普通ならもっと多く記入するはずなのに？」

寿「多く記入し過ぎたら自分自身を甘やかしてしまうと思ったんです。これも皆で決めました。」

マナの女神「偉い！貴方達は欲望に駆られる事も自分を甘やかす事はせずに自分自身きっちり決めるだなんて素敵です。そんな貴方達に私から特別サービスをします。」

9人「「「「「「特別サービス？」「「「「「」」

マナの女神「単刀直入に聞きます。貴方達は前世で亡くなった家族の人達と暮らしたくありませんか？」

マナの女神がそう言うのと彼らは驚きを隠せなかった。

敦也「待って下さい。どうして俺達の亡くなった家族の事を？」

マナの女神「貴方達の前世を調べさせて頂きました。貴方達は前世で悲しい思いをしていましたよね。両親に裏切られて親代わりとなった祖父母を失ってしまったり、両親や兄弟を交通事故、殺人、病気で亡くしてしまった。貴方達はそれぞれ境遇は違いますが大事な家族を失っていた経緯がある事を知りました。貴方達の前世を勝手

に調べたりして申し訳ありません。その代わり貴方達の家族の人達も転生させて一緒に暮らせるように此方で対応させて頂きます。」

龍馬「マナの女神様。お気持ち嬉しいですが、そこまでしてもらうのは逆に僕達の方が申し訳ないです。」

総司「そうですね。それに俺達の家族に断りも無く勝手に決める訳にはいきません。」

健司「それに生まれ変わっていたらどうするんですか？」

マナの女神「その心配はありませんよ。貴方達の家族の方々はまだ生まれ変わっていません。まだ天国にいますよ。それに貴方達の事を話したら会いたがっていた上に転生の事も説明したにも関わらず新しい世界であつても一緒に暮らしたいと言っています。」

博人「本当なんですか？」

啓太「僕達の家族がもう一度僕達と暮らしたいと言ってるんですか？」

恭介「本当に僕や皆は家族と暮らすことが出来るんですか？」

賢「俺達がいた世界とは違う世界であるのも承知の上でですか？」

マナの女神「はい。本当ですよ貴方達の家族の人達を呼んでいるので会って話してはどうですか？皆さん入ってきて下さい。」

マナの女神がそう言うのと次々と人が入ってきた。寿達が入ってきた人達を見て目を大きく見開き驚いた。それと同時に目に涙を貯め始めていた。その人達は寿達を見ると笑顔で微笑んでいた。

寿「爺ちゃん、婆ちゃん!!」

敦也「父さん、母さん、冬也（とうや）!!」

龍馬「父さん、母さん!!」

総司、健司「父さん、母さん!!」

博人「父さん、母さん、広美（ひろみ）!!」

啓太「父さん、母さん、愛子（あいこ）!!」

恭介「父さん、母さん、爺ちゃん、京香（きょうか）!!」

賢「父さん、母さん、銀（ぎん）、真（しん）、恵（けい）!!」

彼ら9人は涙を流しながら喜んでいた前世で亡くなった祖父母や
両親、兄弟に再会出来たのだ心の底から嬉しさが溢れていたのだから。
ら。

転生の始まり

前世で亡くなった家族と再会した寿達は前世で過ごしてきた事と時には辛いがあった事と火事で人命救助して死んだ事を話した。家族の人達は人命救助をした彼等を笑顔で褒めたのだった。泣いたり、笑ったりとしばらく家族と会話を楽しんでいた寿達はお礼を言う為にマナの女神の元に訪れていた。

寿「マナの女神様本当に有難うございます。何とお礼を言ったら良いか？皆の代表でお礼を申し上げます。」

マナの女神「いいえ。気にしないで下さい。私が好きでやった事ですから。それに貴方達にこれから悪の勢力と悪質転生者達との戦いへと送ってしまうのでせめて貴方方方出来る限りの事をしたかったです。勿論これからも協力させてもらいます。」

9人「……………有難うございますマナの女神様。……………」

マナの女神「では転生特典として貴方達をテイルズオブシリーズのキャラと同じ容姿にしますね。あと貴方達のご家族の方々もテイルズオブシリーズのキャラにしておきますね。勿論ご家族の皆さんにも話は通していますよ。それと精霊のフェアリー達も貴方達の事を話したら協力すると言ってくれました。彼女たちも貴方達の修業を見ていたらしくて本気でμ'sとラブライブの世界を守ろうとする心は本物だと理解して自分の意志で貴方達に協力したいと申されたのです。」

9人「……………本当ですか！……………」

マナの女神「ええ。もう彼女達はここに来ているので今呼びます

ね。皆こちらに来て下さい。」

「「「「「はい。マナの女神様。」」」」」」

寿達は驚いた。聖剣伝説3に出てきたフェアリーと8精霊が現れたのだから。

フェアリー「はじめまして。寿、敦也、龍馬、総司、健司、博人、啓太、恭介、賢。私たちも一緒にμ、sとラブライブの世界を守る為に協力させてもらうね。これから仲間としてよろしく。私達の事は呼び捨てで良いよ。」

ウイスプ「ちいーす。俺も皆さんと一緒にμ、sとラブライブの世界を守る為に頑張るッス。」

ノーム「悪の勢力と悪質転生者達の事は聞いたわい。μ、sのカワイコちゃん達を狙っておるのじゃろ。カワイコちゃんが狙われているならワシもお前さん達に力を貸すぞい。」

ジン「ワシも協力させてもらうダス。あんたらの修行している姿を見ていてどれだけ本気かよくわかったダス。一生お供させてもらうダス―。」

シエイド「修行している姿を見させてもらった。お前達の覚悟が本物だと理解した。我もよろこんで力を貸そう。」

ウンディーネ「あんさん達の思いしかと伝わったで、ウチも女としてしっかり力を貸したるわ。よろしゅう頼んまっせ。」

サラマンダー「お前達の本気と覚悟をこの目で見させてもらったぜ。悪の勢力と悪質転生者達の連中は俺も許せねえッ！オレも力を

貸すぜ!!」

ルナ「貴方達の μ sとラブライブの世界を守ろうとする意志に迷いが無い事がわかりました。もちろん私も力をお貸しします。」

ドリアード「すいません。私も他の皆さんと同じ気持ちですがお役に立てるかどうかわかりませんが、私に出来ることは何でもさせていただきます。」

9人「「「「「有難うこれからよろしく。」」」」」」

マナの女神「ではご家族の皆さんを呼んできてください。今から転生の手続きをしますから。」

寿「わかりました。じゃあ皆行こう。」

寿達は自分達の家族を呼びに行き、家族達と共に転生の手続きをしたのであった。

マナの女神「それでは転生させますね。では皆さん新しい世界でどうか元気に暮らしてください。聖剣の勇者達どうか μ sとラブライブの世界をお願いします。皆さんにマナの加護があらんことを。」

マナの女神の力で寿達は家族と共に転生し、その場から彼等の姿は消えたのであった。その後、3人の人物がマナの女神の元に現れた。

?「本当に彼らを聖剣の勇者にして大丈夫なのですかマナの女神様? 僕は彼等の事を知っている身として言わせてもらいますがあの9人は優しすぎるといっつか甘すぎる。とても μ sとラブライブの世界を守れるとは思えません。僕達だけで良かったのではないですか。」

1人はそう言うのと他の2人は複雑そうな顔をしていた。

マナの女神「人数は多い方が良いのです。それに貴方達がどれほど強くとも万が一の事を考えて配慮をしたのです。それに私は彼等を信じています。彼らなら、sとラブライブの世界を守る事を。あと転生後貴方達3人には悪の勢力と悪質転生者達からA―R I S Eを守ってもらいますよ。良いですね？」

?「・・・わかりました。」

彼はそう言うのと他の2人を連れて退場した。しかし彼の表情は未だに納得できない様だった。他の2人は彼の表情を見たがあえて何も言わなかった。いや言えなかったのだ。

?「マナの女神様はなんであいつらを。何が信じています。だ。信じるだけでは何もならないというのに。僕は絶対にお前が聖剣の勇者とは認めないからな・・・寿。」

彼はそう言うのと2人を連れてその場を去ったのであった。

原作介入前編

転生後の出来事 寿編

主人公の寿と仲間の敦也達は家族の人達と共にラブライブの世界に転生してから数年が経った。転生して寿達は中学1年からのスタートつまりラブライブの原作に関わる前のスタートとなっていた。幸い寿と敦也達の家は近くで寿と敦也達のご家族の人達との関係は良好である。寿達は家族とまた一緒に暮らすことが出来て嬉しそうであった。ちなみに寿と敦也達は同じ中学に通っており、中学生生活は前世で体験しているがまた中学生生活を送ることが出来て寿達は喜んでいた。さらにマナの女神は彼らに億単位のお金を用意してくれていたので生活に困る様子は無かった。

東京での暮らしの為に寿は休みの日に仲間達と情報収集と地域の散策をしたのだった。前世の違いはというとやはり音ノ木坂学院やUTX学院があることと他にも前世には無かった店やスクールアイドルが人気であるくらいで、他は前世にもあった東京の学校が存在していることは同じで他の地理については特に変わっていないことであつた。テーマパークや飲食店等も含めて。

寿達は中学校時代は不安はあつた。理由は慣れない東京での暮らしもある上に上手く学校生活を送れるかどうか不安だったが通っていた中学校はいじめや嫌がらせ等はなくクラスメイトも仲良くしてくれて学校生活は問題無かつた。授業やテストは転生前に修業と勉強を両立していたおかげか成績は良くテストはいい点数を取ることが出来ている。敦也と博人も勉強していて良かった。とマナの女神様に感謝していた程である。

しかし、中学生生活の中で悲しい事があつた。中学2年の時に賢の母

親の唯（ゆい）が前世と同じ心臓発作で亡くなってしまったのだ。前世で心臓発作で死んでしまったので念の為検査をしてその後心臓発作の原因が見つかって治療したものの数ヶ月後再発してしまい、治療空しく亡くなってしまったのだ。

これには寿と敦也達もショックだった。唯は寿達に色々とお親切にしてくれた人だったので残念であった様子。特に賢の妹の恵（けい）は母親の死を悲しんでいた。理由は前世で恵は母親の唯は自分が赤ん坊の頃に亡くなってしまった為写真でしか顔を知らなかった上に声も知らなかったのだから天国で再会したときはとても喜んでいれた上に転生したらまた暮らそうと約束していたのに結局僅かしか暮らすことが出来ずに死んでしまったのだ。しかし、賢とご家族の人達は唯さんの葬儀を終えて数日経ってから立ち直って頑張っていた。

現在寿と敦也達は高校1年となり、前世にも存在していた青山高等学校で高校生活を送っていた。偏差値は高い高校であったが彼等の成績は良かったので合格。さらに高校でもいじめや嫌がらせはなくクラスメイト達との関係は良好であった。

現在寿は敦也達と別れて学校帰りに祖母から頼まれた夕食の買い出しに行くためにスーパーへ来ていた。

寿「この世界に来てから本当に色々あったな。東京での暮らしに慣れる為に地域を覚えるなり、唯さんが他界したり、学校生活に慣れたりでホントに大変だったな。しかし、油断は出来ない悪の勢力と悪質転生者がいつμΣsを狙ってくるかわからないからな。でもまだ悪の勢力はおろか悪質転生者達の動きもないし、マナの女神様からの連絡も無いしな。今は何も無い事を祈るしかないか。」

寿はそう呟き終わると夕食の材料を買いに動いた。曲がり角を曲がった瞬間。

？「キヤツ」ドサツ

目の前の人とぶつかってしまった。その人は音ノ木坂学院の制服を着ていた。

寿「大丈夫かい？」

そう言うと寿は目の前の人に手を差し伸べる。

？「は、はい。大丈夫で…す。」

目の前の女の子は目を見開いて驚いたように寿を見ていた。そして、寿も目を見開いて驚いたようにその女の子を見ていた。その女の子は寿の推しのキャラでありμ'sのリーダー高坂穂乃果（こうさかほのか）だったのだ。

寿（心の声）「嘘だろ。穂乃果だ。本物の高坂穂乃果だ。まさかこんな所で会えるなんて。ラッキーじゃん。ああいけねえ。何考えてんだ。馴れ馴れしくすると悪い印象を与えてしまうからな。ここは普通にしなないと。」

我に返った寿は穂乃果に声をかけた。

寿「あの一。君大丈夫怪我は無い？」

穂乃果「は。はい！大丈夫です。」

寿「俺の不注意だった。すまない許してくれ。」

寿はそう言って穂乃果に頭を下げた。

穂乃果「いえ。私もちやんと前を見ていませんでしたから私の方こそごめんなさい。だから頭を上げて下さい。」

寿「そうか有難う。あれ？君顔が赤いけど大丈夫？もしかしてさっきぶつかった時に。」

寿は心配そうに聞いてみると。

穂乃果「あ！いえこれは違うんです。ごめんなさい何でも無いんです／＼」

そう言つて穂乃果は走つて行つてしまった。

寿「どうしたんだ？まあ大丈夫そうだし気にしないでいいか。あ！いけねえ婆ちゃんから頼まれてた夕食の買い出しの最中だった。早くしないと爺ちゃんと婆ちゃんにどやされる。」

その後寿は夕食の買い出しを済ませて自宅に帰つたのだった。

一方、穂乃果は現在自宅にて。

穂乃果「ハァー。今日スーパーで会った人カッコ良かったな。同い年の様だったけど、また会えるかな／＼」

そう言つて穂乃果は顔を赤らめた。その後夕食時穂乃果は家族から顔が赤い事を追求され、誤魔化すのに苦労した模様。

転生後の出来事 敦也編

今日は休日。敦也は昨日寿達に連絡をして暇なら遊びに行こう。と誘ったが予定があつた為、現在1人で外出している。弟の冬也を誘ったが学校の友達と遊びに行く予定があつたので結局1人で休日を過ごす事になったのだ。

敦也「ああー。やっぱり暇だな。寿達や冬也は予定があつたとはいえ俺だけは何の予定も無いからこうして外出したは良いが今度は何処に行こう。まだ時間あるしゲーセンに寄ってから帰るか。」

とその時であつた。

？「ちよつとやめて下さい。」

女の声でしたので敦也は見に行ってみると1人の女の子が3人のチャラ男に絡まれていた。その女の子を見ると敦也は目を見開いて見ていた。その女の子は敦也の推しのキャラである、sのメンバーの1人である絢瀬絵里（あやせえり）だったのだ。

敦也（心の声）「おいおい。あれって絵里だよな。本物のエリーチカじゃねえか。マジえりちじやん。本当に可愛いな。あ！いけねえあの連中に絡まれてんじゃねえか。てか誰も助けねえのかよ。ところであの連中まさか悪質転生者か？調べてみるか。」

そう言つて敦也は鞆からある物を取り出した。それはマナの女神に転生特典としてくれた悪質転生者を調べる為の道具マナナビゲーター略してマナナビである。形はポケットモンスター（ルビー・サファイア、エメラルド）に出てきた道具のポケナビをイメージしています。

敦也「反応が無い。という事はあいつ等は普通の人間か。全く前の世界にもああいう奴はいたけど、この世界にもやはりいるか。とにかく警察に連絡しておくか。それに早く絵里を助けないとヤバそうだしな。あとは普通に振る舞わないとな。」

そう言つて敦也は警察に連絡した後、絵里の方に向かった。

絵里「だから何度も言ってるじゃないですか。私は貴方達に付き合う気はありません。」

チャラ男1「そんなつれねえ事言うなよ。1人でいたみたいだしせつかくだから俺等と遊ぼうぜ。」

チャラ男2「そうだぜ。君みたいなカワイコちゃんを俺達と一緒に遊んであげるつて言ってるんだぜ。」

チャラ男3「そうそう。俺等と一緒に来れば良い所に連れて行つてあげるよ。」

絵里「だからやめて下さい。迷惑です。」

チャラ男1「うるせえ。いいから黙つて俺等と一緒に来い。」

チャラ男1が絵里の手を強引に掴もうとしたが、逆にその手は掴まれていた。

チャラ男1「イテテ。おい何しやがる。」

敦也「それはこっちの台詞だ。嫌がつている女を無理矢理連れて行つちやーいけねえな。いけねえよ。」

チャラ男2 「おい。そいつの手を離しやがれ。」

敦也 「はいはい。離せばいいんだろ。ほらよー。」

そう言う敦也はチャラ男1を他のチャラ男に向かって突き飛ばした。

チャラ男3人 「「ぐわあ！」」

突然突き飛ばされた勢いでチャラ男1は他のチャラ男の上に倒れて2人を下敷きにしてしまった。

敦也 「あ！ごめーん。勢い余って力強く離しちゃった。」

チャラ男1 「おいテメエ。ふざけんな今のワザとだろ。」

チャラ男2 「そうだ。テメエよくもやりやがったなあ。」

チャラ男3 「お前俺達の邪魔をして只で済むと思うなよ。」

敦也 「ならどうしよう。っっていうんだアンタらは。」

チャラ男3人 「「ぶっ飛ばす。」」

そう言つて3人は敦也に殴り掛かろうとするが、3人の拳は敦也には全く当たらなかった。しかし、無理も無かつた敦也は寿達と共に転生前の修行でボスマンスター、獣人や剣を持つモンスター等相手にしていただけでなく格闘技の経験者である総司・健司・賢と組み手をしていたので彼等の動きは敦也からしたら遅く感じるのだ。

敦也（心の声）「遅え。全くこいつ等本気でやっててこの程度か。まあ一般人で素人の力はこういうものか。こいつ等の動き無駄が多過ぎる。」

敦也「悪いな。手荒な事はしたくなかったがこのままだと他の人に迷惑になるからな。」

敦也はそう言うのとチャラ男3人を次々とパンチ一発でノックアウトしたのだった。

チャラ男3人「「ギャア。」」

敦也「これに懲りて少しは真面目にしろよ。」

その後警察が到着してその3人は連行されていった。全て終わった後敦也は帰ろうとしたその時。

絵里「あ。あのー!」

敦也「?」

敦也は振り向くとそこにさつき助けた絢瀬絵里がいた。

絵里「さつきは助けてくれて有難うございます。」

敦也「ああさつきの人。大丈夫だったかい?」

絵里「はい。貴方のおかげで助かりました。本当に有難うございます。」

敦也「礼は良いよ。俺はああいうのを見過ごせない質なだけだから

や。」

絵里「でも私は貴方に迷惑をかけてしまったから。」

敦也「気にしなくていいよ。それより危なかったな。気をつけろよ。ああいう奴は結構いるから。じゃあね。」

絵里「あ。あの待って下さい。何かお礼を。」

敦也「気にしなくていいよ。じゃあさよならー。」

そう言つて敦也は走り去つていった。それからしばらくして人が一人もいない離れた場所で敦也は。

敦也「ああ俺本当に本物の絢瀬絵里に会っただけじゃなく話しまでしてしまった。ああ俺つて幸せー。ハハハハ。」

嬉しそうな顔をして笑っていた。この場に人が一人もいないのは救いだったかもしれない。もし他に人がいたら不審者扱いされていただろう。

その夜絵里は。

絵里「はあー。私を助けてくれたあの人がカッコ良かったな。そういえば名前聞いてなかったな。助けてくれたお礼を言った時に聞いて

おけば良かった。私の馬鹿。ああー。あの人とまた会いたいな／＼
と呟いていた。

転生後の出来事 龍馬編

学校が終わり寿達と別れて帰宅をする途中で龍馬はカフェで寄り道をしていた。理由は今日学校で出された宿題をする為でもあるが両親が共働きなので早めに帰っても誰もいないので少し暇潰しをするのが目的でもあるのだ。頼んだ紅茶を飲みながら宿題をしていた龍馬はようやく宿題を終えたのだった。

龍馬「終わったー。これで今日の宿題は終わったわけだし、もう少しここで休憩してから帰るとしよう。」

しばらく休憩した後、龍馬は勘定を払って家に向かって歩いていった。その時。

？「えーんえーん。」

子供の泣き声があったので行ってみると小さな女の子が泣いており、その隣にいる女の子は困った様な顔をしていた。その女の子は音ノ木坂学院の生徒だった。

龍馬「あの一。どうしたんですか？」

？「実はこの子迷子みたいで、ずっと泣いててどうすれば良いのか困ってます。」

会話をしている最中龍馬は話をしている相手の顔を見ると何か思い出したかの様な顔をした。

龍馬（心の声）「あれ？この子何処かで見た顔だと思ったら、μ'sメンバーの1人である南ことり（みなみことり）じゃないか。こんな

所で会って大丈夫なのか？僕は这个世界じゃイレギュラーの存在だし。」

龍馬が困惑していると。

ことり「あのー。どうしました？ずっと私を見てますけど？」

龍馬「ああ！ごめんなさい。それでその子迷子になったんだってね。じゃあその子の親を探さないとね。僕に任せて。」

龍馬はそう言って女の子に駆け寄った。

龍馬「お嬢ちゃん。君迷子になったんだってね。誰と逸れたのお父さん？お母さん？」

女の子「ママと逸れたの。」

龍馬「そうか。じゃあお兄ちゃんが一緒に君のママを探してあげるよ。」

女の子「ホント！」

龍馬「うん！ホントだよ。」

女の子「有難うお兄ちゃん。」

龍馬「じゃあ一緒に行こう。」

ことり「あの待って下さい。私も一緒に探します。」

龍馬「良いの？」

ことり「はい。私も一緒にその子のお母さんを探すの手伝います。それに貴方一人にやらせるなんて申し訳ないですから。」

龍馬「わかった。有難う助かるよ。」

こうして龍馬はことりと一緒に子供の母親を探す事になったのだった。子供の言葉を頼りに探しているとようやく子供の母親が見つかったのだった。

子供「ママ！」

母親「雪！」

子供と母親は泣きながら抱きあった。そして親と子供は龍馬とことりにお礼を言うと言手を繋いで帰って行った。

龍馬「どうも有難う。君が手伝ってくれなかったら早く見つける事は出来なかったよ（＾＾）」

ことり「いえ／＼／そんな。私もあの子をほっとく訳にはいかなかったですから。」

龍馬「でも君が手伝ってくれたおかげであの子のお母さんを見つける事が出来たのは事実だよ。僕一人だと見つけるのに時間がかかっていたかもしれないから。」

ことり「そうですか。そう言ってくれると嬉しいです。あー！」

龍馬「どうしたの？」

ことり「実はお母さんの誕生日プレゼントを買う予定だったんです。でも時間が大分経ってしまってます。」

ことりは困った顔をした。すると龍馬は。

龍馬「じゃあ、その買い物僕も手伝うよ。」

ことり「え！良いんですか？」

龍馬「うん。大事な用事があつたにも関わらず一緒に子供の親を探すのに協力してくれたし、それなのに自分の用事が遅れてしまったら大変だからね。それに遅れてしまったのは僕の責任でもあるから。手伝わせて。」

ことり「有難うございます。じゃあお言葉に甘えさせてもらいます。」

その後龍馬はことりの買い物を手伝う為に一緒に彼女の母親の誕生日プレゼントを買いに行く事になった。

龍馬「どんなプレゼントにするの？」

ことり「それがまだ決まって無いんです。お母さんに感謝のこもったプレゼントにしようと思ってるんですけど、どんなプレゼントが良いかわからなくて。」

龍馬「それなら僕に任せてくれる。こつちだよ付いてきて。」

そう言つて龍馬はことりの手を優しく握つてゆっくり走りだした。

ことり「え！あのちよつと待って下さい。」

彼女はそういうも龍馬は何か集中してるかの様子で全然耳に入っていないかった。少しして龍馬は目的地に到着した無論ことりの手を握ったままで。

龍馬「着いたよ。ここだ。」

ことり「あの一／＼」

龍馬「ん。どうしたの?」

ことり「あの。手／＼」

龍馬「え?」

龍馬は彼女に言われて手を見るとことりの手を握ってしまっていた事に気づいた。気づいた瞬間龍馬はすぐに手を離れた。

龍馬「ごめん。急に手を握ってしまって、早くした方が良い思っ
てこんな事になっちゃって。本当にごめん。」

龍馬はそう言ってことりに頭を下げた。

ことり「いえ／＼少しびっくりしましたが大丈夫です。そんな頭
を下げて謝らないで下さい。」

龍馬「有難う。あと君のお母さんのプレゼントだけこの店で探し
て良いかな?」

ことり「え。ここはアクセサリーショップ?」

龍馬「付いてきてこつちだよ。」

龍馬は店の中に入ってことりを案内した。

龍馬「このブローチはどうかかな？」

そうやって龍馬はことりに見せたのはピンクの薔薇のブローチだった。

ことり「ピンクの薔薇のブローチ？」

龍馬「うん。ピンクの薔薇の花言葉は「感謝」なんだ。だから感謝の思いがこもったプレゼントとしてどうか。と思っただけけど駄目かな？」

龍馬はそう言うことりは。

ことり「いいえ。有難うございます。こんな素敵なブローチを探してくれてこれ買います。」

そう言うことりはレジへ向かいお会計を済ませた。

龍馬「良いの？僕が勧めたとはいえそれに決めて。」

ことり「はい。大丈夫です本当に有難うございました。」

龍馬「そう良かった。じゃあ早く帰ってお母さんにプレゼントしてあげて、それから気をつけて帰ってね。僕はこれで失礼するよ。さよなら。」

ことり「あ！ちよつとあのお名前。」

そう言うも龍馬は急いで家に帰ってしまった。

その夜南家では。

ことり「お誕生日おめでどうお母さん。はいこれプレゼント。」

ことり母「まあ有難うことり。開けても良い？」

ことり「うん良いよ。」

ことり母「まあ素敵な薔薇のブローチじゃない。」

ことり「うん。あとねお母さんピンクの薔薇の花言葉は「感謝」なの。だからお母さんに感謝の気持ちを込めて買ったの。」

ことり母「ことり有難う。でも花言葉に詳しくはななくて、知らなかったわ。」

ことり「ううん。実は今日親切にしてくれた男の人が教えてくれたんだよ。それにプレゼントも一緒に買うの手伝ってくれたの。」

ことり母「え！男の人それって誰なの？」

ことり「それが名前を聞こうとする前に帰っちゃって。確か青山高等学校の制服を着てたけど。」

ことり母「そうなの。その人青山高等学校の生徒さんだったの？」

ことり「うん！間違いはないよ。青山高等学校の制服を着てたから。」

ことり母「そうなの。分かったわ。その理事長さんとは知り合いだから後日聞いてみるわ。」

ことり「うん。ごめんねお母さん。」

その後部屋でことりは。

ことり「あの人が親切で優しくかったな。それに格好良かったし会ったからお礼を言いたいな／＼」

そしてことりはベッドで眠りについた。

転生後の出来事 総司と健司編

学校が終わった後、総司と健司は寿達と別れて現在ラーメン屋に来ていた。理由は両親は洋菓子店を経営しており、忙しい為に母親から「帰りは何か食べて帰って来て。」と言われたからである。それで二人はラーメン屋に来ているのである。

総司「しかし人が多いな。早く決めようぜ健司。」

健司「そうだな総司。早く決めて席に座ろう。」

食券のシステムの店なのでどうするか悩んでいるとようやく二人は決めて食券を購入した。健司は味噌ラーメンを、総司は限定メニューのスペシャル豚骨チャーシューメンにしたのだった。しかも総司がボタンを押すと売り切れになった。つまり総司が購入したのが最後だったのだ。総司と健司は食券を購入して空いてる席を探しに行こうとすると。

？「あー！凜が食べたかった限定メニューのスペシャル豚骨チャーシューメンが売り切れになってるにゃー！」

？「仕方ないよ。凜ちゃんまた次にしよう。」

2人の女の子の声が聞こえて来た。総司と健司は声のする方を見るとそこには見た事がある少女達だった。

総司「あれ？あの子はμ sのメンバーの星空凜（ほしぞらりん）じゃないか。」

健司「それにもう一人の子は小泉花陽（こいずみはなよ）じゃない

か。μ、sのメンバーの2人とこんな所で会うなんて。」

総司と健司は2人に声をかけた。

総司「ねえ君達どうしたの?」

健司「何か大きな声を出してたけど。」

凜「あ!ごめんなさい。」

花陽「すみません。お騒がせして。」

総司「どうしたんだい?」

凜「実は私が食べたいと思ってたスペシャル豚骨チャーシューメンが売り切れになって。」

花陽「それでこの子大きな声を出しちゃったんです。」

どうやら凜はスペシャル豚骨チャーシューメンが売り切れだったのが原因で大声を出してしまった様だった。総司はしばらく考えると自分が購入したスペシャル豚骨チャーシューメンの食券を出してきた。

総司「あの一。もし良かったらこれあげるよ。」

凜「え!良いんですか?」

総司「うん。俺は別のラーメンを買うから良かったら君が食べて。」

健司「おい。総司良いのか?」

花陽「そうですね。友達に譲ってくれるのは嬉しいですけど、せっかく購入したのに。」

総司「良いよ。また来たときに頼むから。」

凜「だったら何かラーメンを言ってください。貴方が余分にお金を使わせる訳にはいかないにや。」

総司「良いのかい？」

凜「はい！この食券を譲ってくれたのに何かお礼をしたいのでお願いします。」

総司「そうごめんね。じゃあそれで。」

そう言つて総司は凜に別のラーメンを言くと彼女は食券を購入して総司に渡した。凜と花陽は席に向かう途中に花陽は前から来た男とぶつかつて後ろに倒れそうになった。

花陽「きゃあ！」

健司「危ない！」

間一髪健司が倒れる前に花陽を後ろから抱きしめる様な体勢で助けたのだった。

健司「大丈夫？」

花陽「は！はい／＼／有難うございます。」

凜「かよちゃん大丈夫にや！」

花陽「うん大丈夫だよ凜ちゃん。この人が倒れる前に助けてくれたから。」

凜「有難うございます。かよちゃんを助けてくれて。」

健司「いや良いんだ。怪我が無くて良かったね。」

花陽「はい／＼／＼」

総司「ナイスキャッチだったぞ健司。」

健司「からかうな総司。それより早く席に着こうぜ。」

総司「わかった。じゃあね君達。」

その後総司と健司は席に着いて食券を店員に渡してラーメンを食べた。べて帰ったのだった。

現在、凜と花陽は帰り道の途中。

凜「スペシャル豚骨チャーシューメン美味しかった。満足にやー。」

花陽「良かったね凜ちゃん。」

凜「うん。それにしても食券を譲ってくれた人って格好良かったにやー。かよちゃんもそう思わない？」

花陽「え！そうかな。」

凜「そうにやー！あー！もしかしてかよちゃんは倒れそうになった時に助けてくれた人の方が良かったかにや。あの人も格好良かったし。」

花陽「ちよつと凜ちゃん何言ってるの／＼／」

凜「あー！顔が赤くなってる。凶星だにや！」

花陽「ちよつとやめてよ凜ちゃん恥ずかしい／＼／」

凜「あー！そういえばかよちゃんあの人達顔がそっくりだったけど、兄弟かにや。」

花陽「そういえば顔がそっくりだったね。名前で呼び合ってたし双子じゃない。」

凜「あーそっか。出来ればまた会えたら改めてお礼を言いたいにや／＼／」

花陽「そ…そうだね／＼」

こうして2人は会話をしながら家に帰ったのだった。

転生後の出来事 博人編

学校が終わった後、博人は悪の勢力と悪質転生者達との戦いに備えてランニングをしていた。

博人「はあ・はあ・はあ。悪の勢力と悪質転生者達といつ戦う事になるかわからないからなしつかり体を鍛えておかねえと。」

そう言いながら博人はランニングを続けていた。気づけば博人は神田明神まで来ていた。

博人「あれ？ここつて神田明神じゃないか。丁度良いぜ階段の往復も体を鍛えるのに良いからなやるとするか。」

博人はそう言うのと階段の往復をする為に神田神社の階段を走りながら登り始めた。

博人「ファイト！ファイト！ファイト！ファイト！ふうこりや足を鍛えるのに丁度良いぜ。そういえばここはあの子が希が巫女やってる所だったよな。まさか今日此処で出会うなんて事ないよな。」

？「わあ！」

博人はそう考えていた時、階段を登った所で巫女の姿をした少女がいた。しかも相手はさつき言ってた博人の推しのキャラである東條希（とうじょうのぞみ）だった。

博人「あ！」

博人は立ち止まると希は急に現れた博人に驚いていた。博人は立

ち止まりながら彼女を見ていた。

博人(心の声)「嘘だろ。マジで希じゃないか。此処に来れば会えるとは思っていたけど、今日此処で出会う事になるなんて。しかもアニメで見た事があるとはいえ間近で巫女服の希を見れるなんてラッキーだし。あーいかん。こっちは知っても希は初対面だから名前前は呼ばない様に気を付けねえと。」

希「あの一。どうしたんですか？さっきからじっと見つめて？」

博人「えー！あーごめんなさい。巫女服がとても似合っていたからつい見惚れてしまつて／＼」

希「え／＼」

博人「わあごめんなさい。何か変な事言っちゃつて(汗)」

希「あー気にしないで下さい。びっくりしましたけど褒めてくれて有難うございます。」

博人「そうですか良かった。ハハハハ。」

希「所で何やってたんですか？走つて来てたみたいですけど？」

博人「実はランニングをしてたんですよ。その途中でこの神社を見つけて階段往復もしようと思ったんです。」

希「そうだったんですか。何かスポーツとかやってるんですか？」

博人「ええまあ。そんな所です。それに体を鍛えておかないと体になまつてしまうので。」

希「フフフ。何か面白いですね貴方は。」

博人「え！何がですか？」

希「何かまではわからないですけど、貴方は何かの目的があつて取り組んでいると思うんですよ。そう何かと戦う為につて所が。良い意味の方で。」

博人（心の声）「え！まさか俺が悪の勢力達と戦う事に勘づいたのか？希はスピリチュアルパワーある訳だし。何かやばい。」

希「何て。ただそう思っただけですよ。そんなに気にしないで下さい。」

博人「ああそうですか。アハハハ。じゃあすいませんがこの神社の階段で階段の往復しても良いですか？」

希「良いですよ。でも体には気をつけて下さいね。」

博人「有難うございます。気をつけます。」

博人はそう言った後、階段の往復を始めた。時々その様子を希は見ている。掃除中に博人を見ていた最中に希は階段に足を踏み外してしまった。

希「キヤア！」

博人「危ない！」

上まで登ってきていた博人は倒れそうになる前に希を助けたの

だった。しかもお姫様だっこの状態で。その後ゆつくりと希を下ろした。

博人「大丈夫ですか！」

希「は！はい有難うございます／＼」

博人「良かった。綺麗な貴方が怪我なんかしたら台無しですからね。」

希「綺麗／＼」

博人「あーごめんなさい。また変な事言つて。俺そろそろ帰ります。すみませんでした。」

希「あ！ちよつと。あの一。」

博人は急いでその場を後にしたのだった。

自宅にて博人というと。

博人「はあー。何やってんだ俺は。完全に希に変な人って思われただろうな。なんてこった嫌われてたらどうしょ。」

家に帰ってきた博人はさっきの事を凄く後悔していたのだった。

一方、その頃希の方は家に帰ってきて、現在お風呂に入っている最中だった。

希「はあー／＼何やるこの気持ち今日会ったあの人の事を考えるとドキドキしてるわ。まさかウチはあの人の事を／＼」

そう考えた希だったがすぐに頭をぶんぶん振って否定しようとしていたのだった。

博人は嫌われたのではないかと不安になっていたがそれは杞憂に終わる様子であった。何故なら否定しているが希は博人に興味を示していたのだった。

転生後の出来事 啓太編

今日は休日で啓太はたまには1人で過ごそうと思いい街に来ていた。

啓太「やっぱり人が多いな。まあ休日だから当たり前か。折角だから映画でも見に行こうかな？」

映画館に向かおうと目的地の方に歩こうとしたその時。

？「邪魔だ。どけ！」

啓太「うわあ！なんだ今の男は危ないな。」

？「こらー返しなさい私のバック。」

啓太「あの！お婆さんどうしたんですか？」

老婆「さつき赤い帽子の男に私のバックを取られたのよ。赤い帽子の男見なかったかい？」

啓太「赤い帽子の男？あ！さつきの男ひったくりだったのか。わかりました僕に任せて下さい。貴方のバック僕が取り返してきます。」

老婆「でも良いのかい？」

啓太「任せて下さい。必ず取り返しますから。」

そう言っって啓太は急いでひったくりの男を追いかけた。

啓太「あ！見つけた。こらー！待てひったくり。」

男「げっ！クソー捕まってたまるか。」

男は急いで走って逃げようとするが啓太は足が早い為すぐに追いつき捕まえた。

啓太「さあ捕まえたぞ。大人しく盗んだ物を返せ。」

男「このヤロー。誰が捕まるか。」

男は殴りかかるが啓太は問題無く避けて背負い投げで撃退した。

男「ぐはあ。」

啓太「さあて。さっきのお婆さんにこのバックを返してあげないと。」

その時啓太の方に竹刀が振り下ろされた。

啓太「うわあ！何だ一体。」

？「貴方ですね！私のお祖母様のバックを盗んだ男というのは。」

啓太「え！ちよつと待って僕は違う。」

？「問答無用！覚悟しなさい。」

啓太は竹刀を難無く避けるがこのまま誤解されたままだと拉致があかない状態だった。

啓太「ちよつと止めるんだ。君は何か勘違いしているよ。僕の話が

聞いてくれ。」

？「勘違いも何もその手に持つてるバツクが証拠です。貴方がひつたくり犯だと言う事が。」

老婆「こらー！海未止めなさい！」

老婆はそう叫ぶと2人の間に割って入って来た。さらに警官もやって来た。

啓太(心の声)「え！海未って？あー！この子見た事があると思ったら、sのメンバーの1人園田海未(そのだうみ)じゃないか。じゃあこのお婆さんはこの子のお祖母さんだったの？」

海未「お祖母様どうして止めるんですか？この人はひつたくりなんですよ。」

海未祖母「馬鹿者！ひつたくりはこの人じゃない。ひつたくりはそこでひてる赤い帽子の男だよ。」

海未「え！」

海未祖母「それにこの人は私のバツクを取り返そうとしてくれた親切な人なのよ。それなのにアンタは何をやってるんだい(怒)」

祖母にお叱りを受けた海未は自分がとんでもない勘違いをしていた事によく気づいたのだった。それに気づいて彼女は顔を真っ赤にして。

海未「申し訳ありませんでした！まさかその人がお祖母様のバツクをひつたくりから取り返そうとしてくれた人だったなんて。すみま

せん。」

海未祖母「謝る相手が違うでしょ。下手に間違つてその人が怪我したらどうするつもりだったんだい。」

海未は祖母にそう言われると啓太の方を見て頭を下げた。

海未「申し訳ありませんでした。貴方がお祖母様のバックを取り返そうとしてくれた方だったなんて。知らなかったとはいえ貴方にはとんだご迷惑をおかけしてしまって本当にごめんなさい。」

啓太「あー。いや誤解が解けて良かったよ。正直犯人扱いされるのは辛いからね。」

海未祖母「ウチの孫がとんだご迷惑をおかけして、本当にごめんなさい。」

啓太「いえいえ。気にしないで下さい。それにお孫さんをそんなに叱らないで上げて下さい。やり方はともかくお祖母さん思いの良なお孫さんじゃないですか（・☒・）」

海未祖母「どうもすみません有難うね。」

警官「じゃあ詳しい話を聞きたいので皆さん交番までご同行願えますか?。」

警官はそう言うのと啓太と海未と海未の祖母は合意して近くにある交番までひったくりを連れて同行した。そして交番にて啓太と海未の祖母はひったくりの事を含めて全ての経緯を説明したのだった。

警官「そうだったんですか。その君どうも有難う。ひったくりを

捕まえてくれて大手柄だよ。」

海未祖母「本当に有難うね。バックを取り返してくれて。」

海未「本当に有難うございました。お祖母様のバックを取り返してくださって、それから先ほどは本当にすみませんでした。貴方を犯人扱いして。」

啓太「もう謝らなくていいですよ。僕の無実は証明されましたし、貴方のお祖母さんのバックは戻ったうえにひったくりは逮捕されましたから気にしないで（？?）」

海未「あ、有難うございます／＼」

啓太「じゃあおまわりさん。僕はもう行って良いですか？」

警官「あ、はいどうぞ。ご協力有難うございます。」

啓太「ではお婆さんひったくりには気をつけて下さいね。そちらの人もさようなら。」

そう言って啓太は交番を出ていき、気を取り直して映画館へ向かった。

啓太「やれやれ。とんだ目にあつたな。まあ無実は証明されたし、映画を見に行こう。」

夜、海未の自宅にて。

? 「お祖母様、お姉様大丈夫ですか!」

海未祖母 「おやどうしたんだい海人そんなに心配そうな顔して。」

海未と祖母の前に心配そうな顔して待っていたのは海未の歳の離れた弟の海人（かいと）だった。

海人 「そりや心配しますよ。お祖母様がひったくりにあつたつて警察から電話があつたんですから。」

海人がそう言うのと海未と海人の両親もやって来た。

海未父 「母様大丈夫だったんですか。ひったくりにあつたと聞いて心配だったんですよ私達は。」

海未母 「そうですよお義母様。もしかしてお怪我とかされたのではないかと心配したんですよ。ご年齢の事もありますし。」

海未祖母 「私をいちいち年寄り扱いするんじゃない。全く心配症とどうか何というか。この通り私はピンピンしておるわ。それにひったくりは逮捕されたし、盗られたバックは親切な格好良い男性が取り返してくれたわい。」

海未父 「え! そうなんですか。所でその男性というのは何処の誰なんでしょうか?」

海未祖母 「それが名前は聞いてないからわからないんだよ。歳は海未と同じ年くらいだったんだけどね。」

海未母「そうですか。出来ればその殿方のお名前と住所が分かれば私達もお礼を言いたかったのですが。」

海未父「そうだな。私も母様のバックを取り返してくれたその人にちやんとお礼を言いたいと思っただが。名前もわからないのでは難しいな。」

海未祖母「しかし、本当にあの男性は格好良いだけでなく正しい人格の持ち主だったよ。見ず知らずの私のバックを取り返してくれたうえに海未が犯人扱いしたにも関わらず許してくれるなんて、寛大な精神を持つておるよ。今時の若い者としては珍しいよ。」

海未「ちよつとお祖母様余計な事は言わないで下さい。」

海未父「ん？どういう事だ海未。それに母様も。」

海未祖母「ああ実はね（笑）」

海未の祖母は今日あった事を全て話した。

海未父「ハハハハ（笑）それでその人をひったくりと間違えて竹刀で叩こうとしたわけか。しかも全部避けられていたと。」

海未母「まあ（笑）海未さんらしいといえましょうね。時にそそっかしい所がありますし。」

海人「そうですね（笑）でもお姉様の攻撃を交わす人がいたなんて驚きですよ。」

海未「お父様とお母様と海人まで。私だって好きで間違えた訳じゃないですよ。それにその人にはしっかり謝罪しました。」

結局、海未は祖母だけでなく両親と弟にまでその事を笑いのネタにされてしまったのだった。

部屋にて海未は。

海未「もうお祖母様がお父様とお母様と海人に話したせいで酷いほど笑いのネタにされてしまいました。しかし、あの殿方は確かにお祖母様の言うとおり格好良いだけでなく正しい人格のお方だった。しかもあの時の笑顔素敵だった／＼もし出来ればまた・・・会いたい／＼」

海未は気づいていないだろうが彼女は啓太に一目惚れをしてしまったのだった。

転生後の出来事 恭介編

今日学校帰りに恭介は妹の京香との待ち合わせの約束をして待ち合わせの場所に来たもののまだ十分に時間があつたので医学書を買おうと思ひ近くの本屋に来ていた。恭介は前世で外科医をやつていたのでこの世界でも将来は外科医をしようと考え、より知識を増やそうと考えてどの医学書を買おうか迷つていたのでつた。

恭介「うーん。どの医学書にするかな家にも医学書はあるけど、新しいの無いかな？」

恭介は医学書を探していた時。脚立に乗つて本を取ろうとしていた少女がいた。

？「うーん、うーん。」

中々届かないだけでなく、本を取ることが出来ず苦戦している様子だつた。

恭介「あー。大丈夫かなあの子下手したら落ちてしまうな。しょうがない危ないし代わりに取つてあげよう。」

そう考えた恭介は少女の方に向かつたその時。

？「キヤア。」

恭介「危ない。」

少女は脚立から落ちたが間一髪で恭介が受け止めて助けたのだつた。

恭介「大丈夫？」

？「はい大丈夫です。有難うございます……ます。」

少女は恭介を見るとまるで時が止まったかのように顔を真っ赤にしてじつと恭介を見つめていた。恭介も少女の顔を見て思い出した様な顔をした。

恭介(心の声)「あれこの子は確かμsのメンバーの1人西木野真姫(にしきのまき)じゃないか？この子こんなに華奢な体なんだな。って何考えてるんだ僕は。」

恭介「ねえ君大丈夫怪我は無い？」

真姫「はい／＼有難うございます。」

恭介「良かった怪我が無くて。大丈夫かい何か本を取ろうとしたけど？」

真姫「はい。あそこにある参考書を取ろうとしたら落ちてしまっ
て。」

恭介「そうだったんだ。わかった危ないから僕が取ってあげるよ。」

真姫「でも悪いですよ。」

恭介「良いから、良いから。任せて。」

恭介は代わりに脚立に乗って彼女が欲しがっている参考書を取ってあげた。

恭介「はい。これで間違いないかい？」

真姫「あ、有難うございます。」

恭介「うん。気をつけてね（・☒・）」

真姫「／／／」

真姫は恭介にお礼を言って、恭介が笑顔で返事をする顔を見つ赤にして去って行った。

恭介「さてと僕も新しい医学書を買って待ち合わせの場所に戻らないと遅れたら京香が怒るからな。」

しばらくして恭介は店員に聞いて新しい医学書は無いか聞くと新しい医学書の所まで案内してもらった。いくつかの新しい医学書が置いていたので、恭介はしばらく考えると2冊医学書を購入をして再び京香との待ち合わせの場所まで向かった。待ち合わせ場所に戻るとまだ京香は来ていなかったので来るまで待っていた。それから10分後に京香がやって来た。

京香「ごめんね兄さん遅くなって。」

恭介「大丈夫だよ京香。僕はそんなに待って無いから。」

京香「有難う兄さん。それじゃあ早速だけどお買い物付き合っつて。」

恭介「了解。何を買うの？」

京香「今話題の新しい服を買いに行くの。だからお願い兄さん。」

恭介「はいはい。わかったよ荷物運びつて訳だね僕は。」

京香「ごめんね兄さん。終わったらハーゲンダッツのアイス奢るか
ら。」

恭介「しょうがないな。可愛い妹の頼みだから付き合っ
てあげるよ。」

京香「やったー。流石兄さん大好き。」

恭介「全く京香は（笑）」

そして恭介は妹の京香の頼みで服を買いに行く事になった。

その頃、自宅にて真姫は。

真姫「何なのこの気持ち。今日あった人の顔が頭から離れない。一
体どうしたっていうのよ。正直イミワカンナイ／＼」

真姫は今日本屋で出会った恭介の事がとても印象に残っていたの
だった。

転生後の出来事 賢編

休日の夕方、家族の夕食の買い出しで賢はデパートに来ていた。

賢「さあて。今日の夕食はハンバーグと野菜サラダにするか。早く食材を買いに行かないとな。良い食材を選ばないといけないし。」

賢が食材を買いに行こうとした瞬間。

? 「ちよつと止めなさいよ!」

大きな声でしたので何事かと思い、賢は見に行ってみる事にした。すると、女の子が他の小さな女の子2人と男の子1人と一緒に柄の悪そうな男1人に絡まれていた。

男「だからよ嬢ちゃん。さつきアンタの妹が俺にぶつかってきたおかげで右足を痛めたって言ってんだろ。この痛みだと折れてるかもしれねえわ。だから治療費払え!」

? 「馬鹿言わないで。それにさつきから聞いていたらアンタからぶつかってきたんじゃない。それなのに治療費払えですってふざけるんじゃないわよ。」

男「何だと!女だと思つて調子に乗ってんじゃないやねえよ。治療費払えば勘弁してやるって言ってるだろうが(怒)」

? 「お姉様。」

? 「お姉ちゃん。」

? 「・・・姉ちゃん。」

男はしつこく治療費を要求しており、側にいる子供達は怯えていた。賢は女の子達を見ると見覚えがある人物だと気づいた。

賢（心の声）「あれは確かμ sのメンバーの1人である矢澤にこ（やざわにこ）じゃないか。それに側にいる子供達はあの子の妹と弟で確か名前はこころ、ここあ、虎太郎だったな。てかマズイぞ。あの野郎今にも手を出しそうな雰囲気だ。早く助けないと。」

賢はすぐに彼女達の方に向かった。

男「このアママもう容赦しねえ。こうなったら力ずくで払わさせてやる。」

男がにこに手を出そうとしたがその手は掴まれた。

賢「おい。女と子供に乱暴働くとは一体どういう神経してんだ。」

男「何だテメエ離しやがれ。」

男は振り解こうとするが全然意味がなかった。何故なら賢の力は強く男の力では振り解く事は出来ないのだ。

男「こらあ離せ。この女の妹が俺の右足にぶつかったから折れてんだ。治療費請求してんだよ。」

賢「はあー。あのさあさつきから見てるけど、その右足動いてるじゃないか。折れてんなら動く訳ないだろ。そんなの小学生でもわかるぞ。それとも小学生以下の頭なのかお前は。」

男「なっ！テメエ図りやがったな。」

賢「うるさいな。お前嘘ついてこの人達から治療費請求するのが目的だったんだろ。この人達に謝れよ。」

男「何だと！何で俺がこいつ等に謝らねえとなんねえんだ。」

賢「あのなあ。この人達から嘘言つて治療費請求しようとしただろ
うが男なら謝るのが当然だろ。」

男「コノヤロー！調子に乗るなあ。」

男は賢に殴りかかるが格闘技の心得がある賢は楽々とかわした為
かすりもしなかった。

賢「やれやれ。手荒な事はしたくなかったが、言っても分からない
なら仕方が無いな。」

賢は男の後ろに回り込み関節技をかけた。

男「イテテテ！止めろ離せ。」

賢「だったら答えろこの人達に嘘言つて治療費を請求していたのか
どうかを正直に言わないともっと痛くするぞ。」

男「わかった。正直に言う。右足が折れたなんて全部嘘だ。遊ぶ金
欲しさの為にこいつ等に金を要求しただけなんだ。だから離してく
れ。」

賢「そこの貴方！」

こいつ「はー！」

賢「今すぐ警備員を呼んでくれ。こいつを引き渡さないといけ
ないから早く。」

にこ「はい。」

そうやってにこは警備員を探しに行った。少しして近くに警備員
がいたのですぐに警備員を連れてやって来た。そしたら男が声をあ
げて。

男「警備員さん助けて下さい。この男がその女の子とそこにいる
子供達を恐喝して金を要求してたんですよ。僕は止めようとしたら
逆に関節技をかけてきたんです。早く彼奴を警察に引き渡して下さ
い。」

警備員「何だつてじゃあその男がこの女の子と子供達に手を上げよ
うとしたのか。」

男「はいそうです。」

にこ「違います。犯人はその男であの人は違います。」

にこ「そうです警備員さん。悪いのはその人です。」

にこ「あの人は私達を助けてくれたんです。」

虎太郎「・・・その人は嘘つき。」

男「ああ可哀想にあの人にそう言えって言われてるんだね。」

警備員「この人はこう言ってますがどうなんですか貴方は！」

賢「俺は違いますよ。その男の言ってる事は出鱈目です。」

男「何を言ってるんだ。犯人はお前だろそれとも僕が犯人だって言う証拠はあるのか？」

警備員「彼はこう言ってますがどうなんですか？」

警備員は賢の方を睨んだ。男は勝ち誇ったかのように笑っていたが賢は動じる事は無くこう言った。

賢「証拠ならありますよ。スマホの録音にね。疑うなら確認して下さい。あと、その男を逃げない様に取り押さえて下さい。」

警備員は賢の言うとおりにした。確認すると賢はスマホを取り出して、さっきの会話を流した。実は賢は万が一の為にスマホに録音アプリを起動させておいたのだった。それを流した途端男は顔を青ざめる。

賢「どうですか警備員さん。これでどっちが嘘つきかわかりましたか？」

警備員は今度は男の方を睨んだ。

警備員「どういう事かね。さっき君が言ってる事と全く違うね
(怒)」

男「ええいちくしょー。こうなったら。」

警備員「ぐわあ！」

「ここあ「キヤアー。」

何と男は警備員の一瞬のスキをついて、ここあを人質にしたのだった。しかもナイフを取り出した。

「ここ「ここあ！」

「こころ「ここあ！」

虎太郎「姉ちゃん！」

警備員「こらあ止めなさいその子を離すんだ。」

男「うるせー。こうなったらヤケだ。おいこのガキを痛い目に遭わせたくなかったら金を寄越せ。」

「ここあ「イヤー！助けて（泣）」

「ここ「ここあを離しなさい。」

男「だったら金を寄越せ。そしたら離してやる。」

賢「その必要は無い。痛い目に遭うのはお前だ。」

男「なっ！お前いつの間に。ぐわあ！」

賢はすきをつけて距離を詰めて蹴り上げた。当たった所は男の急所の1つのある所である。賢は人質になっていたここあを助けた。

賢「大丈夫かい？お嬢ちゃん。」

「ここあ「は！はい有難う。」

賢は優しく声をかけて頭を撫でた。一方男はあそこを蹴られて悶絶していた。

その後、男は警備員に取り押さえられ、警備員が連絡した警察に連行されたのだった。それから警備室でここ達は今までの事を全て警備員に説明をしたのだった。

警備員「そうだったんですか。大変失礼しました。イヤー済まなかったね君。まさかこの人とこの子達の言うとおりだったなんて。そのせいであんな事になってしまつて本当にすみません。」

ここ「本当にごめんなさい。私達を助けようとしてこんな騒ぎになつてしまつて。」

「こころ、ここあ、虎太郎「ごめんなさい。」」

賢「まあ誤解が解けて良かったです。でも気をつけて下さいよ警備員さん。俺がその子を助けたから良かったですけど、一歩間違つたらその子は殺されてたかもしれないですよホントに。」

警備員「はい仰る通りです。本当に申し訳ありませんでした。」

ここ「あのさつきは妹を助けてくれて有難うございます。」

こころ「ここあを助けてくれて有難うございますお兄さん。」

ここあ「有難うお兄ちゃん助けてくれて。」

虎太郎「……ありがとー。」

賢「気にしなくて良いよ。所で警備員さんそろそろ俺行っても良いですか？大事な用事があるので。」

警備員「そうですね。わかりましたどうぞ行って下さい。」

賢「どうも。じゃあねお嬢ちゃん、坊や達。貴方も気をつけてね。」

にこ「あの待って下さい。何かお礼を。」

賢「礼なんか良いですよ。それじゃあさよなら。」

そう言つて賢は警備員の部屋から出ていった。

賢「やれやれ。とんだ災難だったな。急いで買い物しねえと銀達が待ってるからな。」

賢はそう言つて急いで買い物に行き夕食の食材を買つて帰つたのだつた。

一方その頃自宅にてにこは。

にこ「はあー。今日は大変だったけど、助けてくれた人イケメンだったなー。もしまた会えたらお礼がしたいな／＼」

にこはいつの間にか助けてくれた賢を意識していたのだった。

原作介入後編 廃校阻止の対策

ことりの母であり音ノ木坂学院の理事長の南ひなの（みなみひなの）は現在青山高等学校の理事長と青山高等学校の理事長室で会っていた。会っている理由は以前娘のことりに親切にしてくれた男子高校生を調べる為に青山高等学校の生徒の名簿のコピーが欲しいというのも理由だが本題は音ノ木坂学院の廃校の阻止の為に共学化を検討している為テスト生を何人かこちらに回して欲しいというのが一番の理由だった。

理事長「そうだったんですか。わかりました南さん。私も出来る限りのお手伝いをさせて頂きましょう。私としてもあの学校が廃校になってしまうのは辛いですからね。」

ひなの「有難うございます。こちらの都合で無理なお願いをしてしまつて。」

理事長「いえいえ南さん。そんなに気になさらないで下さい。私と貴方は学校の理事長としての責任を持つ者ですし、廃校を何とかしたいという貴方のお気持ちはわかりますから。」

ひなの「お心遣いを感謝致します。」

理事長「ではこちらが我が校の男子生徒達の名簿のコピーです。正直これは個人情報情報の一つとして簡単に渡して良いものではありませんが事情が事情ですし、貴方は信頼出来る方ですからお渡しします。ですが気をつけて下さい。何度もおっしゃいますが個人情報のもので紛失はしないで下さい。」

ひなの「はい責任を持ってこちらは預からせて頂きます。それではまた後日テスト生の件でお伺いさせて頂きますのでよろしくお願います。では失礼致します。」

そう言つてひなのは名簿のコピーを鞆に入れて理事長室から退室をしたのだった。廊下を歩いていて途中ひなのはハンカチを落としてしまったが本人は気づいている様子はなかった。そこへ偶然通りかかった龍馬が声をかけた。

龍馬「あの一。すみませんハンカチを落としましたよ。」

ひなの「え！あらいけないごめんなさい。拾つて下さつて有難うございます。」

龍馬「いえ。気をつけて下さいね。失くしたら大変ですから。」

ひなの「はい有難うございます。」

龍馬「では失礼します。」

そう言つて龍馬は頭を下げてその場を去つた。

ひなの「あの人親切で礼儀正しい人だったわね。」

ひなのは龍馬の親切で礼儀正しい対応に感心していた。

その夜、ひなのは娘のことりを呼んで以前ことりに親切にしてくれた男子生徒を名簿から見てもらう事にした。

ひなの「ことりちよつと良い?」

ことり「何お母さん?」

ひなの「今日青山高等学校の理事長さんから青山高等学校の男子生徒の全員の名簿のコピーを貰ってきたの。悪いんだけどこの中から以前親切にしてくれた人がいないか見てほしいんだけど良いかしら?」

ことり「うんわかったよ。」

ことりはそう言うときつそく男子生徒の名簿を調べていった。ま
ず3年生から調べるも載っていないかった。2年生の方を調べるもそ
の名簿にも載っていない。最後に1年生の名簿を調べてみると。

ことり「あ!お母さんあつたこの人だよ。」

そう答えるときとりはその人物を母であるひなのに教えた。ひな
のはその人物を見ると。

ひなの「あら!?!この人。」

ことり「え!お母さん知ってる人。」

ひなの「ええ今日青山高等学校から帰る途中で私ハンカチを落とし
てしまったの。その時にハンカチを拾ってくれた人なの。」

ことり「そうだったんだ。それにこの人私と同じ高1だったんだ。
所で名前は?」

ひなの「えーと名前は高梨龍馬って書いてあるわ。あの時親切にし

てくれたのもそうだけど何だか優しそうな人ね。」

ことり「うん。あの時親切にしてくれたし、悪い人じゃないよお母さんこの人。」

ひなの「へーことりがそこまで言うなんてどんな人なの。」

ことり「実はね。」

ことりはあの時の事を説明した。自分がお母さんの誕生日プレゼントを買いに行く途中に子供が迷子になって困っていた時に一緒に子供の母親を探した事、一緒に誕生日プレゼントを探してくれた事、手を握られた事等を全て話した。

ひなの「そうだったの。迷子の子供を助けるだけじゃなくて、ことに親切にしてくれるなんて良い人ね（笑）」

ことり「お母さん何で笑ってるの。」

ひなの「フフフ。ことりにもようやく春が来たんだなって思ったの。」

ことり「ちよつとお母さん何言ってるの。違うからお母さんが思ってる事とは全然関係無いから？（？　？・？―？・？　？）？」

ことりは顔を真っ赤にして慌てて否定し部屋に戻ってしまった。

ひなの「フフフ。ことりったら嘘を言うの下手ねえ。あの様子だよやっぱり当たりね。だけどことりが恋をするなんてね。私の娘はいえ今まで子供だとばかり思っていたのに恋愛をする位までになっちゃって。小学生や中学生の時は恋愛すらしていなかったのに。」

しばらくひなのは考えるとようやく決心した。

ひなの「決めた。この人を高梨龍馬君をテスト生に採用しよう。あと出来れば何人か他にもテスト生が欲しいわね。明日青山高等学校に電話してみよう。」

ひなのは龍馬をテスト生の1人に採用する事を決めたのだった。聖剣の勇者達が原作に関わる日が着々と近づこうとしている事だ。ただ彼等は知らない。

テスト生の検討

ひなのは青山高等学校の理事長に電話をしてもう一度面会をする事となり、テスト生の話をする為に青山高等学校の理事長室に再び訪れていた。

ひなの「本当に有難うございます。テスト生の事でまた面会に応じて下さって。」

理事長「いえいえ南さん。何度もおつしやいますが私も音ノ木坂学院が廃校になってしまふのは辛いですし、好きでやっているので気にしないで下さい。」

ひなの「有難うございます。それでテスト生の事なのですが、1人お聞きしたい生徒がいるのですがよろしいでしょうか？」

理事長「はい良いですよ。それでその生徒は誰ですか？」

ひなの「1—Aの高梨龍馬君の事なのですが彼はどんな人なんですか？」

理事長「ああ高梨君ですか。彼は優秀な生徒ですよ。成績はクラスでトップである上にどの教員からの評価においても授業態度も真面目で時には率先して手伝いをしてくれる等人としても素晴らしい生徒ですよ。」

ひなの「そうですか。高梨君はとても優秀で素晴らしい生徒なんです。もう一つお聞きしたい事があるのですが、3年生以外で彼以外にも成績や人格において良い生徒はいませんか？」

理事長「そうですね。同じ1年生でいうと同じ1—Aの手塚君と本

宮君、1―Bの北郷君と宮野君と杉村君、1―Cの双子の遠野総司君と遠野健司君と浅見君、他1年生と2年生でいうと……。」

理事長は各クラスで成績が良い男子生徒や良い人格者の男子生徒達の説明をしていった。ようやく理事長は一通り男子生徒達の説明を終えたのだった。説明を聞き終わったひなのはしばらく考えようとようやく声を出した。

ひなの「そうですか。有難うございます。ではこちらの用紙にテスト生に採用したい生徒の名前を記入させて頂いてもよろしいですか？」

理事長「はいどうぞ。」

ひなのはさっそくテスト生に採用したい男子生徒の名前を記入していった。記入した男子生徒は以下のとおりである。

1―A 手塚寿 高梨龍馬 本宮啓太

1―B 北郷敦也 宮野博人 杉村賢

1―C 遠野総司 遠野健司 浅見恭介

音乃木坂学院のテスト生は聖剣の勇者達のメンバー達選ばれたのだった。

ひなの「ではこちらの用紙に書いている生徒の方をお願いします。」

理事長「はいわかりました。でも南さん本当によろしいのですか？他にも多くの生徒がいらつしやいますか？」

ひなの「ええ。実は他校から4月から3年生になるにも関わらずテスト生を引き受けてくれた生徒がいるんです。あと、知り合いに中学校の教師をしている人もいます。4月から入ってくる新入生の中にもテスト生の男子生徒がいるんです。それにそちらのご厚意にこれ

以上甘える訳にはいかないんです。」

理事長「そうですね。わかりました。ですが南さんそんなに気を遣わなくても大丈夫ですよ。私も出来る限り廃校阻止の手伝いをさせて頂きますから。」

ひなの「本当に有難うございます。ご協力感謝致します。」

そう言つてひなのは青山高等学校の理事長に頭を下げたのだった。その後今後の事について話し合いテスト生に関しては理事長が寿達に伝える事になった。用事を済ませたひなのはお礼を言つてから帰つたのだった。

その頃、寿達が転生した場所では。

マナの女神「寿達がラブライブの原作に関わる日が近づいて来ますね。何としても悪の勢力と悪質転生者達の好きにさせる訳にはいきません。その為に寿達聖剣の勇者達には頑張ってもらわなければならぬ。それに他からやって来るテスト生はほとんど悪質転生者ばかり、彼等に負担を掛けない為にも私も出来る限り力にならなければ。」

マナの女神は悪の勢力と悪質転生者達と戦う寿達の身を案じていた。

突然の呼び出し

寿は悪の勢力と悪質転生者達の存在に警戒しながらもいつもの様に学校生活を送っており、いつも通りに授業を受けていた。現在寿は休み時間敦也達と昼食を食べていた。考え事をしていると不意に声をかけられた。

敦也「おーい寿聞こえてるか。」

寿「あ！ごめん何だ敦也。」

敦也「何だ。じゃねえよ。どうしたんだ寿何か考え事してたみたいだけど。」

寿「ごめん。ちよつと悪の勢力と悪質転生者達の存在が気になつてさ。」

敦也「!!そうか。やっぱり気になるよな。」

龍馬「そうだね。今の所マナナビの反応は無いし、この数年悪の勢力はおろか悪質転生者の動きすら無いからね。」

総司「ああ。未だに何も無いというのにもかえって不気味な気もするからな。」

健司「それにマナの女神様からも悪の勢力はおろか悪質転生者の詳細についての連絡すら無いからな。」

博人「まあ今は何も無い事を祈ろうぜ。下手して誰かが傷ついたり、死ぬ事になるなんて考えたくもないからな。」

啓太「そうだね。でももしそいつ等が現れた時は僕達が力を合わせて立ち向かわないといけないね。」

恭介「その通りだ。何れにせよ僕達は悪の勢力と悪質転生者達と戦う事になるんだからね。」

賢「それにμsのメンバー達の事もそうだが、俺達の家族や周りの人達が巻き込まれない様に気を付けないとならないからな。」

寿「そうだな。その為にも頑張らないとな俺達。」

寿達は決意を新たにして昼食を食べた。休み時間が終わると午後
の授業を受けた。最後の授業を終えて帰り支度をしていると放送が
なった。

教師「1―Aの手塚寿君、高梨龍馬君、本宮啓太君、1―Bの北郷
敦也君、宮野博人君、杉村賢君、1―Cの遠野総司君、遠野健司君、浅
見恭介君至急理事長室まで来て下さい。」

寿「理事長室に一体何の用だろ？」

龍馬「僕達何もしてないよね。それに僕達だけじゃなくどうして敦
也達まで。」

啓太「とにかく理事長室に行ってみよう。」

寿達は敦也達と合流して理事長室前にやって来た。寿が理事長室
のドアをノックする。

コンコン。

理事長「はい？」

寿「手塚です。北郷君達も一緒です。理事長入ってもよろしいでしょうか？」

理事長「入りなさい。」

9人「「「「「失礼します。「「「「「」」」」」」

寿達はそう言うと言事長の前までやって来た。

寿「理事長僕達を呼んだのは何か御用でしょうか？」

敦也「あのー。俺達何かやりましたか？もしかして何か気に障る様な事でもしてしまいましたか？」

龍馬「こら。敦也理事長の前だよ。僕って言わないと。」

理事長「フッフ（笑）まあまあ高梨君そこまで気にしなくても大丈夫よ。あと安心しなさい別に貴方達が私に気に障る様な事はしてないわ。ただちよつと大事な話があつて呼んだのよ。」

啓太「大事な話？」

博人「それは何ですか理事長？」

理事長「単刀直入に言う事になって申し訳無いんだけど。貴方達には音ノ木坂学院のテスト生として4月から音ノ木坂学院へ通つてもられないかしら？」

9人「「「「「え！」「「「「「」」」」」」

総司「ちよつと待って下さい。どういう事ですか理事長。」

健司「そうですよ理事長。音ノ木坂学院は女子校じゃないですか。」

恭介「男子である僕達が音ノ木坂学院に通うなんて問題にはならないんですか。」

賢「それにテスト生って。一体どういう事ですか。」

理事長「まあまあ落ち着きなさい。貴方達が驚くのも無理は無いうえに言っている事もわかっています。実はね音ノ木坂学院が廃校になるかもしれないという事を知らないかしら。」

寿「音ノ木坂学院の廃校。ええ噂程度ですけど知っていますよ。」

寿と敦也達はラブライブの原作を知っているので廃校の事は勿論知っている。しかし、ここはあえて噂程度なら知っている。と言う事にしたのだった。あまりに詳しいのもおかしいと思われぬ為に。

理事長「その音ノ木坂学院の理事長さんとは学生時代からの知り合いで廃校阻止の為に共学化を検討しているらしくてそれでテスト生について私の方に相談に来たのよ。それでテスト生で貴方達を選ばれたんです。」

龍馬「でも、どうして僕達何ですか他にも生徒がいるのに？」

理事長「それはですね。まず高梨君貴方は以前廊下でハンカチを拾って渡した女性を覚えていますか？」

龍馬「ハンカチ？あ！もしかしてあの時の人。」

理事長「思い出した様ですね。以前貴方が親切にした人が音ノ木坂学院の理事長の方だったんですよ。」

龍馬（心の声）「思い出した！あの人は南ことりの母親で音ノ木坂学院の理事長だった。」

龍馬はあの時の事を思い出し、その時の人物は南ことりの母親で音ノ木坂学院の理事長である事も思い出した。

理事長「電話で話している時にその事だけでなく、貴方はその理事長さんの娘さんにも親切にしていた事も覚えていますかこの人何だけど？」

そうやって理事長はことりの写真を龍馬に見せた。龍馬達は知っているもこの世界では初対面なので初めてを装った。

龍馬「あ！この人はあの時の。」

理事長「この人も思い出した様ですね。貴方が以前親切にしたこの人は音ノ木坂学院の理事長さんの娘さんだったのよ。」

龍馬「そうだったんですか。この人音ノ木坂学院の理事長の娘さんだったんですか。」

龍馬を初め寿達は、sのメンバーに会っていた事をそれぞれ話したので寿達は特に驚いてはいなかった。

寿「でも、理事長高梨君がその件で採用されたならともかくどうして僕達も何ですか？」

理事長「貴方達は各教師の方々から聞きましたが、それぞれ性格は違いますが授業態度も良いうえに人格面でも信用出来るからです。それに音ノ木坂学院の理事長さんが考えて選んだそうですよ。でも、急な話だし貴方達の気持ちもあるかもしれないから断っても構わないですよ。こっちは無理なお願いをしてる訳だから。」

寿「すみません理事長。北郷君達と少し考えさせてもらっても良いですか。」

理事長「わかりました。すぐに決まらないなら明後日か明々後日でも良いですよ。」

寿「はい有難うございます。では失礼しました。」

寿はそう言うのと礼をした。敦也達も礼をすると全員理事長室から退室したのだった。その後、皆はテスト生について話し合う為に現在寿の家で集まっていた。

寿「原作には何れ関わる事になると思っていたけど、俺達がテスト生として音ノ木坂学院に通うなんてな。」

敦也「そうだな。でも俺はム、Sの音ノ木坂学院に通えるのは嬉しいけどな。」

龍馬「敦也そんな呑気な事を言ってる場合じゃないだろ。原作に関わるって事は悪の勢力と悪質転生者達と戦う事になるって事何だよ。」

敦也「ああごめん龍馬。」

賢「しかし原作に関わる事になるとは思っていたけど、まさか俺達

がテスト生で音ノ木坂学院に通う事になるとはなあ。」

総司「だけど、どうする？理事長は急な話だから断っても良いとは言ってたけど。俺達が音ノ木坂学院に通うなんて大丈夫なのか。」

健司「そうだよな。総司の言うとおり俺達が音ノ木坂に通って大丈夫なのかな。俺達は転生者でイレギュラーの存在だしさ。」

博人「俺としては音ノ木坂学院に通えるのは嬉しいけど、安易に考えてはいけないよな。」

啓太「確かに。」

恭介「僕も同感。」

寿達はしばらくの間考えていると。

フェアリー「皆大変だよ。」

9人「「「「「「フェアリー！」「「「「「」」

何とフェアリーがやって来たのだった。何か慌てた様子で。

寿「どうしたんだフェアリー。何が大変なんだ。」

フェアリー「マナの女神様からの伝言を伝えに来たの。皆よく聞いて貴方達以外にも他からもテスト生がやって来るんだけど、そいつ等は全員悪質転生者よ。」

9人「「「「「「何だって!!」「「「「「」」

フェアリー「お願い皆様、Sを守る為にもテスト生として音ノ木坂学院に通つて。」

フェアリーは寿達にお願いをしたのだった。しばらく皆で考えて話し合った後で寿はようやく口を開いた。

寿「わかったフェアリー。俺達音ノ木坂学院のテスト生として通うぜ。皆もそれで良いな。」

8人「「「「「おう！」「」」「」」「」」「」」

フェアリー「皆有難う。私と他の精霊達も力を貸すからね。じゃあ私はマナの女神様に連絡してくるね。」

フェアリーはそう言うと言ったマナの女神に連絡をする為に消えたのだった。

一方、とある様々な場所では。

？「もうすぐだ。もうすぐで俺は音ノ木坂のテスト生として通う事になる。穂乃果はこの俺の物だ誰にも渡さねえぞ。へへへへ（笑）」

？「俺は絵里ちゃんをもらうぜ。俺との約束忘れるなよ。絶対に絵

里ちゃんに手を出すんじゃないぞ。」

? 「わかってるって。俺は真姫をもらうぜ。」

下衆な笑いをする男3人が、sのメンバーを手に入れようと考えていた。それを遠くで見っていた二人がいた。その人物は全身黒の鎧を着けている騎士と赤いマントを羽織っている男だった。

? 「本当に大丈夫なのですか。あんな男達に任せて。」

? 「竜帝様の指示だ。まああんな奴等は所詮捨て駒も同然だ。所謂有効利用と言うものだ。」

? 「ヒツヒツヒツ。もうすぐで凜ちゃんに会える。そして俺の物となるんだ。」

? 「待ち遠しいな。あと少ししたら花陽は僕だけの物になる事が。」

? 「待っててねにこちゃん。君のハートは俺が頂いてあげるよ。」

ここにも下衆な笑いをする男3人がいた。それを神官の姿をした人物と道化師の格好をした不気味な男が見ていた。

? 「やれやれ。欲望に満ち溢れているなあいつ等は。」

? 「まあ今は好きにさせておきましょう。こちらの目的が果たせれば奴等に用は無いですからね。」

? 「ことりちゃん。今君の王子様である俺が会いに行つてあげるからね。ハハハハ(笑)」

? 「くつくつくつ。希。君の心は僕が盗んであげるからね。」

? 「もうすぐ愛しの海未に会えるんだ。俺が彼女の全てを手に入れてやる。」

さらに別の場所でも欲望に溢れた男3人が笑っていた。その様子を見ていた2人は汚らわしい物を見る様な目をしていた。1人は吸血鬼の格好をした男。もう1人は美しい姿の女だった。

? 「全く呆れて物も言えんな。これだから人間は嫌なのだ。いくら黒の貴公子様の命令とはいえあんな下衆な奴等を使うとはな。」

? 「仕方が無いだろ。黒の貴公子様の命令なのだ。私もあんな男共を見ているだけで吐き気がするが、我々の計画の為に利用する必要があるからな。」

裏ではすでに各悪の勢力と悪質転生者達の邪悪な魔の手が動き始めていた。

決意の旅立ち

次の日、寿達は音ノ木坂学院のテスト生の提案を受ける為に理事長室前にやって来た。

コンコン。

理事長「はい？」

寿「理事長。手塚です。テスト生の件でやって来ました。北郷君達も一緒です。入ってもよろしいでしょうか。」

理事長「入りなさい。」

9人「「「「「失礼します。」「「「「「」

理事長「皆さんよく来てくれました。それでテスト生の件ですがどうですか？貴方達の出した答えを教えてください。どんな答えでも私は何も言いません。」

寿「理事長僕達は音ノ木坂学院のテスト生のお話お受け致します。」

理事長「本当ですか？こちらの都合とはいえ良いの手塚君。それに貴方は良くても北郷君達が。」

敦也「大丈夫です。」

龍馬「理事長お心遣いを有難うございます。ですが手塚君だけの意思ではありません。僕達全員の総意です。」

総司「だから心配はいりません。」

啓太「僕達は皆で話し合った答えですから。」

博人「なのでテスト生として4月から音ノ木坂学院に通います。」

賢「だからどうか安心して下さい。」

健司「この学校や音ノ木坂学院に迷惑をかける様な事は絶対にしませんから。」

恭介「どうか僕達を信じて下さい。大丈夫ですから。」

理事長は寿達を見た。彼等の目には決意に満ちた何かを感じていた。しばらくすると理事長は口を開いた。

理事長「わかりました。貴方達を信じましょう。ですがこれだけは守って下さい。迷惑をかける事は無いでしょうが無理だけは絶対にしないで下さい。」

9人「「「「「「はい。「「「「「」」」」」」」

理事長「では手塚寿君、北郷敦也君、高梨龍馬君、遠野総司君、遠野健司君、宮野博人君、本宮啓太君、浅見恭介君、杉村賢君。貴方達9人にはテスト生として音ノ木坂学院に4月から通ってもらいます。どうかお願いね。」

9人「「「「「「はい。「「「「「」」」」」」」

こうして寿達聖剣の勇者はテスト生として4月から音ノ木坂学院に通う事が決まった。

それから数カ月が立ち、3月となり各クラスで寿達は4月から音ノ木坂学院のテスト生として音ノ木坂学院に通う事をクラスメイト達の前で発表した。それを聞いたクラスメイト達は驚いた。男子の方は「音ノ木坂学院に通えるなんてラッキーな奴だな。」と羨ましそうにする人もいれば、「たまには顔を出せよ。」「何かあつたら相談に乗るぞ。」等と言ってくれた人もいた。寿達はクラスメイトと良好な関係を築けていた為他にも友達がいたのだった。

しかし、女子の方はショックが大きい様だった。その理由はと言うと実は寿達は女子達から人気があったからであり、密かにファンクラブがあるくらいだったのだ。

寿達は仲良くしてくれたクラスメイト達と別の学校に通う事になってしまうのは少し悲しい気持ちはあるが「また会いに来るよ。」と言って笑顔で対応したのだった。

その夜、寿達は今後の事を話し合う為に龍馬の家に泊まる事になった。今龍馬のご両親は家を留守にしている為、龍馬の提案で家に泊まって話し合う事にしたのだった。龍馬の父親は会社の出張で、母親は花の展覧会の関係でその展覧会の会場近くのホテルに泊まる事になったので、今は龍馬1人だったのだ。

イメージソング Meridian Child (聖剣伝説3の
プロローグソング)

寿「俺達ついにラブライブの原作に関わる事になったな。」

敦也「ああ。それと同時に悪の勢力と悪質転生者達と戦う事になるって事だな。」

龍馬「僕達の戦いが始まるね。」

総司「だが俺達も絶対に気を付けないとならないな。」

健司「そうだな。下手をすれば俺達は死ぬ可能性だってあるからな。」

博人「だから皆今ここに約束しようぜ。絶対に誰一人死ぬなよ。」

啓太「僕達はこの世界に転生したのは悪の勢力と悪質転生者達からμsを守る為だけど、折角転生する事が出来たこの命を無駄にしてはいけない。」

恭介「必ず悪の勢力と悪質転生者達を倒し、この世界に本当の平和を取り戻そう。」

賢「絶対に誰も死ぬなよ。俺達の家族を悲しませない為にもな。」

寿「俺は誰一人失いたく無い。だから誰一人欠ける事はあってはならない。絶対に全員で生き残ろうぜ。そして必ずμsを守り通すぞ。」

8人「「「「「おう！」「」」」」」

前世で命を落とした寿、敦也、龍馬、総司、健司、博人、啓太、恭介、賢だったがマナの女神の頼みによってラブライブの世界に転生した。彼等は迫りくる悪の勢力と悪質転生者達との戦いで彼等は必ず勝つ事・生き残る事を誓い合い、音ノ木坂学院のテスト生として通う事を選んだ。

時を同じくして裏では悪の勢力と悪質転生者達が動き始めようとしていた。彼等9人はμsを守り通せるであろうか。

彼等の物語は、まだ始まったばかりなのだ・・・

音ノ木坂学院へ

季節は春の4月、寿達は現在音ノ木坂学院の校門前に来ていた。

寿「・・・(*?;*;)」

寿は何故か緊張していた。しかし、無理も無かった何故なら寿は前世の時、恋愛経験は無い上に彼女すらいなかったのだ。その為女子校である音ノ木坂学院にテスト生として通う事になるのだ。緊張して当然だった。さらに推しのキャラである穂乃果にも会うのだから緊張は半端では無かった。

敦也「なあ寿大丈夫か？」

龍馬「やっぱり緊張するよね。僕もそうだけど。」

博人「全く緊張し過ぎだろ。俺達は今日からテスト生として通うんだぜしつかりしろよ。」

健司「よく言うぜ博人。お前だって本当は緊張してる癖に。」

博人「何を言うんだ健司。俺は全然緊張なんかしてないぜ。ちつとも。」

賢「じゃあ昨日の「希の通っている音ノ木坂に明日行く事になるんだよな俺は。」って不安そうに言ってたあれは何なんだ。昨日スゲー程緊張してただろ（笑）」

博人「わあー。賢余計な事を言うなよ。」

啓太「まあまあ博人。それに誰だって緊張するもんでしょ。」

恭介「そうそう。そんなに強がらなくても良いじゃないか。」

総司「そうだぜ。緊張するのは当たり前だろ。人の子何だから俺達は。」

博人「そ、そうだな。」

寿「皆第一印象は大事だからな気を付けろよ。もうすぐ先生が来るからな。おつと言ってるそばから来たぞ。」

寿がそう言うとき校舎から1人の女性がやって来た。その人物はμ'sのメンバーの1人である南ことりの母親で音ノ木坂学院の理事長である南ひなのだった。

ひなの「青山高等学校からのテスト生の手塚君、北郷君、高梨君、遠野総司君、遠野健司君、宮野君、本宮君、浅見君、杉村君ですね。」

寿「はいよろしく願います。」

8人「「「「「よろしく願います。」」」」」」

ひなの「私は音ノ木坂学院の理事長の南ひなのです。よろしく願います。」

ひなの「は寿達に自己紹介をすると今度は龍馬に近づいた。」

ひなの「そうだわ高梨君。貴方にお礼を言いたい事があります。青山高等学校の理事長さんから聞いていると思うけど、以前私のハンカ

子を拾ってくれた事や私の娘にも親切にしてくれた事も含めて有難うございます。」

龍馬「いえ。お気になさらないで下さい。理事長が話してくれましたが貴方が音ノ木坂学院の理事長だったなんて驚きました。それに以前親切にした人が貴方の娘さんだったなんて思いもしませんでした。」

龍馬と寿達は μ , s のメンバー全員のことを知ってはいるがこの世界では初対面なので知らぬ振りをした。

ひなの「貴方達以外にもテスト生の人達はすでに来ていますよ。ではこれから案内するので付いて来て下さい。」

9人「「「「「「はい。「「「「「」」」」」」」

そう言うと寿達はひなのに付いて行った。着いた先は職員室だった。周りには音ノ木坂学院の教師達と他のテスト生と思われる男子生徒が複数いた。

ひなの「皆さん青山高等学校からのテスト生の方々が来ました。これから彼等に自己紹介をしてもらいます。では手塚君貴方から自己紹介をお願いしますね。」

寿「わかりました。本日付けで青山高等学校からテスト生としてやって来ました。2年の手塚寿です。皆さんどうぞよろしく願います。」

敦也「北郷敦也です。同じく青山高等学校から2年のテスト生としてやって来ました。至らぬ所があると思いますがよろしく願います。」

龍馬「同じく青山高等学校から2年のテスト生としてやって来ました。高梨龍馬です。今日から音ノ木坂学院でお世話になります。よろしく願います。」

総司「同じく青山高等学校からやって来た。テスト生で2年の遠野総司です。テスト生として頑張りますので、皆さんこれからよろしく願います。」

健司「同じく2年で青山高等学校のテスト生の遠野健司です。先程自己紹介した遠野総司の双子の弟です。どうぞよろしく願います。」

博人「宮野博人です。同じく2年で青山高等学校のテスト生で来ました。最初はご迷惑をおかけすると思いますがよろしく願います。」

啓太「本宮啓太です。僕も2年で青山高等学校からテスト生として来ました。不慣れな部分がありますが、よろしく願います。」

恭介「同じく2年の浅見恭介です。青山高等学校からのテスト生として、音ノ木坂学院のお役に立てる様に頑張りますのでよろしく願います。」

賢「杉村賢です。青山高等学校からの2年のテスト生として、皆さんのお力になれる様に頑張ります。これからよろしく願います。」

寿達は自己紹介をするひなのを始め、教師達と他のテスト生達から拍手をもらった。但し、他のテスト生達だけは心の無い拍手であるが。

ひなの「青山高等学校からのテスト生の皆さんの自己紹介が終わりました。では貴方達は他のテスト生の方とはまだ紹介していないのでそれぞれ自己紹介をして下さい。」

ひなのがそう言うのと他のテスト生達がやって来て挨拶をして来た。

小西「俺は君達と同じテスト生で3年の小西純也(こにしじゅんや)です。学年は違うけどよろしく。」

菅野「僕は菅野直紀(すがのなおき)。3年だ。どうぞよろしく。」

如月「俺は如月守(きさらぎまもる)。3年だ。よろしくな。」

内田「俺は内田達矢(うちだたつや)。君達と同じ2年だからよろしくね。」

栗林「俺は栗林祥太(くりばやししょうた)。俺も同じ2年だ。よろしくな。」

坂本「俺は坂本昌幸(さかもとまさゆき)。同じ2年としてよろしく。」

花笠「1年の花笠隆一(はながさりゆういち)です。よろしく願いします。」

白咲「白咲勝也(しろさきかつや)です。同じく1年です。よろしく願いします。」

飛鳥路「飛鳥路朔也(あすかじさくや)1年です。よろしく願いします。」

悪質転生者達は寿達に愛想良く自己紹介と挨拶をした。最も他の人に悪い印象を見せない為の演技による自己紹介と挨拶である。しかし、寿達は彼等が悪質転生者達である事を知っているが自分達も他の人に悪い印象を与えない為に愛想良く挨拶をした。

寿「はいよろしくお願いします。」

敦也「こちらこそよろしくお願いします。」

7人「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

寿達もまた彼等と同様に演技による自己紹介と挨拶をしたのだった。

全校朝礼での自己紹介

教師陣と悪質転生者達の自己紹介を終えた寿達は今日の全校朝礼にて全校生徒の前で自己紹介をする事になった。まずひなのが全校朝礼の話を進めていった。

ひなの「皆さん前回の全校朝礼で急な廃校の発表が出て驚いてしまった。と思いますが来年度の入学希望者が定員を下回った場合、廃校にせざるを得ない事となります。その為、私と先生方は話し合った結果、音ノ木坂学院の共学化を検討しました。」

ひなのがそう言うのと全校生徒の女子達は驚いた顔をしていた。だが無理も無い反応だろう。女子校である音ノ木坂学院が廃校の為とはいえ共学になるのだ。当然の事だろう。

ひなの「共学化と聞いて皆さんのお気持ちは様々だと思います。それで私は各学校の理事長の協力で男子のテスト生を呼びました。そのテスト生達は本日より我が校に通ってもらおう事になりました。そのテスト生達にこれから自己紹介してもらいます。では出て来て下さい。」

ひなのにそう言われて、まず小西が出て、他の悪質転生者達も出た。その後を寿を先頭に寿達も現れた。そして自己紹介をした。

悪質転生者達の自己紹介は省略します。

悪質転生者達の自己紹介が終わると次は寿の番になった。

寿「初めまして音ノ木坂学院の皆さん。青山高等学校からテスト生としてやって来ました。2年の手塚寿です。突然の共学化で皆さん

驚かれていると思いますが、どうぞよろしく願います。」

敦也「同じく青山高等学校からテスト生でやって来た。2年の北郷敦也です。〴〵迷惑をおかけすると思いますがよろしく願います。」

龍馬「同じく2年で青山高等学校からテスト生でやって来ました。高梨龍馬です。急に男子生徒がこちらに通う事になった事について思う所があるかもしれませんがよろしく願います。」

総司「2年の遠野総司です。先程自己紹介した手塚君達と同じ青山高等学校からテスト生で来ました。皆さんよろしく願います。」

健司「2年の遠野健司です。同じく青山高等学校からやって来ました。先程自己紹介した遠野総司の双子の弟です。兄弟揃ってテスト生としてこちらにお世話になります。よろしく願います。」

博人「宮野博人です。同じく2年で青山高等学校からテスト生として本日より音ノ木坂学院に通う事になりました。よろしく願います。」

啓太「同じく青山高等学校から2年のテスト生として音ノ木坂学院に通う事になりました。本宮啓太です。これからよろしく願います。」

恭介「本日付けで手塚君達と同様青山高等学校からのテスト生として音ノ木坂学院に通う事になった。2年の浅見恭介です。よろしく願います。」

賢「2年の杉村賢です。手塚君達と同じ青山高等学校の2年のテスト生として音ノ木坂学院に通う事になりました。よろしく願います。」

ます。」

寿達が自己紹介をすると女子達の反応は様々だった。今も驚いている人と彼等を見て「ねえあの人。格好良いわね。」「あの人なんかタイプ。」と言う人。興味なさそうな人がいた。しかし、その中で1番驚いている人物達がいた。それは以前寿達聖剣の勇者達と偶然出会った穂乃果、絵里、ことり、凜、花陽、希、海未、真姫、にこだった。

ひなの「以上もちまして各学校からのテスト生による自己紹介が終わりました。ではこれで本日の全校朝礼を終わります。」

ひなのがそう言うとき本日の全校朝礼が終わったのだった。

全校朝礼後……。

ひなの「では貴方達のクラスはこちらです。」

手塚寿 高梨龍馬 本宮啓太 内田達矢 栗林祥太
坂本昌幸 2年2組

北郷敦也 遠野総司 遠野健司 宮野博人 浅見恭介
杉村賢 2年1組

小西純也 菅野直紀 如月守 3年
花笠隆一 白咲勝也 飛鳥路朔也 1年

クラスを確認すると、問題の悪質転生者達はというと。

内田(心の声)「やったー。穂乃果と同じクラスだ。小西と飛鳥路以外の他の連中は邪魔だが、まあ良い。何れ消す予定だからな。」

栗林(心の声)「よし！ことりちゃんと同じクラスになったぞー。坂

本と菅野はともかく。他の連中は必ず始末してやる。」

坂本(心の声)「ラッキー。海未と同じクラスだぜ。あの二人は仲間だから良いとしても他の連中は消してやる。」

小西(心の声)「絵里と同じクラスだ。よし絵里は必ず手に入れてやる。内田達はともかく他の奴等は邪魔だし何れ殺すか。」

菅野(心の声)「希と同じクラスだぜ。栗林達は同志だから良いが他は邪魔だから排除しないとな。」

如月(心の声)「やったぜー。にこと同じクラス。花笠と白咲以外は邪魔な存在だし始末するのは頭に入れといてしばらく泳がせておくか。」

花笠(心の声)「にししし。必ず凜をゲットしてやるぜ。他の奴等がいるのがうっとおしいな。後で如月と白咲と話してバレない様に消す方法考えるか。」

白咲(心の声)「フッフッフ。花陽は僕が頂いてみせる。あの二人は良いとしても他の奴等は邪魔だな。あの二人と話して解決策を考えるでしょう。」

飛鳥路(心の声)「真姫は俺の物だ。誰にも渡さないぞ。あの二人は良いが他のテスト生共は邪魔だ。必ず殺す。」

悪質転生者達には出ていないが完全に下心丸出しの状態だった。彼等はバレない様になっているがその様子を寿達は見逃していなかった。

寿「皆あいつ等には十分注意した方が良いぞ。何か良からぬ事を絶

対に考えてるぜ。」

敦也「ああ。あいつ等先生達には気付かれない様になっている様だが顔が欲望で歪んでるぜ。」

龍馬「恐らくμsを手に入れる為に他のテスト生をバレない様に殺そうと考えてるだろうね。」

総司・健司「クズだな。」

博人・啓太「それ同感。」

恭介「とにかく今は目立つ行動はしない方が良い。下手に動くと僕達が悪者扱いされたり、冤罪をかけられたら最悪だからね。」

賢「恭介の言うとおりで。今は様子見をした方が良い。」

寿達9人は顔を見合わせると首を縦に振った。

運命の再会

全校朝礼で自己紹介を終えて、配属するクラスも決まった寿達は各クラスの担任と共に自分達のクラスへ向かっていた。少ししてそれぞれの配属するクラスのドア前に到着した。

山田「じゃあ私が声をかけたら教室に入って自己紹介をしてくれ。声をかけたらまずは内田。お前から入って来てくれ。」

内田「はい。」

2組の担任の山田はそう言うのと2組の教室に入って行った。

山田「皆おはよう。全校朝礼で聞いていると思うが、うちのクラスに男子のテスト生が来る事になった。今からテスト生達に自己紹介をしてもらう。おーい入って良いぞ。」

山田に呼ばれて、まず内田を先頭に悪質転生者達が先に入り、その後を寿、龍馬、啓太が教室に入った。寿、龍馬、啓太を見ると穂乃果、ことり、海未は驚いた。

山田「ではテスト生達に改めて自己紹介をしてもらう。では始めてくれ。」

担任の山田にそう言われ、まずは内田が自己紹介をした。

悪質転生者達の自己紹介は省略します。

内田達の自己紹介が終わると次は寿の番になった。寿は笑顔で自己紹介を始めた。

寿「全校朝礼で挨拶と自己紹介をしましたが、青山高等学校からテスト生で来ました。手塚寿です。皆さんよろしくお願いします。」

龍馬「同じく青山高等学校からテスト生で来ました。高梨龍馬です。どうぞよろしくお願いします。」

啓太「同じく手塚君達と青山高等学校からテスト生でこちらに通う事になった。本宮啓太です。どうか仲良くして下さい。」

内田達が自己紹介した時は特に反応は無かったが、寿達が自己紹介をすると女子達は「ねえ全校朝礼を見た時、イケメンだと思ってたけど、近くで見ると本当にイケメンね。」「格好良い。」「彼女とかいないのかな。」等と内田達よりも注目を集めていた。特に穂乃果とことりと海未は寿達から目が離せない様子だった。内田達はというと顔に出していないが、それが面白くない様子だった。

山田「ではテスト生達の自己紹介が終わったので、テスト生達にはそれぞれ席についてもらう。内田はあそこで、栗林はあっち、坂本はあそこだ。手塚はあそこにいる高坂の隣で、高梨はあそこにいる南の隣で、本宮はあっちの園田の席の隣で頼む。」

6人「「「「わかりました。」「」」」」

寿達と悪質転生者達はそれぞれの席につく為に動いた。

寿「よろしく。あれ？君は確かあの時スーパーで会った人。」

穂乃果はドキドキしていた。実は穂乃果はあの時から寿の事が気になっていたのであった。その事をことりや海未、ヒデコ達に話すと「それ一目惚れだよ。」「それ絶対恋だよ。」等と言われたのだった。

そう穂乃果は寿に一目惚れしていたのだった。

穂乃果(心の声)「落ち着け私。ここは仲良くなるチャンスなんだから。」

自分を落ち着かせると穂乃果は笑顔で口を開いた。

穂乃果「私高坂穂乃果。よろしくね手塚君。」

寿「ああよろしくね高坂さん。」

寿は笑顔で声をかけて握手しようとして手を出した。穂乃果はそれに答えて手を出して握手した。握手すると穂乃果の心は嬉しさでいっぱいだった。

龍馬の方はというと。

龍馬「どうぞよろしく。君のお母さんである理事長から聞いてたけど、まさか君がこのクラスの人だったなんて驚いたよ。よろしくね。」

ことりは凄く緊張していた。目の前に自分が一目惚れした人が現れただけでなく、隣の席になったのだから。

ことり(心の声)「しっかり私此処で自己紹介しないと駄目。勇気を出さないと。」

ことりは自分に言い聞かせると緊張しながらも口を開いた。

ことり「私南ことり。よろしく高梨君。」

龍馬「うん。此方こそよろしく南さん。」

龍馬も寿と同様笑顔で返事をし、握手しようと手を出した。ことりは緊張しながらも握手をした。ことりは心臓がドキドキしている状態だった。

啓太の方では。

啓太「よろしくねお隣さん。あれ？君はあの時の？」

海未は顔には出していないが、内心緊張していた。あの時、出会いそしてもう一度会いたいと思っていた人が隣の席になったのだ。

海未（心の声）「しつかりなさい私。此処で黙っていたら相手に失礼じゃないですか。ちゃんと挨拶を。」

海未は決心して声を出した。

海未「私園田海未です。よろしくお願いします本宮さん。」

啓太「此方こそよろしく。園田さん。」

啓太も寿達と同様、握手する為に手を出した。海未も握手に応じたのだった。

それを見た内田達はというと。

内田（心の声）「何だあの野郎。俺の穂乃果に馴れ馴れしくしゃがんで（怒）」

栗林（心の声）「何だ彼奴は。ことりちゃんと握手しやがって。ムカつく（怒）」

坂本(心の声)「あのクソヤロー。俺の海未の隣の席になっただけでも許せねえのに、握手までやりやがって。(怒)」

寿達を見て、悪質転生者の3人は自己紹介の時に女子達から注目を浴びていただけでなく、自分達の狙っているμ sのメンバーと仲良くなっていたのだ。彼等は心の中で決めた。

3人「「まずはずは真つ先に彼奴から叩き潰す(怒)」」

昼休みの出来事 2年生編

午前の最後の授業を終えて、寿達は昼食にしようと立ち上がろうとした時。

穂乃果「手塚君！」

隣の席の穂乃果が声をかけてきた。

寿「何だい高坂さん？」

穂乃果「これからお昼ごはんですよ。もし良かったら私と私の友達と一緒に食べない？」

寿「それは良いけど？良いのかい俺で。」

穂乃果「勿論だよ！」

寿「じゃあ俺の友達も誘って良いかい。同じクラスの高梨と本宮と隣のクラスの北郷達何だけど？」

穂乃果「うん良いよ。」

寿は龍馬と啓太に声をかけると二人はOKした。その後、寿達は穂乃果達とお互いに自己紹介をし終わると隣のクラスに訪れて敦也達に声をかけた。

寿「おーい。敦也、総司、健司、博人、恭介、賢。ちよつと良いか？」

敦也「おう。どうした寿。」

敦也は返事をする。と席から立ち上がって寿の方へ向かう。その後を総司達が続いた。

敦也「どうした寿。」

寿「実は同じクラスの高坂さんと南さんと園田さんに俺と龍馬と啓太は昼食一緒に食べないか。って誘われたから。一緒にどうかと思つて。」

敦也「有難う。でも、今日総司達と食堂で食べる予定だから。また今度で頼むよ。」

寿「そうか。仕方ないな。わかつたじゃあまた今度な。」

総司「ごめんな寿。せつかく誘つてくれたのに。」

寿「良いよ。気にすんな。」

穂乃果「ねえ手塚君。その人達つて同じテスト生の人達だよね。」

ことり「その人達は全校朝礼で確か同じ青山高等学校から来た人だったよね。」

海未「その方々はお友達ですか。」

寿「ああ高坂さん、南さん、園田さん。紹介するよ。右から順に北郷敦也君、遠野総司君、遠野健司君、宮野博人君、浅見恭介君、杉村賢君。俺と龍馬と啓太の友達だよ。敦也、総司、健司、博人、恭介、賢。此方は同じクラスの高坂穂乃果さん、南ことりさん、園田海未さん

だ。」

敦也「よろしく高坂さん、南さん、園田さん。北郷敦也だ。」

総司「遠野総司だ。よろしく。」

健司「遠野健司だ。よろしく。」

博人「よろしく宮野博人だ。」

恭介「浅見恭介です。どうぞよろしく。」

賢「杉村賢だ。よろしくな。」

穂乃果「此方こそ。」

ことり「よろしくね。」

海未「よろしくお願いします。」

ことり「あのー全校朝礼の自己紹介で聞いてたけど、貴方がお兄さんの遠野総司君で、そっちの人が弟さんの遠野健司君だったよね？」

総司「そうだよ。全校朝礼で聞いてたと思うけど、俺と健司は双子の兄弟なんだ。俺が兄で健司が弟なんだ。」

海未「本当にそっくりですね。髪の色が同じだったら、見分けつかないくらいです。」

博人「そうだろ。本当にこの二人は顔そっくりなんだよ。髪の色と性格は全然違うけどな。」

健司「余計な事は言うな博人。」

博人「まあそうなって性格は違うのは本当だろ。ハハハ。」

健司「まったくお前は。」

恭介「まあまあ博人そんなに健司をからかうなって。ああそれよりせつかく誘ってくれたのにごめんね寿、龍馬、啓太、高坂さん、南さん、園田さん。僕達は食堂で食べる約束したからまた今度ね。」

賢「ごめんな。誘ってくれたのに。」

穂乃果「ううん。気にしないで。じゃあまた今度ね。」

ことり「じゃあまたね。」

海未「ではまた今度。」

敦也「じゃあね高坂さん、南さん、園田さん、寿達と仲良くしてあげてくれ。」

3人「「うん（はい）」」

恭介「あと高坂さん、南さん、園田さん、ちよつと寿達と話があるんだけど良いかな？」

穂乃果「それは良いけど、何の話？」

恭介「何そんなに長い話じゃないよ。良いか寿、龍馬、啓太？」

寿「わかった。高坂さん、南さん、園田さん悪いんだけど先に行つててくれないかい。終わったらすぐに行くから。」

海未「わかりました。じゃあ屋上へ先に行つて待ってますね。」

穂乃果「早く来てね。」

ことり「じゃあ後でね。」

穂乃果達が先に屋上へ行つた後、寿、龍馬、啓太は廊下で敦也達と話を始めた。

敦也「すまない寿、龍馬、啓太残つてもらつて。μ、sの事で話があつてな。悪質転生者の事が気になるから、俺と博人と賢は3年の方の様子を見に行つてくる。」

総司「俺と健司と恭介は1年の方の様子を見に行つてくる。寿達は彼女達についててやってくれ。でも気を付けろよ。お前らは悪質転生者の内田達と同じクラスだからな。何か仕掛けて来る筈だから十分に警戒してくれ。」

龍馬「わかった。でもそつちも気をつけて。他の悪質転生者達も必ず何か企んでる筈だから。」

賢「ああわかつてる。」

博人「じゃあ穂乃果達の事は頼むぞ。」

啓太「うん。任せてそつちも頼んだよ。」

健司「おう任せろ。」

恭介「そつちも気をつけて。」

寿「よし皆。必ず悪質転生者達から、Sを守るぞ。じゃあまた後でな。」

寿達はそう言うのと敦也達と別れて穂乃果達の待つ屋上へと向かった。そして、穂乃果達を見つけ、声をかけた。

寿「待たせてごめん高坂さん、南さん、園田さん。」

穂乃果「遅いよー。」

寿「ごめんごめん。」

ことり「まあまあ穂乃果ちゃん。北郷君達が話があるって言ったんだし、それにそんなに待ってないでしょ。」

海未「そうですね。用事があつたんですから仕方ないじゃないですか。」

穂乃果「だってー。早くご飯食べたいもん。」

龍馬「ごめんね。遅れて。」

啓太「ちよつと敦也達と大事な話があつたから。」

ことり「ううん。そんな謝らなくて大丈夫だよ。」

海未「そうですね。そんなに謝らないで下さい。穂乃果がせっかちなだけですから。」

穂乃果「酷いよ海未ちゃん。」

寿「まあまあ俺達は気にしてないから大丈夫だよ。こっちが待たせてしまったのは事実だから。」

龍馬「僕達は大丈夫だよ。」

啓太「そうそう。気にしないで。」

穂乃果「ほら海未ちゃん。手塚君達は気にしてないって言ってくれてるよ。」

海未「穂乃果ー。貴方と言う人は（怒）」

啓太「まあまあ園田さん。僕達は大丈夫だから。高坂さんを怒らないであげて。」

海未「本宮さんがそう言うなら。」

啓太「高坂さんも園田さんを怒らせる事を言っちゃ駄目だよ。」

穂乃果「はい。」

寿「じゃあ昼食を食べるとしよう。時間が無くなってしまっからな。」

龍馬「そうだね。」

寿達はさっそく昼食を食べ始めた。食事中に穂乃果が寿に声をかけた。

穂乃果「ねえ手塚君。良かったら私の事穂乃果って呼んでくれな
い。」

寿「え！良いのかい。君を名前で呼んでも。」

穂乃果「うん。そのかわり寿君って呼んでも良い？それから高梨君
と本宮君も龍馬君と啓太君って呼んで良い？」

龍馬「良いよ。僕の事を龍馬って呼んでくれて。」

啓太「僕も啓太で良いよ。」

寿「わかった俺も良いよ。よろしく穂乃果。」

穂乃果「うん。よろしく寿君、龍馬君、啓太君。」

ことり「じゃあ私の事はことりって呼んで。よろしくね龍馬君、寿
君、啓太君。」

海未「では私も海未って呼んで下さい。よろしくお願いします啓
太、寿、龍馬。」

3人「「こちらこそよろしく。」」

しばらくして昼食を食べ終わると寿は穂乃果達に話しかけた。

寿「そういえば穂乃果とことりと海未は友達だったよね。友達の付
き合いは長いの？」

穂乃果「うんそうだよ。私とことりちゃんと海未ちゃんは幼馴染な

の。ねえことりちゃん、海未ちゃん。」

ことり「うん。私と穂乃果ちゃんは幼稚園の頃からの幼馴染なの。」

海未「私は小学校からの幼馴染なんです。」

龍馬「へえそうなんだ。僕と寿と一緒にだね。」

ことり「え？一緒に龍馬君と寿君も幼馴染なの？」

寿「ああ俺と龍馬は小学校時代からの幼馴染なんだ。それにさつき紹介したメンバーの1人である敦也とは保育所時代からの幼馴染なんだよ。」

ことり「そうだったの。龍馬君と寿君は北郷君とは幼馴染だったんだね。」

龍馬「うんそうなんだ。」

海未「啓太は寿達と友達の付き合いはどのくらいですか。」

啓太「僕はさつき紹介したメンバーの1人である博人とは幼稚園からの幼馴染で従兄弟なんだ。付き合いが1番長いのは博人で、寿と龍馬と敦也達は中学時代からの付き合いだよ。」

ちなみに前世では啓太は寿達とは高校時代からの付き合いだがこの世界では中学時代からの付き合いと言う事になっている。

海未「そうだったんですか。じゃあ啓太は寿達や北郷さん達とは中学から高校も一緒だったんですね。」

啓太「まあね。」

しばらく世間話しをしていると穂乃果が寿達に向かって口を開いた。

穂乃果「ねえ寿君、龍馬君、啓太君。実はお願いがあるんだけど良いかな？」

寿「何だい穂乃果？」

穂乃果「私達のマネージャーになって下さい!!」

3人「「え?」「」」

海未「こら穂乃果。唐突に言ったら啓太達が混乱するでしょう。」

ことり「そうだよ穂乃果ちゃん。ちゃんと説明をしないと龍馬君達かわからないよ。」

龍馬「あのーどう言う事。マネージャーになって下さい。と言うのは?」

啓太「君達は何か部活をやってるの?」

穂乃果「ごめんごめん。実は私達スクールアイドルをやってるの。それでもし良かったら私達スクールアイドルのマネージャーになってくれないかな?」

穂乃果達がスクールアイドルをやる事は寿達は知っていたがあえて知らぬふりをして会話をしたのだった。

寿「スクールアイドルって。もしかしてA—RISEとかがやってる。あのスクールアイドルの事？」

穂乃果「そうだよ。寿君知ってるの？」

寿「有名だからね。特にA—RISEは。」

龍馬「僕達もある程度はね。」

啓太「じゃあ海未と穂乃果とことりはスクールアイドルをやってるんだ。」

海未「まだ始めたばかりですけどね。」

啓太「でも意外だな。海未は真面目な人だからスクールアイドルとは無縁だと思ったよ。」

海未「半分穂乃果の強引な誘いもありますけどね。」

啓太「そうなんだ。でも穂乃果の性格からしたらそうかもね。さつき説明無しでいきなりだったからね。」

穂乃果「ちよつと海未ちゃん、啓太君も酷いよ。」

海未「事実だから仕方が無いじゃないですか。」

海未にそう言われると言い返せない穂乃果だった。

龍馬「そうか。ことりは穂乃果達とスクールアイドルやってるんだ。でもどうして？」

ことり「龍馬君達も知ってるよね。学校が廃校になる事。」

龍馬「うん僕達に通つてた青山高等学校の理事長と君のお母さんである南理事長から聞いてるよ。」

穂乃果「実はね私のお母さんとお婆ちゃんもこの学校の卒業生なの。最初私は廃校の事とか関係無いと思ってたんだけど、学校が無くなってしまふのは嫌だから何とかしないと買ったの。」

ことり「私もこの学校が無くなるのは嫌だから。穂乃果ちゃんと海未ちゃんとスクールアイドルをする事にしたの。」

海未「私も学校が無くなってしまふのは悲しいですからね。」

寿「それでスクールアイドルをやつて廃校を阻止しようと思ひ、3人でスクールアイドルを始めた。と言う訳か。」

穂乃果「そうなの。だから唐突でごめん。私達のマネージャーになつてくれないかな。」

寿達が考えていると。

パチパチパチパチパチパチ。

内田「学校を救う為にスクールアイドルを始めたかあ。いやー感動したよ。穂乃果ちゃん。」

栗林「お母さんが理事長やつてるこの学校を救いたいなんて健気だねことりちゃん。」

坂本「俺も話を聞いてたけど、本当に素敵だよ海未。」

穂乃果「内田君、栗林君、坂本君。」

ことり「どうしてここに？」

海未「何か御用ですか？」

内田「ねえ穂乃果ちゃん達。そんな奴等なんか辞めて俺をマネージャーにしてよ。俺だったらちゃん出来るよ。」

栗林「いいや。そいつ等や内田は辞めて俺と坂本をマネージャーにした方がよいよ。」

坂本「そうだよ。俺と栗林ならマネージャーの仕事をちゃんと出来るからさ。本宮達や内田なんかほっというて俺と栗林を採用してくれよ海未。」

悪質転生者の内田達は自分達をマネージャーにしてくれと売り込もうとするが穂乃果達はというと。

穂乃果「悪いんだけど私達は寿君達に頼みたいの。だから断るよ。」

ことり「私も穂乃果ちゃんに同感。」

海未「私も2人と同じです。」

内田「そんな！顔が良いからって何でそいつ等何だよ。もしかするとそいつ等は顔は良くても性格は問題の奴等かもしれないぞ。考え直せ穂乃果ちゃん。」

栗林「俺と坂本を採用した方がよいよことりちゃん。そんな顔が良

いだけの奴なんかじゃなくてさ。」

坂本「マネージャーなら顔が良いだけのそんな奴等じゃなくても俺と栗林でも良いじゃないか。頼むよ海未。」

穂乃果達が断ってるにも関わらずに寿達を悪く言いながら、しつこく売り込む内田達だった。しかし次の瞬間。

パンツ！

何と海未は坂本の頬を平手打ちしたのだった。

海未「いい加減にして下さい。貴方やそちらの方々もさつきから聞いていたら啓太達の事を悪く言うなんて最低です。それに啓太は貴方達が言ってる様な人じゃありません。啓太は以前私のお祖母様のバツクをひったくりから取り返してくれた素敵な殿方です。何も知らない癖に啓太の事を悪く言わないで下さい。」

ことり「私も海未ちゃんの意見に同感。貴方達さつきから龍馬君達の事を言いたい放題に言ってるけど、貴方達の方に問題があると思うよ。それに龍馬君はカッコいいだけじゃなくて、心優しい人だよ。龍馬君はね迷子になってた子供を助けたり、困ってた私に親切にしてくれた良い人なの。」

穂乃果「私も寿君達を悪く言う君達の方が問題ありに見えるよ。それに私がスパーで倒れた時に寿君は手を差し伸べて心配してくれただよ。寿君達を顔が良いだけの人と一緒にしないでよ。」

穂乃果達に非難された内田達は黙り込んでしまった。

寿「内田、栗林、坂本。俺の事をどう悪く言おうと勝手だ。だがな

大事な仲間である龍馬と啓太を悪く言う事や穂乃果達にしつこく言い寄る真似をするのは許さないぞ。」

龍馬「僕もだ。僕が悪い事をしたなら謝罪する。だけど何も悪い事をしてない人に対してそんな言い方は無いと思うよ人として。」

啓太「僕だって大事な友達である寿達を悪く言う事は絶対に許さないよ。」

流石に分が悪いと判断したのか内田達は。

内田「チツ良いさ好きにしろよ（怒）だがなお前等がマネージャーをやつて失敗した時は大声で笑つてやるよ。覚えてやがれ。」

栗林「このままで済むと思うなよ（怒）絶対にこの位で諦めないから俺は。」

坂本「ちくしよー覚えてろよ本宮、手塚、高梨。俺だってこのまま引き下がるつもりは無いからな（怒）俺を敵にまわした事を後悔させてやる。」

内田達は捨て台詞を吐き捨てた後、そのまま屋上から去つて行った。内田達が去つた後、寿達は穂乃果達に頭を下げた。

寿「ごめん穂乃果、ことり、海未。せつかくの昼休みだったのに。」

龍馬「僕達を庇つたばかりに嫌な思いをさせて。」

啓太「本当にごめん。僕達のせいで。」

寿達は穂乃果達に謝つたが穂乃果達は慌てて。

穂乃果「そんな寿君達は悪くないよ。」

ことり「そうだよ龍馬君達のせいじゃないから気にしないで。」

海未「そうです頭を上げて下さい。元はと言えば啓太達を悪く言つた坂本達が悪いんです。だから気になさらないで下さい。」

寿「そうか。有難う。」

龍馬「そう言ってくれると嬉しい。」

啓太「さつきは僕達を庇ってくれて有難う。」

寿達は穂乃果達に先程の事でお礼を言う。また会話をした。会話の話題でそれぞれあの時の事を話すとその事で笑ったり、からかい合ったりしたのだった。

しかし、寿達は先程の事で内田達に完全にマークされる事となった。

昼休みの出来事 3年生編

寿達が穂乃果達と昼食を食べている時、敦也達は絵里達の様子を確認する為に3年生の教室へ向かっていた。

敦也「確か3年生の教室はあっちだったよな。」

賢「ああ。先生に聞いたから間違い無いぜ。」

博人「穂乃果達は寿達が見てるし、凜達の方は総司達に任せて大丈夫だ。とにかく俺達は3年生のメンバーの方を確認しよう。」

敦也「そうだな。」

敦也達はそう言いながら3年生の教室に向かっている最中、何人も女生徒達が3人を見ていた。聖剣の勇者達はテイルズオブシリィズの主人公の容姿をしているので、全員イケメンなのだ。その為に何人も女生徒達は彼等を見ているのだった。しかし、敦也と博人と賢の3人はその事に気づいていなかった。つまり朴念仁なのだ。3年生の教室の近くに來ると。

絵里「だから何度も言ってるじゃない。貴方と付き合うつもりは無いわ。」

小西「そんなに大きな声で言わなくても良いじゃないか絵里。付き合っただけだし。ってこんなに言ってもOKしてくれないのかい。」

絵里「勝手に私の名前を呼ばないでよ。それに何回言っても答えは同じよ。」

希の方では。

希「あのなあ菅野君やったけ。いくら何でもしつこいでうちは付き合う気は全然ないんや。」

菅野「そんなつれない事言わないでよ希ちゃん。嫌よ嫌よも好きのうち。って言葉があるじゃないか。今は嫌いでも長い時間をかけて仲良くしようよ。」

希「正直に言うとそのれ自体無駄な時間なんやけど。それに勝手にうちの名前呼ばんといて。」

にこの方では。

にこ「いい加減にしなさいよ。あたしは付き合う気はない。って言ってるでしょ。あんたみたいなチャラそうな男大嫌いなものよ。」

如月「酷いなあにこちゃん。俺は君が好きだから付き合ってくれ。って言ってるだけじゃないか。それに俺は君が言ってる様な男じゃないから。」

にこ「勝手に名前では呼ばないで。あたしはあんたが何度言っても付き合わないから。」

教室から大きな声が出たので行ってみると悪質転生者の小西が絵里に言い寄っていたのだった。さらに他の悪質転生者の菅野は希を、如月はにこを口説いていたのだった。

敦也「やっぱり俺達の考えは当たってたな。小西達が絵里達に言い寄ってるぞ。」

博人「やれやれ悪質転生者の連中は欲望全開状態じゃないか。周りの女生徒達も煙たがってるぞ。」

賢「全く呆れて物も言えねえな。μ、sの推しのキャラが好きなのは結構だが、迷惑な行動はするなよ。って言いたいぜ。」

敦也達は悪質転生者の小西達を見て呆れていた。特に敦也と博人はラブライバーでμ、sが好きでもあそこまではしないぞ。と思っていた。

敦也「よし俺は絵里を。博人は希を。賢はにこを頼む。」

博人・賢「わかった。」

敦也達はこのままにする訳には行かない為、止めに行く事にした。

小西「だから付き合ってくれよ絵里。こんなに愛してるのに。」

絵里「しつこいわね。いい加減にしなさいよ。」

敦也「ちよつと先輩何やってるですか。」

小西「何だよ。引っ込んでろよ。っってお前は2年の。」

敦也「北郷敦也ですよ小西先輩。」

小西「てめえの名前なんかどうでもいい。邪魔するな。」

敦也「やれやれ。昼休みだから校舎内を散策している最中に大声が聞こえたから来てみれば、あんたが一方的にその人にしつこく言い寄ってる様でしたけどね。」

小西「違う俺は絵里に付き合ってくれ。と言っただけだ。」

敦也「あのさあ先輩。別に誰かに告白したらいけない。と言うつもりは無いですけど、あまりにしつこいと女性に嫌われますよ。」

小西「うるせえ。何でお前なんかに注意されなきゃならねえんだよ。俺は先輩だぞ。てめえに指図されるつもりはねえんだよ。」

敦也「全く先輩だからって何でも好き勝手が通る訳無いでしょ。正直に言いますが、その人嫌がってるから止めた方が良いでしょう。」

小西「何だと（怒）てめえ調子に乗りやがって。」

敦也「おっと。殴ろうとしたらそれこそ問題になりますよ。あんただって初日に注意を受けたく無いでしょ。だから穏便に済ませたいんですよ。もう一度言いますけど止めた方が良いでしょう。それに周りを見たらどうですか。」

小西は敦也に言われて周りを見ると女子生徒達が明らかに小西に向けて毛虫でも見る様な目で見ていた。流石に不利で不味いと感じたのか。小西は言う通りにした。

小西「チツ。邪魔したな。」

そう言って小西は捨て台詞を吐いたあとに怒りながら教室を出た。その後、敦也は絵里に視線を向けた。

敦也「大丈夫ですか先輩？」

絵里「ええ有難う。あのー私の事を覚えてる？」

敦也「あ！貴方はあの時の人。この学校の生徒だったんですか。」

絵里「あの時といい、さっきの事といい本当に有難う助かったわ。私は絢瀬絵里。3年で生徒会長をやってるわよろしく北郷敦也君。」

敦也「え！何で俺の事を？」

絵里「ほら全校朝礼の時に自己紹介したじゃない。忘れたの？」

敦也「ああそうでしたね。すみません絢瀬先輩。」

絵里「謝らなくても大丈夫よ。さっきは本当に有難う北郷君。」

敦也「そんなお礼を言われる程の事じゃないですよ。」

こうして敦也は絵里を悪質転生者の小西から助けたのだった。

菅野「ねえ頼むよ希ちゃん。僕と付き合ってくれよー。」

博人「そこまでにした方が良かったよ。菅野先輩。」

菅野「誰だ邪魔するのは。き！君は確か？」

博人「2年の宮野博人。自己紹介したのに忘れたんすか？」

菅野「その2年が何か用かい。済まないが忙しいんだ邪魔しないでくれ。」

博人「止めてあげた方が良いつすよ。その人嫌がつてるじゃないっすか。あと周りの人の迷惑にもなってますよ。よく見たらどうっす

か。」

菅野は周りを見ると女子生徒達は先程の小西にも向けた視線で毛虫でも見る様な目で菅野を見ていた。これを見て菅野も状況は最悪と感じ、黙って教室から出た。しかし、出ていく時博人を親の敵でも見る様に睨み続けていた。

博人「やれやれ随分と目をつけられたな。」

博人は厄介事が出来て面倒臭そうに感じていた時。

希「あの一。君大丈夫。」

博人「ええ大丈夫ですよ。それより先輩こそ大丈夫ですか？あれ貴方はあの時の。」

希「覚えててくれたん。うちは3年で生徒会副会長の東條希や。よろしゅうな宮野博人君。」

博人「え！俺の事をどうして？」

希「もうー。全校朝礼の時に自己紹介してたやん。忘れてもうたん。」

博人「そういえばそうでしたね。すいません。」

希「それからあの時もそうやけど、さっきの事も含めて有難う。助かったわ。」

博人「いえいえ。とんでもないですよ。」

博人の方も無事に希を助けたのだった。

如月「いいじゃないかにこちゃん。最初はお友達からでもいいから。」

賢「如月先輩。その人困ってるみたいなんで止めた方が良くないんじゃないですか。」

如月「誰だ俺の邪魔をするのは。つてお前は2年の。」

賢「杉村賢ですよ。忘れたんですか先輩。」

如月「お前2年の癖に俺に説教する気か。こう見えても俺は格闘技の心得があるんだ。痛い目に合いたく無かったら邪魔をするな。」

賢「あんたは格闘技を人に暴力を振るう為にやってんのか。実力はどうかは知らないですけど、レベルが低く見えますね。」

如月「何だつて。お前は随分と生意気だな。だったらその実力を教えてやろうか。」

賢「殴るのはあんたの勝手だけど、ここで殴ったらどうなるかわからないんですか。そうしたらここにいる人達全員が証人になると思えますけど。」

如月「え!」

如月は周りを見ると明らかに女子生徒達が睨んでいた。ここで殴ったらどうなるかは火を見るより明らかだった。流石に周りに人がいる中で殴れば完全に自分の首を締めるも同然だとわかったようだ。

如月「今回は許してやる。だがなこのままでは済まさないからな。」

如月は賢に捨て台詞を吐いた後に教室から出ていった。

賢「全く格闘技は人に暴力を振るう為にあるんじゃないのに。」

賢は如月に呆れていると。

にこ「ねえあんた大丈夫？」

賢「はい俺は大丈夫ですよ。先輩こそ大丈夫ですか？あれもしかして貴方はあの時の？」

にこ「覚えててくれたの。あたしは矢澤にこよ。よろしく杉村賢君。」

賢「はいよろしく願いします矢澤先輩。」

にこ「さつきは有難う。それからあの時も助けてくれて有難う。」

賢「いえ。人として当然の事をしただけですよ。そんなお礼を言われる程の事じゃないですよ。」

にこ「でも、助けてくれたのは事実じゃない。お礼は素直に受け取りなさいよ。」

賢「ああはい。」

賢の方も問題なくにこを助けたのだった。

しかし、これにより敦也達は完全に小西達にマークされる事になってしまった。

昼休みの出来事 1年生編

寿達は2年生メンバー、敦也達は3年生メンバーに接触していた同時刻に総司と健司と恭介は1年生メンバーのいる教室を目指していた。

現在、総司と健司と恭介は1年生メンバーの様子を見に行く為に1年生の教室へ向かっていた。

総司「先生から1年生の教室はこっちだって言ってたよな。正直何も無ければ良いけどな。」

健司「だが1年生のクラスは1つだけだって言ってたからな。1年生メンバー全員は悪質転生者の花笠、白咲、飛鳥路と同じクラスなんだ。確認しておいた方が良いからな。」

恭介「そうだね。もし彼らが1年生メンバーに手を出そうとしてたら危ないからね。でも、出来れば総司の言うとおり何も無ければ良い。と言うのが本音だけど。」

しかし、総司達の「何も無ければ」という思いはすぐに崩れ去る事となった。1年生のクラスの近くまで来ると。

凜「いい加減に止めるにやー。私とかよちゃんはあんた達と付き合い合わない。って言ってるのにしつこいにや。」

花陽「悪いんだけど、花笠君と白咲君とは私も凜ちゃんも付き合い合えません。だから諦めて下さい。」

花笠「酷いな凜。頭を下げた頼んでるのにそんな言い方は無いじゃ

ないか。」

白咲「そうだよ花陽ちゃん。僕は真剣なのに、本気なのに僕の何がいけないんだ。凜ちゃんも花笠の何がいけないんだ。」

凜「勝手に私とかよちんを名前で呼ばないで。名前で呼ぶ許可すらあげてないにや。」

花陽「私も正直言うとしつこい人は嫌なんです。」

花笠と白咲は凜と花陽に告白しているも、断られている様子だった。しかし、それでもしつこく迫っていた。

真姫「イミワカンナイ。大体あんたは何よ。突然やってきて「一目惚れしました。付き合ってください。」ですって？悪いけど付き合う事自体嫌だから。」

飛鳥路「そんなにきつい言い方しないでくれよ真姫。知り合ったばかりだから混乱するだろうけど。急には無理だったらまずは友達からでも良いからさ。」

真姫「気安く名前で呼ばないでくれる。何回言ってきたても答えはN Oよ。」

飛鳥路の方も真姫に告白しているも、断れていた。それにも関わらず飛鳥路は真姫に言い寄っていた。

それを見ていた総司達は汚物を見る目で花笠達を見て、嫌な気分だった。

総司「やれやれ俺達の悪い予感当たっていたな。悪質転生者が

さっそくふざけた真似をしてやがる。」

健司「全く同じ男として恥ずかしいぜ。見ているだけで奴等は性根が腐ってる。とわかるぜ。」

恭介「ほんと。勝手な行動して同じ男である僕達まで変に誤解されてしまったらどうしてくれるんだ。正直言うとおあいう連中は警察や裁判所に訴えたい気分だよ。」

総司「だが愚痴を言っても始まらない。とにかく、sの1年生メンバーを早く助けようぜ。俺と健司はあの2人を恭介はあつちの子を頼む。」

健司、恭介「了解。」

総司達はさっそく1年生メンバーを助ける為に行動をした。

凜「だからあ。しつこいって何度も言ってるにやー。いい加減に諦めて。」

花陽「お願いですから、もう止めて下さい。」

花笠「こつちの告白をOKしてくれるまで諦めないよ。」

白咲「僕もだ。頼むから付き合ってください。」

総司「そこまでだ。花笠君、白咲君。」

健司「あまりしつこすぎるといいうのも問題だぞ。」

花笠「何だと。誰だ邪魔すんのわ。ってあんた達は2年の。」

総司「2年の遠野総司だ。自己紹介したのに忘れたのかい？」

健司「同じく2年の遠野健司だ。君達その子達困ってるじゃないか。止めてあげたらどうなんだ？」

白咲「これはこれは遠野先輩達じゃないですか。でもいくら先輩でも人の邪魔をするのはいけないですね。僕と花笠君は彼女達に告白しているだけなのに。」

健司「白咲と花笠だったよな。人に告白するのは勝手だ。でも嫌がる相手にしつこく言い寄ると周りにも迷惑がかかるんだよ。少しは男として人としてのルールは守れよ。」

花笠「先輩達こそ何を言ってるんですか。俺と白咲は告白してるだけですよ。それなのに周りにどんな迷惑をかけてる。つて言うんですか。理不尽な説教するなら許しませんよ。」

総司「注意してもわからないなら仕方ない。周りにいる人達の様子を見れば分かるだろ。」

花笠、白咲「えー！」

総司に言われて花笠、白咲の2人は周りを見てみると明らかに女子生徒達が2人に対して迷惑そうな目で見ていた。ようやく自分達の立場の危うさがわかった様子だった。

花笠「そのようですね。これは失礼しました。先程は大変申し訳ありませんでした。行くぞ白咲。」

白咲「わかった。どうもすみませんでした先輩達。」

花笠と白咲は流石に先輩相手に上から目線の態度は余計に立場を悪くすると思ひ謝った。その後教室から出たのだった。

しかし、心の中では。

花笠（心の声）「ちくしょー遠野のヤロー共。覚えてろよ。」

白咲（心の声）「よくも邪魔してくれたな。必ず仕返ししてやる。」

と、悪意に満ちていた。

総司「謝っていたけど、絶対に腹の底では俺達に仕返しする気満々だぞ絶対。」

健司「だろうな。あいつら必ず何か仕掛けてくるだろうな。」

総司と健司は呆れながら、小声で話していた時。

凜「あの一。さっきは私とかよちんを助けてくれて有難うございました。」

花陽「あ・・・有難うございます。おかげで助かりました。」

総司「気にしないでくれ。大きな声が聞こえたから来てみたら、君達困っていたし、ほっとく訳にはいかなかったからね。」

健司「あれ君達はその時ラーメン屋の。なあ兄貴この子達は以前ラーメン屋であった子達じゃないか？」

総司「あ！あの時の人達。君達この学校に入学してたんだ。」

凜「覚えててくれたんですか。良かった忘れられてたらどうしようかと思って、私は星空凜です。よろしくにゃー遠野先輩。」

総司「あのー。もし良かったら名前で呼んでくれないかな。名字だとどっちかわからないからさ。健司も名前で良いか？」

健司「ああ。兄貴が良いなら俺も良いぜ。」

凜「じゃあ総司先輩と健司先輩で。さつきは有難うございます。それからよろしくにゃー。」

総司「うん。こちらこそよろしく星空さん。」

健司「おう。よろしくな。」

花陽「さつきは私と凜ちゃんを助けてくれて有難うございました。私は小泉花陽です。よろしくお願いします健司先輩、総司先輩。」

健司「ああよろしく。小泉さん。」

総司「こちらこそよろしく。」

こうして総司と健司は凜と花陽を悪質転生者の花笠と白咲の二人組から守ったのだった。

真姫「しつこいわね。さつきから目障りなんだけど。」

飛鳥路「冷たい言い方しないでくれよ。仲良くしようよ真姫。何度断っても諦めないよ俺は。」

恭介「ストロップ。そこまでにした方が良いよ飛鳥路君。」

飛鳥路「何だせつかくの告白を邪魔すんのは。ってあんたは2年の。」

恭介「浅見恭介だよ。忘れたのかい。」

飛鳥路「浅見先輩。何のようですか？俺はこの子に真姫に愛の告白をしてるだけなんですよ。邪魔しないでくれませんか？」

恭介「飛鳥路君。僕は告白をするな。とは言わない。でもだからといってしつこいと相手の人や周りの人達が迷惑するんだよ。気づいていないみたいだから教えてあげるけど、周りの様子を見た方が良いでしょう。」

飛鳥路「え！」

恭介に言われて飛鳥路は周りを見ると自分に向けて女子生徒達が睨んでいた。自分の立場を理解したのか飛鳥路は恭介に向けて。

飛鳥路「どうもすみません。浅見先輩の言うとおりですね。周りにも迷惑になってました。大変失礼しました。」

飛鳥路はそう言って謝罪すると教室を出ていった。だが本心は。

飛鳥路（心の声）「くそー浅見の奴め。よくも俺に恥をかかせてくれたな。絶対に殺してやる。」

と強い怒りでいっぱいだった。

浅見「さっきのは絶対に心にもない謝罪だな。必ず逆恨みしてくる

かもしれないから用心しないと。」

恭介がそう考えていると。

真姫「あの一。助けてくれて有難うございます。」

恭介「礼にはおよばないよ。大丈夫だった？おや君はもしかしてあの時本屋にいた人？」

真姫「はい。覚えててくれたんですね。私は西木野真姫です。よろしく願います浅見恭介先輩。」

恭介「こちらこそよろしくね。西木野さん。」

恭介の方も無事に真姫を助けたのだった。

しかし、μ sのメンバー達を助けた事によって聖剣の勇者達は完全に悪質転生者達から確実にマークされたのは言うまでもない。

歌の女神となる少女との触れ合い 前編

聖剣の勇者である寿達は、μsになるメンバー達を悪質転生者達から守る事が出来たが、この出来事によって悪質転生者達を敵にまわす事となった。

現在、放課後に各悪質転生者達は寿達の事で話しをしていた。

まず内田組はカフェにて話し合いをしていた。

内田「と言う訳なんだよ。せっかくマネージャーになる筈だったのに同じクラスの手塚達に邪魔されたのが原因で失敗に終わったうえに、担任の山田に穂乃果達が話していたのか説教くらう羽目になっちまったよ。それに竜帝からももらった力すらも全然効かねえし散々だった。」

小西「こつちもだ。2年の北郷に邪魔されたせいで、絵里だけじゃなくクラスの女子達にまで嫌われたんだよ。そのうえ誰が担任の先生にチクったのか同じクラスになった菅野と如月と一緒に叱りを受ける羽目になった。菅野達も邪魔だが1番邪魔なのは北郷とお前らが言う手塚達だな。」

飛鳥路「ほんとだぜ。あの浅見のヤローのおかげで俺も先生に説教されたぜ。これじゃあ真姫だけじゃなく他のμsのメンバーに近づく事も出来なくなった。」

と自分達が原因だと考えておらず、寿達を悪く言っていた。

栗林組の方はマクドで会話していた。

栗林「全く高梨達のせいとんだ災難だったぜ。彼奴等が邪魔したおかげでマネージャーになる計画はパーだ。」

坂本「ほんとむかつくよな。本宮達のおかげで俺は海未に平手打ちをくらう羽目になっちまっただけじゃなく、俺達は担任から説教されちまったよ。」

菅野「こつちだつて最悪さ。2年の宮野が邪魔してくれたおかげで希だけじゃなくて、他の女子達にまで目の敵にされちまったよ。黒の貴公子の奴からもらった力が効かないってどうなってるんだ。」

龍馬達を悪く言っており、自分達は被害者みたいな発言ばかりしていた。

花笠組はミスドにて今日の出来事を話していた。

花笠「ちくしょー。何だよ遠野兄弟の連中は先輩だからって調子に乗りやがって。逆にこつちが腹立つわ。」

白咲「ほんとだね。あの2人のせいで僕等は花陽と凜はおろか他の女子達に嫌われたで最悪だよ。」

如月「クツソー。何なんだよ今日に限って仮面の道士からもらった力が効果が無いなんて、一体どうなってんだ。それにあの杉村の奴め2年の分際で偉そうにしやがって必ず復讐してやる。」

完全に総司達に逆恨みをしていた。救いようがない程に。

実は昼休みの事が原因で内田を始め、各悪質転生者達は担任から凄く注意されてしまったのだ。さらにその噂が広まったのかクラス内でも嫌われてしまったのだった。自業自得だが。

現在、聖剣の勇者メンバー達はというと、まず寿は。

穂乃果「ねえ寿君。もし良かったら私の家は和菓子屋だから今日食べに来ない？」

寿「良いのか穂乃果。誘ってくれるのは嬉しいけど、家族の人達の迷惑にならない？」

穂乃果「そんな事無いよ。むしろ大歓迎だよ」

寿「そうか？じゃあお言葉に甘えてお邪魔するよ。」

穂乃果「やったー。じゃあ一緒に帰ろう。」

寿「ああわかった。」

何故か寿は穂乃果に今日家に来ないか。と誘われ、一緒に帰る事になった。

寿「でも穂乃果。龍馬と啓太とことりと海未は誘わなくて良かったのか？」

穂乃果「ことりちゃんと海未ちゃん達も誘ったよ。でもことりちゃんは予定があるって言ってたし、海未ちゃんも家の用事があるって言ってたから。それに龍馬君は家までことりちゃんを送って行く事になったでしょ。啓太君も海未ちゃんを送って行く事になった訳だし。」

寿「ああ昼休みの内田達の事があったからな。それで一人で帰るのが怖くなったから一緒に帰る事になったんだよな。」

フェアリー「寿！」

寿の頭の中から声が聞こえてきた。実は寿はフェアリー達に悪質転生者達の事を話していたので、フェアリーと8精霊達に頼んで周囲を確認してもらっていたのだった。

寿(心の声)「どうだったフェアリー。内田達の誰かが後をつけたりしてないか？」

フェアリー「大丈夫。精霊達からの連絡もあったけど、悪質転生者の動きはおろか気配は全く無いよ。でも、気を付けて今日は特に無く

ても、きつと何か仕掛けてくるはずだよ。」

ちなみにフェアリーの声は穂乃果だけでなく、周囲の人達にも聞こえていないので寿とフェアリーは気にせず心の中で会話しているのだ。

寿(心の声)「わかってる。とにかく穂乃果は俺がついてるから、敦也達と他のμ'sのメンバーの子達を頼む。」

フェアリー「わかった任せて。」

そう言うとフェアリーは消えた。

穂乃果「ねえ寿君？」

寿「うん？何だ穂乃果。」

穂乃果「どうしたの？何か難しい顔をしてたけど。何処か具合が悪いの？」

寿「いや大丈夫だ穂乃果。実を言うと俺は女の子の家に行くの初めてだからさ。ちょっと緊張してるだけだよ。」

穂乃果「そうなの？寿君かっこいいし、モテそうなのに彼女とかいなかったの。」

寿「そんな事は無いよ。今まで女の子と付き合った事すら無いし、俺はそれ程の男じゃないさ。」

穂乃果「違うよ！」

突然穂乃果は周囲に人がいるにも関わらずに大きな声を出して、寿がさつき言った事を否定したのだった。

穂乃果「寿君はカッコいいし、優しいし、とても素敵な男の子だよ。だからそんな風に言っちゃ駄目。」

寿「ああわかった穂乃果。だからそんなに大きな声を出すなよ。周りに人がいるんだから。」

穂乃果「え？あ／＼」

ようやく自分は周りに人がいるにも関わらず大きな声を出していたのに気が付いたのか顔を真っ赤にした。

寿「すいません皆さん。穂乃果早く行くぞ。」

穂乃果「え！」

寿は穂乃果の手を引いてその場から逃げるように離れたのだった。

寿「ハアハアハアハア。全く急に声を出すから俺まで恥ずかしかつたぞ。」

穂乃果「あのー寿君／＼」

寿「何？」

穂乃果「手を離してくれ／＼」

寿「え！」

寿は自分の右手を見ると穂乃果の左手をずっと繋いだままだった事に気が付いたのだった。指摘された寿は顔を真っ赤にしてすぐに離れた。

寿「ご、ごめん穂乃果。いやーあそこにずっといる訳にもいかなかったし、なんて言うか。とにかくごめん急に手を繋いだりして。」

穂乃果「いやいやそんなに気にしないで。恥ずかしかったけど、手を繋いだ事は嫌じゃなかったから。」

寿「でも、俺は勝手に穂乃果の手を握ってしまったんだ。何か迷惑をかけたんじゃないかと思って。とにかくごめん。」

寿は謝り続けていると。

穂乃果「迷惑だなんて、私はそんな事思っていないよ。寧ろその私は……（小声）嬉しかったから。」

寿「え、今なんて？」

穂乃果「な、何でもないよ／＼それより早く私の家に行こう。」

寿「お、おう？」

穂乃果（心の声）「あー聞こえてなくて良かった。でもさっき言ったこと恥ずかしかった。」

その後、寿は穂乃果の実家の老舗の和菓子屋「穂むら」で和菓子を

ご馳走になった。最初、穂乃果の家族の人達は「彼氏」かと言われたが穂乃果は慌てて違うことを伝えたのだった。しかし、穂乃果は顔を真っ赤にしていた。

敦也の方は、現在生徒会室へ向かっていた。

敦也「でも、何で絵里は俺に「今日予定が無いなら放課後生徒会室に来てくれ。」と言ったんだらう。何か話しがあるとは言つてたけど。」

実は昼休みに教室へ戻る前に敦也は絵里から「今日放課後に生徒会室に来てほしい。」と言われたので生徒会室へと足を運んでいるのだった。生徒会室前にやって来た敦也はドアをノックした。

コンコン。

絵里「はい。」

敦也「あの絢瀬先輩。北郷です。入って良いですか？」

絵里「どうぞ入って。」

敦也「失礼します。」

生徒会室に入ると敦也は一度礼をする。

絵里「その椅子に座って北郷君。」

敦也「はい。では失礼します。」

敦也は言われたとおりに椅子に座った。

敦也「あのー絢瀬先輩。どうしても俺を生徒会室に？話しがあるなら別の所でも良いんじゃない？」

絵里「ごめんなさい。どうしても大切な話があつて来てもらったの。」

敦也「え？」

敦也は「大切な話があつて」と言われた途端少し緊張していた。

敦也（心の声）「大切な話。もしかしてこゝ、告白か？」

と思つていた敦也だったが。

絵里「実は北郷君さえ良かったら、生徒会に入つてほしいの。」

敦也「え？お、俺が生徒会にですか？」

絵里「ええ。男子のテスト生の貴方に前の高校の話とか聞かせてほしいのも理由だけど、廃校の阻止の為にも良かったら力を貸して欲しい。」

敦也「ああそうなんですか。」

敦也（心の声）「そうだよな。会つて間もない男に告白だなんて、ア

ニメやマンガや恋愛ゲームとかじゃあるまいし。そんな展開がある訳無いよな。まあラブライブはアニメだけど。」

と敦也は少し残念な気持ちだったが、平静を保つ様になっていた。

敦也「でも、俺で良いんですか？他にもテスト生の男子生徒がいるじゃないですか。だから俺じゃなくても。」

絵里「駄目！」

敦也「うわあ！絢瀬先輩いきなり声を出さなくても。」

絵里「あぁごめんなさい。あの北郷君じゃないと駄目なの。その頼りになるから。」

敦也「でも、俺今まで生徒会の仕事とかやった事無いですよ。迷惑かけるかもしれませんし。」

絵里「それについては私がしっかり教えるから大丈夫。それに最初は誰でも上手く出来る訳じゃないわ。」

絵里は真っ直ぐな目で敦也を見ていた。悩んでいると不意に頭から声が聞こえてきた。

フェアリー「敦也！」

敦也（心の声）「フェアリー！ど、どうして。」

フェアリー「しー。声を出さずによく聞いて、私の声は今貴方にしか聞こえて無いから。敦也ここは悪質転生者達の事もあるし、ボディーガードを兼ねて生徒会に入って、彼女を守ってあげて。生徒会

の一員なら生徒会室にいくら出入りしても問題無い訳だし。それに近くにいた方が何かと都合が良いでしょ。」

フェアリーにそう言われた敦也は確かに生徒会に入れば絵里のボディーガードが出来る上に接触しやすいと思った。そう考えた敦也はすぐに声を出した。

敦也「わかりました。あまり役に立てるかどうかわからないですけど、俺で良かったら生徒会に入ります。」

絵里「ほんと！有難う。」

敦也はボディーガードを兼ねて生徒会に入る事にした。しかし敦也はあくまで絵里を守る為と心に言い聞かせた。その後、生徒会に入る為の書類の説明を受け、書類の記入をした。あとは生徒会顧問と担任からの許可とサインをもらう様に言われた。終わった後で敦也は明日担任の先生と生徒会顧問にサインと許可をもらってくる事を告げて、生徒会室を退室して帰ったのだった。

敦也が帰った後で、1人生徒会室に残った絵里はというと。

絵里「やったー！北郷君を生徒会にスカウトする事が出来た。これならいつでも北郷君に会える。それに話しだっっていつでも出来る。」

絵里は敦也を生徒会にスカウトする事が出来て、とても喜んでいった。絵里が敦也をスカウトしたのは廃校阻止の為に協力してほしいのも理由だが本当の理由は一目惚れをした敦也と少しでも一緒にいたいというのが1番の理由だったのだ。当の敦也はその事さえ気づいていないが。

龍馬の方は、何故かことりと一緒に下校していた。一緒に下校した理由は昼休みの栗林達の事がある為、ことりは不安だったので龍馬がボディーガードを兼ねて一緒に帰る事になったのだ。半分は寿達からの意見もあるが。何よりも彼女の「おねがい」にやられてしまったのだ。

ことり「ごめんね龍馬君。私の為に一緒に帰る事になっちゃって。」

龍馬「いや気にしなくていいよことり。それに寿と啓太が言ったものもあるけど、昼休みにあんな事があったんだから不安なのは当然だよ。それに僕の家もこっち方面だからさ。」

ことり「あ、ありがとう龍馬君／＼」

ことりは龍馬と一緒に帰る最中に何度も意識していた。

ことり（心の声）「あーやっぱりドキドキする／＼こうして一緒に帰っていると高校生カップルが仲良く帰ってるみたい。周りの人達には私達はカップルに見えてるのかな。」

龍馬「ねえことり。」

ことり「は、はい！」

龍馬「どうしたの顔が赤いけど？もしかして熱でもあるんじゃない、ちよつとごめん。」

ことり「え！ちよつと待って。」

龍馬は自分のおでこをことりのおでこにくっつけ、熱があるかないかを確認した。

ことり(心の声)「えー！ちよつと何。この恋愛マンガにある様な展開は？しかも龍馬君の顔が近い、近すぎるよ。」

ことりは突然のシチュエーションにもう心臓がドキドキしっぱなしだった。

龍馬「うーん？熱は無いみたいだね。良かった。あれ？ことり大丈夫？」

ことり「／／／／」

龍馬「ねえことりどうしたの大丈夫！」

ことり「プシュー／／」

龍馬「ことりしっかりして一体どうしたんだ？ことりー！」

お前が原因だよ龍馬。このリア充が。

それを遠くで見っていたフェアリーは呆れた顔をしていた。

フェアリー「全く龍馬ったら全然わかってないんだから、ホントに鈍感ね。まあ寿達にも言える事だけど。」

歌の女神となる少女との触れ合い 中編

総司と健司は現在音ノ木坂学院の校門前で待ち合わせをしていた。その待ち合わせをしている相手はというと。

凜「総司先輩、健司先輩お待たせしましたにやー。」

花陽「遅くなってしまつてごめんなさい。」

総司「ああ大丈夫。そんなに待つてないよ。」

健司「俺たちもさつき来たばかりだから気にしなくて大丈夫だ。」

何故か総司と健司はのちにμ'sのメンバーとなる凜と花陽と待ち合わせをして一緒に帰る事になったのだ。何故こういう流れになったかという点、その理由は今日の休み時間に教室に戻る前に遡る。

総司「え！今日俺達と一緒に帰りたい。」

凜「そうですにやー。さつきの花笠と白咲がいつ凜とかよちに近づいてくるかわからないから、もし良かったら総司先輩と健司先輩に家まで送ってくれないかと思つて。」

花陽「ちよつと凜ちゃん。流石にそれは先輩達に悪いよ。」

花陽はこれ以上総司と健司に迷惑をかけられない。と思つてそう言うが、総司と健司は。

健司「良いよ。俺達で良かったら、総司も良いよな。」

総司「ああ。俺達で良いなら家まで送るよ。」

凜「やったー。流石総司先輩と健司先輩だにゃー。」

花陽「でも良いんですか？健司先輩、総司先輩。」

総司「ああ。俺達の事は気にしなくて良いよ。」

という訳で総司と健司は今日凜と花陽と一緒に帰る事になったのだった。帰る前に総司は凜と花陽に。

総司「ねえ星空さん、小泉さんこの後何か予定とかある？」

凜「いいえ特に予定はないですよにゃ。」

花陽「私も特に用事とかはないです。」

総司「もし良かったら俺達の両親が経営してる洋菓子店に来ない。飲食スペースがあるから、そこで食べる事も出来るんだ。君達さえ良ければだけど。」

凜「総司先輩と健司先輩のお父さんとお母さんは洋菓子店をやってるんですかにゃ！」

健司「ああ。うちの両親は洋菓子店をやっててね。ケーキやシュークリームやクレープとか様々な洋菓子を作ってるんだ。それで2人が良かったら来ないか？」

花陽「良いんですか？私達が先輩達のご両親の洋菓子店に行っても？」

健司「勿論だ。」

総司「君達さえ良ければだけど。」

凜「行きます。行かせてもらいますにや。」

花陽「じゃあお言葉に甘えて私も。」

こうして総司と健司は凜と花陽を連れて両親の洋菓子店に向かった。

両親の洋菓子店へやってきた総司と健司は働いてる両親に声を掛けた。

総司「父さん、母さんただいま。」

健司「ただいま父さん、母さん。」

誠司「おうおかえり総司、健司。」

翔子「おかえりなさい総司、健司。」

総司と健司が声を掛ける。と返事したのは2人の両親である。遠野誠司と遠野翔子である。

凜「あのーお邪魔します。」

花陽「失礼します。」

凜と花陽を見た瞬間、誠司と翔子は。

誠司「ああああ。おい母さん。総司と健司が女の子を連れて来たぞ。」

翔子「お、落ち着いてあなた。と、とにかくおもてなしの準備をしないよ。」

総司「おいおい。父さん、母さん何勘違いしてるか知らないけど、この子達は二人が想像してる様な関係じゃないよ。」

健司「この子達は俺達がテスト生として通う事になった音ノ木坂学院の1年で俺達の後輩の子達だよ。」

誠司・翔子「「え?」」

その後、総司と健司は凜と花陽と一緒に両親に詳しく説明をしたのだった。ようやくその事を理解した両親だったが。

翔子「そうだったの。ごめんなさいね星空さん、小泉さん。この子達は男友達は連れてくるけれど女の子とか連れてくるの初めてだったから、てつきり総司と健司の彼女かと思って。」

健司「全く一体何がどう勘違いして俺達の彼女だと思ったんだよ。」

総司「本当にな。それにそんな事を言ったらこの子達に迷惑だろう。ごめんね星空さん、小泉さんうちの両親が勝手な事を言って。」

凜「いえ。そんな事は無いですよ。気にしないで下さい。」

花陽「ええ私も大丈夫ですから。」

でも、凜と花陽は心の底では彼女と間違えられた事は満更でもない。様子だった。

総司「じゃあ父さん、母さん。悪いけど星空さんと小泉さんに何か洋菓子をあげてくれない。」

健司「せっかく来てくれたわけだしね。小泉さん、星空さんは何にする？ ケーキやシュークリームやクレープとか色々あるから好きなの言つて。」

凜「そうですか。じゃあ凜はミルクティーをお願いします。」

花陽「私はフルーツタルトをお願いします。」

翔子「はい。じゃあ星空さん、小泉さんすぐに用意するから少し待つててね。総司と健司はどうするの？」

総司「じゃあ俺は抹茶のロールケーキを頼むよ。」

健司「俺はレモンパイを頼む。」

翔子「わかったわ。」

誠司「では私は飲み物を用意しよう。飲み物は何にする？」

総司「俺はミルクティーを。」

健司「俺はレモンティーを頼むね。」

凜「私はココアをお願いします。」

花陽「私もココアをお願いします。」

誠司「わかった。じゃあ少し待っていてくれ。」

その後、総司と健司は凜と花陽と一緒に洋菓子とお茶を味わいながら会話をした。終わった後に総司と健司は凜と花陽を家まで送って行ったのだった。夕食の時、総司と健司は両親に凜と花陽の事で色々とからかわれたのは言うまでもなかった。

一方、博人の方では。

博人「一体どうしてこうなったんだ俺は。何で俺は希の神社のバイトが終わった後に一緒に帰る事になったんだ。」

遡る事、昼休みの時に博人は希に「放課後中庭に来て欲しい。」と言われて中庭に来た時の事だった。

博人「ええ！俺が先輩と一緒にですか。」

希「そうなんよ。昼休みウチは菅野君に絡まれてしまったやん。だからストーカーとかされたら嫌やし。だから急に頼んで申し訳無いとは思ってるんやけど、宮野君お願い一緒に帰ってくれへん。でもウチはバイトもあるからバイトが終わるまで宮野君には近くにいて欲しいんや駄目かな?。」

博人は悩んだ。推しのキャラである希と一緒に帰る事が出来るの

は嬉しいが、悪の勢力と悪質転生者達と戦う身である自分が希に深く関わり過ぎて大丈夫なのかと。しかし、今日の昼休みの悪質転生者の事もあるし、一人にするのはとても危険だと思ったので少し考えたと声を出した。

博人「わかりました。俺で良かったら構いませんよ。今日特に予定とかはありませんから。」

希「やった！流石宮野君や。じゃあ神田明神まで行こか。」

博人「は、はい。」

それで博人は希の護衛の為にバイト先の神田明神と自宅まで一緒に帰る事になったのだった。バイトが終わるまでの間、博人は菅野を始めとする悪質転生者達が来ないかどうか希の見守りをしながら警戒をしていた。今の所悪質転生者がやっては来ていなかった。しばらくするとフェアリーがやってきたので博人は少し離れた場所に移動した。

フェアリー「博人。」

博人「おうフェアリーどうだった。菅野の奴と他の悪質転生者は？」

フェアリー「大丈夫。悪質転生者達は来ていなかったわ。他の精霊達からの連絡で隠れそうな場所も確認したけどいなかったわ。」

博人「そうか有難うなフェアリー。俺や啓太達に協力してくれて感謝してるよ。」

フェアリー「気にしないで。私も精霊達も自分の意志で協力してる

んだからお礼は言わなくて良いよ。」

博人「そうか。でも、フェアリー達が協力してくれている事は本当に感謝してるぜ。」

博人がフェアリーと会話をしていると。

希「宮野君何処ー。今ウチバイト終わったから一緒に帰ろう。」

博人「あーごめんフェアリー。希が呼んでるからまた何かあったら連絡を頼む。」

フェアリー「OK。博人も気をつけてね。」

フェアリーと別れた博人は希の方へと向かって走って行った。

博人「東條先輩。」

希「宮野君。何処に行ってたん。おらへんから心配したやん。」

博人「すみません。ちよつとトイレに行つてて。」

希「そう？なら良いわ。じゃあ家までしつかりウチをエスコートしてや。」

博人「はい。わかりました。」

そして、博人は希を家まで送って行ったのだった。

歌の女神となる少女との触れ合い 後編

啓太は今海未と一緒に下校していた。

海未「ごめんなさい啓太。私の為に一緒に下校してもらおう事になってしまった。」

啓太「気にしないで海未。君に何かあったらいけないからね。それに僕も心配だから。」

海未「あ、ありがとうございます／＼」

啓太にそう言われると海未は顔を真っ赤にしながらも嬉しそうな様子だった。

海未の家につくまでの間、しばらく会話をしながら一緒に下校する啓太であった。

啓太「へえー。海未のお父さんは剣道の師範で、お母さんは日舞の家元なんだ。じゃあ海未も剣道か日舞をやってるの？」

海未「はい。私も幼い頃からお父様とお母様から剣道と日舞を学んでいましたから。」

啓太「そうなんだ。海未は凄いな。幼い頃から剣道と日舞をやってるなんて。辛いつて思った事は無いの？」

海未「最初は辛い。と思った事はありました。でも、今では当たり前のように感じています。」

啓太「そうか。海未は凄い努力家なんだね。何かそういうの尊敬しちゃうよ。それに穂乃果とことりが言ってたけど、弓道部に所属しているのにスクールアイドルも両立してるしね。」

海未「そ、そんな／＼私はそれ程の者じゃないですよ。」

啓太が褒めると海未は照れていた。

啓太「海未はご両親とお祖母さんを含めて何人家族なの？」

海未「両親と祖母と姉と弟との6人家族なんです。啓太のご家族は？」

啓太「僕は両親と妹との4人家族なんだ。」

海未「啓太は妹さんがいらっしやるんですか。」

啓太「うん。以前は病気で入院生活が続いていたんだけど、今は元気になるって小学校に通ってるよ。」

海未「そうだったんですか。所で啓太のご両親は何をしてる方なんですか？」

啓太「父さんは弁護士で、母さんは孤児院の院長をしてるよ。」

海未「そうですか。啓太のお父様は弁護士で、お母様は孤児院の院長をなさってるんですか。」

啓太「うん。僕の自慢の両親だよ。それに僕もいつか父さんと同じ弁護士になって多くの人を助けるのが僕の夢なんだ。」

海未「啓太は立派ですね。将来の夢は弁護士になる事だなんて。何だかそういう殿方って素敵ですよ。」

啓太「そうかな。でも有難う海未お世辞でも嬉しいよ。」

海未「お世辞じゃありません。本当に啓太は素敵な殿方です。あの時だってお祖母様のバッグを取り返してくれたんですから。」

啓太「有難う。ねえあれが海未の家かい？」

海未「はい。あれが私の家です。有難うございます啓太。送って下さって。」

啓太「いやいやこれぐらいなんて事無いよ。じゃあね海未。」

海未「あの啓太！」

啓太「ん？何だい海未。」

海未「私スクールアイドル頑張ります。それからもし良かったらこれからもお話ししませんか？」

啓太「うん。もちろんだよ。また明日ね海未。」

啓太はそう言うのと海未に手を振って帰ったのだった。

一方、恭介の方は。

恭介「良いのかい西木野さん。奢ってもらうなんて何だか悪いよ。」

真姫「良いんですよ浅見先輩。あの時と今日助けてくれたお礼をしたいと思っていたので、気にしないで下さい。」

恭介は真姫にあの時の本屋での事を含めて、今日のお礼をさせてほしい。と言われたのだ。最初は恭介は断ったが真姫はそれでもお礼がしたい。言ったので恭介は「じゃあサーティワンのアイスを奢ってくれる?」と言うと真姫は了承したのだ。さらに飛鳥路の件で家まで送ってほしい。と頼まれたので一緒に帰る事になったのだ。そして、今はサーティワンの店でアイスを一緒に食べていたのだ。

真姫「でも、お礼がしたいとは言いましたが、サーティワンのアイスを奢ってほしい。だなんて浅見先輩はアイスが好きなんですね。」

恭介「あはは。まあアイスは好きだからね。」

それから恭介と真姫はアイスを食べながら楽しく会話をしたのだ。家族の事、学校の事、様々な話題を出して会話をした。

恭介「へえ、西木野さんは、本当はUTX学院に行こうと思ってたんだ。それに君はあの西木野総合病院の院長の娘さんなのか。」

真姫「ええ。私は最初はUTX学院に行こう。と思ってたんですけど、両親の勧めで音ノ木坂学院に入ったんです。それに私は将来医者になるんです。」

真姫は将来の事を話すと何だか元気がない表情になった。

恭介「どうしたの西木野さん？何か悩みがあるなら言ってくれないか。あの時と今日会ったばかりの男である僕に話したくないなら無理にとは言わないけど。」

真姫「いえ有難うございます浅見先輩。話します。実は。」

それから真姫は恭介に全て話した。自分は音楽が好きである事、医者になるのは嫌では無いが両親から言われているのが理由でもある事、自分の音楽は終わった事。様々な悩みを打ち明けたのだった。恭介は嫌な顔せず真姫の悩みをしっかりと聞いていた。話し終えた真姫は少ししてから落ち着いて口を開いた。

真姫「ごめんなさい浅見先輩。私の悩みばかり話してしまつて。」

恭介「気にしないで西木野さん。誰だつて悩みの1つや2つはあるのは当然さ。それにわかるよ。好きなのに諦めたり、終わりにしなければならぬ。って考える事が辛い気持ちだ。かつての僕もそうだったんだ。」

真姫「浅見先輩も？」

恭介「実はね西木野さん。僕は小学生の時に野球やつてたんだ。最初は下手だったけど、毎日必死に頑張つて練習をしてたんだ。その努力が実つたおかげかスタメンに選ばれた時は凄く嬉しかった。チームでの練習は辛い事や大変な事も当然あつたけど、仲の良い友達と一緒に野球をしている時はとても嬉しかったし楽しかった。だから僕は練習を頑張つたんだ。友達とこれからも一緒に野球を続けて行けるとそう思っていた。でも、そんな日は長くは続かなかつた。」

真姫「何があつたんですか？」

恭介「僕は試合でも活躍してから他のチームからも一目置かれる様になったんだ。でも、それをよく思わないチームメイトも何人かいてね。そのメンバー達から酷いいじめを受けたんだ。カバンやユニフォームに落書きをされたり、時には殴れたりもした。当然監督にも相談したけど、監督はそのメンバー達の親の友人でメンバー達を鼻負していたから全く聞いてくれなかった。それどころかそのメンバー達を味方する始末だった。僕と仲良くしてくれた友達の人達も監督やそのメンバー達に逆らう事も出来なかった。だけど、友達の事は恨んでいないよ。もし監督とそいつ等に逆らったらどんな目にあうか。というのもあったし、下手すればチームから追い出されてしまう恐れもあったからね。その後、僕はチームだけでなく野球も辞めたんだ。」

真姫「イミワカンナイ!!そんなのただの妬みじゃない。浅見先輩は必死に頑張ってスタメンになったし、試合で活躍して他のチームから一目置かれただけなのに、それで浅見先輩にいじめをするだなんて酷すぎる。その監督もそのメンバー達を鼻負するだけじゃなく、いじめを黙認するなんて許せない!!」

恭介「有難う西木野さん。でも、良いんだもう昔の事だから。まあ僕がいなくなっただけからは僕と仲良くしてくれた友達達も後日そのチームを辞めていったし、監督がそのメンバー達を鼻負してる事やそのメンバー達のいじめ等の悪評が出回って、チーム自体無くなったからさ。」

真姫「辞めた友達の人達はどうしたんですか?」

恭介「うん。他のチームに入って野球をしたよ。友達からも誘われたんだけど、実はしばらくの間塞ぎ込んでた僕を父さんが「フェンシングをやってみないか?」と誘ってくれてさ。それで嫌な事を忘れる為に父さんの紹介のフェンシングクラブに通い始めたんだ。そのフェンシングクラブは昔父さんが通ってた所で先生は親切な人でク

ラブに所属してた人達も仲良くしてくれたんだ。それが切っ掛けでフエンシングに打ち込んだよ。だから友達達の気持ちも嬉しかったけど、フエンシングを途中で辞めるなんて生半可な事はしたくなかったんだ。でも、その友達達は賛成してくれたし、あの時の事も謝ってくれたよ。それで僕と友達とのわだかまりも無くなった。それぞれ道は違ったけどお互いに応援し合ったよ。」

真姫「そうですね。良かったですね。その友達とのわだかまりも無くなって。」

真姫がそう言うのと恭介は「うん。」と笑顔で答えた。

恭介「だからさ西木野さん。無理に音楽を辞める事も諦める事も無いと思う。将来についてはこっちは口出し出来るものではないかもしれないけど、音楽が好きなき持ちは大事にした方が良いと思うよ。それに世の中にはやりたくても好きな事が出来ない人も沢山いるから。」

恭介はそう言うのと何処か寂しそうな顔をしていた。もしかするとかつて野球を辞めた時の事を思い出しているのかもしれない。その後、恭介と真姫はアイスを食べ終わると店を出た。真姫の家にくまでの間はしばらく会話をしながら彼女を自宅まで送った。

真姫「今日は有難うございました浅見先輩。話を聞いてくれたおかげで少し気持ちが楽になりました。」

恭介「ううん。僕こそ有難う西木野さん。アイスを奢ってもらって、それに少しでも君の力になれたなら何よりだよ。じゃあね西木野さん。」

恭介は帰ろうとしたその時。

真姫「浅見先輩！」

真姫に呼ばれて恭介は振り返った。

真姫「私は放課後、音楽室でピアノを弾いています。もし良かったらピアノを聞きに来てくれますか？嫌だったら良いですけど。」

真姫がそう言うのと恭介は笑顔で口を開いた。

恭介「うん。じゃあ明日の放課後に音楽室に行くよ。西木野さんのピアノを聞いてみたいから。じゃあまた明日。」

恭介はそう言うのと家に帰っていった。

そして、賢はというと。

賢（心の声）「今日俺は後にμsのメンバーになる矢澤にこが「お礼がしたいから放課後付き合ってほしい。」と言われた。悪質転生者の護衛を兼ねて付き合ったのは良い。だがしかし何で!!何で俺は彼女の家にお邪魔する事になってんだ!!」

放課後、賢はにこが「お礼がしたいから放課後付き合って頂戴。」と言われたのだ。最初は賢は断ったが何度も言われた為に賢の方が折れて、悪質転生者の事もある為に護衛も兼ねて放課後付き合う事にしたのだった。付き合ったのは良いが何故か彼女の自宅へとお呼ばれされたのだった。

にこ「ただいま！」

にこの妹と弟のこころ、ここあ、虎太郎は賢を見た瞬間。急に目を輝かせて喜んだのだった。その反応を見て賢は苦笑いをした。その後、賢はにこに案内されて部屋に上がり、こころとここあと虎太郎に自己紹介をしたのだった。

こころ「じやあ賢さんは、今日からテスト生としてお姉様の通っている音ノ木坂学院に通う事になったんですか。」

賢「うん。俺は2年だからにこさんの後輩になるね。」

ここあ「そうだったんだ。何だか凄い偶然だね。だけど、私は賢お兄ちゃんとまた会うことが出来て良かった。」

こころ「私もです。」

虎太郎「嬉しい。」

賢「有難う。こころちゃん、ここあちゃん、虎太郎君。そう言ってくれて嬉しいよ。」

にこはお茶と菓子の用意の為に台所に行っており、その間賢はこころ、ここあ、虎太郎と会話をしたり遊び相手になってあげていたのだった。幼い弟2人と妹1人の面倒をみている賢にとっては子供の相手は問題なかったので賢はすぐに3人と仲良くなった。しばらくするとにこが戻ってきた。

にこ「悪いわね。妹達と弟の相手をしてもらってて。」

賢「いえ。気にしないで下さい矢澤先輩。俺にも弟2人と妹1人がいるので子供の相手は慣れてるんで。」

「ここ」あんたも兄弟がいるの？」

賢「はい。こころちゃんとここあちゃんと同い年の弟2人と虎太郎君と同い年の妹が1人いるんです。」

こころ「賢さんには私とここあと同い年の弟さんが2人いるんですか？」

賢「うん。あと虎太郎君と同い年の妹もね。」

ここあ「そうなんだ。出来たら私、その子達と会ってみたいな。」

こころ「私もその子達に会いたいです。賢さん。もし良かったらその子達に会わせてもらえますか？」

虎太郎「・・・僕も会いたい。」

賢「わかった。約束するよ。こころちゃん、ここあちゃん、虎太郎君。必ずうちの弟達と妹に会わせてあげるよ。」

その後も賢は、ここ達とお茶と菓子を味わいながら楽しい時間を過ごしたのだった。

ここ「すまないわね。お礼をしようと思って呼んだのに妹達と弟の相手をさせちゃって。」

賢「いえいえ矢澤先輩。俺も楽しかったですから。それにあの子達と大事な約束もしましたからね。」

ここ「ねえ杉村。良かったらあたしの事をここ。って呼んでくれない。」

賢「え！良いんですか!?名前で呼んでも!？」

にこ「あたしが良い。って言うってんだから良いわよ!!それにここあ達を名前で呼んでるのにあたしだけ名字なんて、何か変な感じだし。その代わりあんたの事、賢。って呼ぶから良いでしょ。」

突然言われて驚いた賢だったが、すぐに笑顔になって答えた。

賢「わかりました。じゃあにこさん。って呼んで良いですか?俺は後輩ですし、呼び捨ては出来ないんで。」

にこ「わかったわ。名前で呼んでくれてるし、さん付けで良いわ。」

賢「はい。今日は有難うございました。お茶と菓子美味しかったです。じゃあ俺はこれで。」

にこ「あのさ賢。」

賢「はい?。」

にこ「あたし放課後アイドル同好会の部室にいるから、良かったら来てくれない?。」

賢「それは良いですけど、俺は部室の場所知らないんですが。」

にこ「じゃあ明日の放課後、あたしの教室まで来なさい。案内するから。」

賢「わかりました。じゃあ明日の放課後にお伺いします。ではまた明日。」

そう言つて、賢はにこの自宅を後にしたのだった。

しばらくして賢は人気の無い場所に移動した。

賢「もう出てきて良いぞフェアリー。」

フェアリー「お疲れ様賢。どうだった？矢澤にこさんと兄弟の子達との時間は？」

賢「ああ楽しかったよ。それよりどうだったフェアリー。如月を含めた悪質転生者達の方は。周りには注意していたが尾行とかの動きは？」

フェアリー「大丈夫だよ。悪質転生者達の誰かが尾行している様子は無かったよ。精霊達の皆も言つてたから。それに他のμ、sのメンバー達を尾行はしていなかったみたいよ。」

賢「そうか。すまないなフェアリー。お前と精霊の皆に迷惑をかけた。」

フェアリー「何言つてるの。賢と寿達は私達の仲間なんだから、気にしないで大丈夫よ。私達も出来る限り協力するから。」

賢「有難うフェアリー。約束するぜ。寿達と共に必ずμ、sを守つてみせる。」

賢はフェアリーにそう言つたと家に帰つたのだった。

聖剣の勇者達の情報交換

次の日の朝、寿は祖母が作った朝食を食べてから制服に着替えて登校する所だった。祖父の長一郎（ちよういちろう）と祖母の英子（えいこ）は寿に声をかけた。

英子「寿。例のあの事もある上に女子校へテスト生として通う事になって大変かもしれないけど、無理だけはしないでね。」

長一郎「そうどうぞ寿。学校生活もそうだけど、戦う時は必ず気をつけるんだぞ。」

寿「わかってる。俺は大丈夫だよ。敦也達も一緒だから。じゃあ、爺ちゃん、婆ちゃん行ってきます。」

そう言つて寿は家を出て、敦也達との待ち合わせ場所へと向かった。寿が待ち合わせ場所に行くとき先に龍馬、恭介、賢が待っていた。

寿「おはよう。龍馬、恭介、賢。」

龍馬「おはよう寿。」

恭介「おはよう。」

賢「おう。おはよう。」

龍馬達と朝の挨拶をした寿は龍馬達と共にまだ来てない敦也達を待っていた。しばらくして敦也、総司、健司、博人、啓太も到着して一緒に音ノ木坂学院へと登校した。登校の最中に寿達は昨日の事についての情報交換していた。

寿「昨日、穂乃果と下校したけど悪質転生者の誰かが後をつけてくる事は無かったよ。家まで送ったけど問題はなかった。」

敦也「こっちは絵里に生徒会に誘われた。悪質転生者の連中と悪の勢力の事もあるから、ボディガードを兼ねて生徒会に入る事にしたよ。フェアリーとウイスプ達の連絡で悪質転生者が絵里にストーカーしてる様子は無かった。」

龍馬「僕の方はことりと下校したけど、ストーカー行為をする悪質転生者はいなかったよ。」

総司「俺と健司の方は凜と花陽を家の洋菓子店に誘って、お茶してから家に送っていったけど、尾行してる奴はいなかったよ。」

健司「だが、油断は出来ないぜ。もしかすると奴等は何か仕掛けて来るかもしれないから用心した方が良い。」

博人「そうだな。何らかの行動を起こすかもしれないからな。あと、こっちは希を家まで送っていったぜ。誰もつけて来る事はなかったぞ。」

啓太「僕の方も海未を家まで送っていったけど、特に問題は無かったよ。」

恭介「僕も真姫と一緒に下校したけど、大丈夫だった。」

賢「俺の方もこを家まで送っていったけど、問題は無かったぜ。」

寿「そうか。とにかく昨日は、sのメンバー達に何も無くて良かった。だけど、健司の言うとおり油断は出来ないからな。奴等には十分注意しておこう。」

寿がそう言うのと敦也達は首を縦に振った。その後、寿達は普通に会話をしながら音ノ木坂学院へと登校したのだった。学校に着くと彼等は自分達の教室へと入っていったのだった。

穂乃果「あ！おはよー寿君、龍馬君、啓太君。」

ことり「おはよう。龍馬君、寿君、啓太君。」

海未「おはようございます。啓太、寿、龍馬。」

寿「おはよう穂乃果、ことり、海未。」

龍馬「おはよう。」

啓太「うん。おはよう。」

教室に入ると、穂乃果達は寿達に朝の挨拶をしたのだった。そして、楽しく会話をしていた。それからすると寿達はある事を伝えた。

寿「穂乃果、ことり、海未。俺決めたよ。君達スクールアイドルのマネージャーになる。」

龍馬「僕もマネージャーになるよ。」

啓太「僕も。」

穂乃果「ホント!!」

ことり「有難う龍馬君、寿君、啓太君。」

海未「有難うございます。」

穂乃果達は、寿達がマネージャーをやる。と言った途端凄く喜んだのだった。それを廊下で見っていた内田達悪質転生者はかなり怒っていた。

内田「クソー。何で手塚達が^μsのマネージャーになるんだよ。一度小西達と話して方法を考えないと。だがしばらくは様子見をするしかねえ。」

栗林「生意気な奴等だぜ。本来ならマネージャーになるのは俺と坂本のはずなのに。坂本どうする？こうなったら彼奴等の悪い噂を流すか？」

坂本「いやそれは不味い。俺達は前回の事が原因で酷く悪い印象をクラスメイト達からもたれている。下手に首を突っ込めば火に油を注ぐ事になる。ここは大人しくしておいた方が良く。こうなったら最後の手段としてライブが始まった時に海未達を攫うぞ。」

栗林「わかった。あとは他のメンバー達については菅野と一度話して決めるとしよう。高梨達の始末する事も含めてな。」

坂本「そうしよう。とにかく今はライブまで様子を見るぞ。」

それぞれ悪質転生者は教室に入ると女子達から嫌な顔をされていた。やはり前回の事が原因だろうが^μsを手に入れる為に我慢していた。

番外編

新たなる聖剣の勇者

寿達が転生した後にしばらくしてから、マナの女神の元に3人の新たな聖剣の勇者が再び集まっていた。

一人目は八神透（やがみとおる）。彼は前世で博人と啓太の中学時代の同級生で中学〜大学時代に陸上の大会で龍馬と何度も勝負したライバルでもある男。

二人目は朝倉和也（あさくらかずや）。彼は前世で総司と健司の小学校時代の同級生で幼馴染み。幼い頃からテコンドーを学んでいて大会で優勝経験がある男。さらに彼も寿と敦也と博人と同様ラブライバーである。

そして、最後の三人目は土見浩二（つちみこうじ）。彼は前世で寿と敦也、龍馬の小学校時代からの幼馴染みで小学校時代に寿と敦也と共に同じ道場で剣道をやっていたメンバーでもあり、中学〜大学時代は剣道部所属。剣道の試合で活躍をしていた事がある男。

マナの女神「では浩二、和也、透。これより貴方達を転生させます。寿達と同じ様に家族と暮らせる事と転生特典もつけています。ですがよく聞いて下さい。貴方達にはA―RISEを守ってほしい。と言った身ですが、くれぐれも無茶はしないで下さい。」

浩二「はい。お任せ下さいマナの女神様。A―RISEは僕と和也と透で責任を持って守ります。」

和也「俺達が悪の勢力と悪質転生者達から必ずA―RISEを守つ

て見せますよ。」

透「絶対に奴等の好きにはさせません。」

浩二達はマナの女神にA―RISEを悪の勢力と悪質転生者達から守る事を約束するのだった。

マナの女神「わかりました。ですがその前に浩二、和也、透。貴方達に1つお願いがあります。」

浩二「何でしょうか？マナの女神様。」

マナの女神「本格に転生する前に貴方達にはある姉妹の弟さんを助けてあげて下さい。」

和也「ある姉妹の弟さん？」

透「それは一体誰ですか？」

マナの女神「とにかくこれを見て下さい。」

マナの女神はそう言うのと浩二達にある映像を見せたのだった。

浩二「この子は？」

マナの女神「名前は鹿角明。後にSaint Snowと呼ばれる鹿角聖良と鹿角理亜の弟さんです。そして正当防衛とはいえ銀行強盗を殺めてしまい、それが原因で周りの人間達のせいで「人殺し」のレッテルを貼られて家族に捨てられてしまった悲しい少年です。」

和也「ちよつと待って下さい。マナの女神様。俺はラブライブサン

シャインも見てましたけど、Saint Snowの二人には弟はいなかったはずですよ。一体どうなってるんですか？」

マナの女神「三人はパラレルワールドの事を知っていますか？」

和也「パラレルワールドってあの並行世界の。」

透「じゃあ、その鹿角明君は並行世界のSaint Snowの弟。つまりイレギュラーの存在ということなのか。」

浩二「僕達や寿達のような存在がいるんだ。他にも原作と異なる事があつても不思議じゃない。つまりその子は並行世界のSaint Snowの弟さん。ということですか。マナの女神様？」

マナの女神「ええ。それからその後なのですがこれをよく見て下さい。」

浩二達はマナの女神から映像を見ると、胸くそ悪い気分になった。幼いSaint Snowが鹿角明の事で同級生から酷いじめを受けてしまう事、その二人の担任はいじめをする連中に味方する始末でもある事、養護教諭の悪魔の囁きで鹿角聖良が鹿角明の心に深い傷をつけてしまう事。鹿角明は家族に捨てられてしまう事。その後、鹿角聖良はその事が深いトラウマとなって後悔してしまう事。

しかし、それは鹿角家に恨みを持っている大沢泰介という不動産会社社長がその銀行強盗犯の立川洋平を強盗教唆し、さらに鹿角兄弟とその母親を殺す様に指示していた事。つまり殺人教唆もしていた事もわかった。しかも大沢は役目を終えた立川洋平を自殺に見せかけて殺害しようと計画していた事、鹿角父を自殺に見せかけて殺害しようとしていた事も知った。

それだけでなく、鹿角明が立川を正当防衛とはいえ人を殺めてしまった事を利用し、鹿角姉妹の担任と養護教諭、同級生の親を過去の

悪事や現在やっている不正、様々な理由で恐喝してそれをネタに協力させて鹿角家を貶めようとし、実家の喫茶店「茶房 菊泉」の土地を買い占めようと計画していた事。

さらに警察の中にその会社社長の協力者がいて、鹿角明の情報を周りの住人に流す様に手を回していた事。その警官は鹿角聖良の同級生の父親でその会社社長と彼に協力している暴力団にも警察の情報を流す等の犯罪行為をしている人物である事を知ったのだった。

その黒幕である大沢泰介は表向きは真つ当な不動産会社の社長となっているが、裏では悪どい高利貸し、暴力団を使つての土地の買い占め、上記の人間を恐喝して金をむしり取る等をしている。悪どい男である事も判明した。

これを見た浩二達はその会社社長と銀行強盗やSaint Snowの同級生とその親達と担任と養護教諭に怒りを覚えた。

浩二「何て奴等だ。自分達の悪事を隠蔽する為に一人の子供を悪者扱いして家族と引き裂く真似をするとは許せない。」

和也「全くだ！それにどんな理由があろうと人をいじめて良い理由にはならないぜ。本来ならそんな権利は誰にも無いはずだ。」

透「そうだ！いじめが正当化されて良いわけが無い。こんな最低な事は絶対に許されない。こいつ等のやり方絶対に認めない。」

マナの女神「浩二、和也、透。どうかお願いします。このままだと鹿角明君は銀行強盗を殺めてしまうだけでなく、家族と引き裂かれてしまいます。だからこの子を鹿角明君を助けてあげて下さい。」

そう言うとマナの女神は浩二達に頭を下げたのだった。

浩二「頭をあげて下さいマナの女神様。この映像見て、僕達は見て

見ぬ振りという最低な真似はしたくありません。この子を鹿角明君の人殺しを必ず阻止してみせますよ。和也、透二人も異存はないな。」

和也「分かりきった事を聞くなよ浩二。こんな悪党共に明君を家族と引き裂かせはしない。子供はな家族と一緒にいなきやならねえんだ。こんな心無い連中のせいで家族と離れ離れにさせてたまるか。それにいじめや子供を捨てる事は最低だからな。そうだよな透。」

透「勿論だ。鹿角明君と鹿角家の人達を必ず助ける。あんな最低なクズ連中の好きにさせる訳にはいかないからな。絶対に助けてみせる。だから俺達もOKだ浩二。」

浩二「ですからマナの女神様。僕達をその場所へ送って下さい。」

マナの女神「わかりました。あと、貴方達は転生時の容姿にしておきます。ですが3人共無茶だけはしないで下さいね。万が一の事がありますから。ではお願いします。」

マナの女神はそう言うと浩二達を事件が起こる銀行へ送ったのだった。

別世界では「人殺し」になってしまったある姉妹の弟を救え

寿達が知らない所で3人の聖剣の勇者達が秘密裏に行動していた。現在来ているのは北海道函館にある銀行である。

全ては別世界では「人殺し」になってしまった。ある姉妹の弟を救う為に。

浩二「もうすぐやってくるな。例の銀行強盗が。良いな和也、透。手筈道理に頼む。」

透「分かってる浩二。彼処にいるSaint Snowの弟である鹿角明君の人殺しを阻止する事だろ。」

和也「しかし、あの映像を見た時は本当に胸くそ悪くなるぜ。Saint Snowの弟の明君が銀行強盗を正当防衛とはいえ殺めてしまったが為に家族は苦しめられ、姉に「人殺し」と言われて心に深い傷を負わされてしまうだけでなく家族と離れ離れになってしまうなんて、俺個人としては銀行強盗とSaint Snowの同級生とその親共や教師共、それに強盗教唆した黒幕の方が悪人だと思うけどな。」

浩二「全くだ。」

透「だけど浩二。イレギュラーである俺達が行動して良いのか？何かしら影響出なければ良いけど？」

浩二「わかってる透。でも、だからといってマナの女神様に見せてもらった映像であの子達の今後の事を見たらほっとく訳にはいかな

いだろ。確かに正当防衛とはいえ人を殺めてしまうのは周りの人間達からしたら、人殺しと思われて悪人扱いされるだろう。だがな正当防衛と殺人罪は違うんだ。その人の苦しみを知らうともせずにいじめを正当化する様な世の中があつて良いわけ無いだろ。それにどんな理由があろうと家族の関係を引き裂く事や人を傷つける権利は誰にも無いはずだ。そんな事を平気でする奴らが真の悪だと僕は思う。」

それを言ってる時の浩二の目はまるで憎しみを宿した様な目つきだった。実は浩二は前世では検事をしていたうえに人一倍正義感が強く、如何なる理由はあれどいじめや暴力、犯罪等を許さない性格なのだ。

しかし、その為に悪人には容赦がなく非情な一面がある為に前世では加害者達や加害者の一部の親族等から逆恨みをされる等、危ない所もあつたのだ。

浩二「僕はそんな心の無い奴らや犯罪者達から人の幸せを守る為に前世では検事になつたんだ。僕は犯罪者達からどれだけ恨まれようと憎まれようと罵倒されようと僕自身の正義を貫く。それに僕にとって一番大事なのは金や権力よりも人の幸せと命なんだよ。命は金じゃ買えないからな。」

和也「そうだな。お前の言うとおりだ浩二。俺だつて銀行強盗や理由はどうあれいじめをする心無い奴等の為にあの子とS a i n t S n o wと家族の人達が苦しむなんて許せねえ。このままほつとく訳にはいかないぜ透。」

透「そうだよな。すまない浩二、和也。俺だつて人を守る為に前世で警官になつたんだ。あの子の様な悲しい人達を何人も見てきた。そんな悲しい事を防がないといけない。必ず明くんとS a i n t S n o wと母親を助けようぜ。」

透が言うと、浩二達3人は首を縦に振ったのだった。それから数分後に例の銀行強盗が現れてSaint Snowと鹿角明の母親を人質にして銀行員に金を要求した。

聖良、理亞、明「ママ!!」

立川「早く金を用意しろ!!出ないとこの女を殺すぞ。」

銀行員「すぐに用意します。」

その後は映像で見せてもらった展開になっていき、明は銀行強盗に飛び掛かりその拍子で彼の手に銀行強盗の持っていた拳銃を握ってしまっていた。その時に浩二達が彼の側に寄った。

浩二「坊や大丈夫かい？」

和也「怪我はないか？」

明「う、うん。」

透「君の様な子供がこんなもの持っていてはいけない。」

そう言つて透は明から拳銃を取り上げた。

立川「おいテメエそれを返しやがれ。殺すぞ。」

銀行強盗の立川は透から拳銃を取り返そうと透に向かって飛びかかるがその前に和也が割って入り、立川に向かって顔面にパンチをくらわせた。前世でテコンドーの経験者である和也にとっては大人が相手でも十分に対応出来るので心配いらなかった。

立川「ぐはあ。」

和也のパンチを受けた銀行強盗はそのまま床に倒れたのだった。そして、浩二と和也が逃げられない様に抑え込んだ。透は念の為、守る様に鹿角家の人達の側にいたのだった。

浩二「銀行員さん。早く何か手足を縛るもの持ってきて下さい。ロープでもガムテープでも何でも良いから。早く!!」

銀行員「は、はい!!」

その後、浩二と和也が抑え込んでいる間に透は銀行員が持って来たガムテープで手足を拘束した。しばらくして警察が到着し、銀行強盗の立川洋平は逮捕され連行されて行ったのだった。

浩二「ふうく。どうやら一件落着だな。」

和也「ああ。これであの銀行強盗と強盗教唆した黒幕も終わりだろう。」

透「本当に良かったぜ。あの子が人殺しにならずに済んで。」

銀行から出ようとする浩二達だったが、その時。

? 「あの。待って下さい!」

浩二達は振り返ると、幼い Saint Snowとその弟の明と3人の母親がいた。

聖良「お兄さん達。さつきは有難うございます。」

理亞「あ、ありがとう。」

明「有難うお兄ちゃん達。悪い人をやっつけてくれて。」

鹿角母「本当に有難うございました。何とお礼を言って良いか。」

4人は浩二達にお礼を言った。

浩二「気にしないで下さい。僕達は人として当然の事をしただけですから。」

和也「そうですね。俺達だってあのままほっとく訳にはいかなかったんで。」

透「それよりもその坊やにお礼を言ってあげて下さい。その子が犯人に飛びかかったおかげで隙が出来ましたからね。」

鹿角母「そうですね。有難う明。」

明「えへへ。」

浩二「ところで坊や。君の名前は？」

明「明。鹿角明です。」

浩二「明君か。いい名前だね。」

明「うん。僕の名前はママがつけてくれたんだ。」

和也「そうか明君。君は勇気あるね。さつき本当は怖かったはずな

のに銀行強盗に飛びかかるなんて。」

明「だってママが危なかったんだもん。それに聖良姉ちゃんと理亞姉ちゃんも危なかったからそれで。」

透「この子達は君のお姉さん達かい明君。」

明「うん。僕の大事な家族の聖良姉ちゃんと理亞姉ちゃんだよ。」

聖良「鹿角聖良です。よろしくお願いします。」

理亞「鹿角理亞です。よろしく。」

浩二「うん。よろしくね聖良ちゃん、理亞ちゃん。」

透「明君。君は確かに勇敢だった。でも気をつけて欲しい事がある。」

明「何？」

透は明と話をする為に母親に許可をもらおうと明と一緒に少し離れてから会話を始めた。近くには浩二と和也もいる。

透「君はさつき拳銃を握っていただろう。俺達が助けたから良かったけど、下手をすればさつきの銀行強盗か周りの人に怪我させてしまいか、間違えば人を殺してしまうかもしれないんだ。もしかすると君は人殺しになって。家族と離れ離れになっていたかもしれないんだ。」

明「人殺し。」

和也「おい透。子供にそんな事を言うもんじゃ。」

和也は止めようとするが浩二が制した。

浩二「待て和也。あいつに任せよう。」

透「よく聞いてくれ明君。一人だけ俺にも君と同じ様に姉がいるんだ。俺の姉さんは刑事をやっつてね。さっきの様な状況で人を殺してしまった人の事を教えてもらった事があるんだ。相手がどんな悪人だとしても殺してしまつたら周りの人達はその人を「人殺し」扱いするんだ。それだけじゃなくその人の家族の人達も人殺しの家族と言つて、酷く傷つける事をするんだよ。つまり君のお父さんとお母さん、お姉ちゃん達は酷いいじめにあつていたかもしれないなかつたんだ。君だつて家族の人達が傷つくところを見たく無いし、家族と離れ離れは嫌だろう。」

明「うん。僕はパパやママ、姉ちゃん達が傷つくのも、離れ離れになるのも絶対に嫌だ。」

透「だから約束してくれ明君。どんな事があつても決して人を殺してはいけないんだ。約束出来るかい？」

明「うん。約束するよお兄ちゃん。」

ようやく話が終わった所で浩二と和也が声をかけた。

浩二「話は終わったか透。」

透「ああ。」

和也「どうやら大丈夫そうだな。じゃあ行くか。」

そして、浩二達は明を家族の元に連れていった。

透「どうも失礼しました。それじゃ俺達はこれで。」

3人は離れようとする。

鹿角母「待って下さい。あの良かったら家は喫茶店やってるので来てくれませんか。お礼もしたいので是非。」

鹿角母にそう言われた浩二達は最初は断ったが、聖良と理亞と明のお願いに折れてお邪魔する事にしたのだった。

鹿角家との交流

浩二達は鹿角明の人殺しの阻止に成功し、その後鹿角母に助けられたお礼として鹿角家の実家でもある喫茶店「茶房 菊泉」にお邪魔する事になった。現在、浩二達は鹿角父からお礼を言われ、鹿角家のおもてなしを受けていた。

鹿角父「本当に妻と娘と息子を助けてくれて有難う土見君、朝倉君、八神君。君達がいなかったら妻達はどうなっていたことか。」

鹿角母「本当に有難うございます。貴方達のおかげで私と聖良と理亞と明は助かりました。」

浩二「いえ。何度も仰つきますけど、人として当然の事をしただけです。それから。それに明君が強盗のすきを作ってくれたから取り押さえる事が出来ましたから。」

和也「そういうことです。困った時はお互い様ですよ。それに『か弱き者を守れ。』っていうのが俺の家の家訓なんで。」

透「そうですよ鹿角さん。俺達もほっとく訳にはいかなかっただけですし、逆にお礼としてタダでのご馳走になってしまうのが申し訳ないです。」

浩二達は鹿角夫妻にそう言った。

鹿角父「気にしないでくれ。俺の家族を助けてくれたお礼なんだ。遠慮せずに食べてくれ！」

和也「そうですか。それじゃあ遠慮なく頂きます！」

透「おい和也。子供達もいるんだから行儀良くしろよ。」

和也「分かっているって透。でも、食べないと冷めちゃうだろ。せつかく鹿角さん達が作ってくれたんだからさ。」

透「そうだけど。お前は少し遠慮というものを考えろ。」

鹿角父「ハハハ！気にしないで良いよ八神君。この料理は全てお礼として作ったものなんだ気にせずに食べてくれ。」

透「すみません。じゃあお言葉に甘えて頂きます。」

浩二「どうもすみません鹿角さん。では僕も頂きます。」

鹿角父「ああ！遠慮なく食べてくれ。」

鹿角母「そうよ。さあ召しあがって。」

鹿角夫妻にそう言われて浩二達は鹿角夫妻が作ってくれた料理を食べた。食べたその時。

鹿角父「朝倉君、八神君どうしたんだ大丈夫かい？」

鹿角母「どうしたの何処か具合が悪いの？」

聖良「大丈夫ですか？」

理亞「大丈夫お兄ちゃん達？」

明「涙を流してるけど、どうしたの？」

和也・透 「「えー！」」

鹿角一家に声をかけられて和也と透は涙を流している事に気が付いた。

鹿角父 「もしかして料理が口に合わなかったのかい？」

鹿角母 「もしそうなら作り直すわよ。」

和也 「いえ。そうじゃないんです。鹿角さん達が作ってくれた料理美味しいですよ。なあ透。」

透 「ああ。大丈夫です本当に美味しいですよ。すみません鹿角さん。洗面所を借りても良いですか？」

和也 「すみません。俺も洗面所借ります。」

鹿角父 「ああ洗面所ならあそこだよ。」

和也・透 「どうもすみません。」

和也と透は鹿角父に教えられて洗面所で顔を洗った。洗い終わると『少し外の風に当たってきます。』と浩二と鹿角一家に言うの外に出た。浩二は2人を見て少し悲しそうな顔をしていた。

鹿角父 「どうしたんだ朝倉君と八神君は？」

浩二 「もしかすると和也と透は鹿角さん達の料理を食べて、昔を思い出したのかもしれない。」

聖良「昔の事ですか？」

理亞「どういう事？」

明「和也お兄ちゃんと透お兄ちゃん何かあったの？浩二お兄ちゃん。」

浩二「まあちよつとね。」

浩二は齒切れが悪そうに答えた。次に聖良達の母が声を掛けた。

鹿角母「何か訳がありそうね。ねえ土見君。私達は今日知りあつたばかりだけど、良かったら話してくれないかしら。朝倉君と八神君の昔の事。」

浩二は最初は戸惑ったがさっきの和也と透の様子が気になる鹿角一家に話す事を決めた。

浩二「わかりました。僕の知っている限りの事だけですが、全て話します。実は。」

浩二は全ての事を鹿角一家に話した。和也は幼い頃に父親は自分と妹と病気で寝込んでいた母親を捨てて出ていった事。その母は病気で亡くなり、その後は父方の従兄弟伯父に妹と共に引き取られた事。

透の方は、まだ幼い頃に姉と共に両親に捨てられた事。その後親戚の援助で暮らす事が出来ていたが、親戚に迷惑を掛けるわけにはいかないと思ってお姉さんは透の為に学生時代にバイトする等の苦勞をして来た事。知っている限りの事を話した。

浩二「僕が知っている事はここまでです。本当に先程は気を遣わせ

てしまい申し訳ありません。」

浩二はそう言って鹿角一家を見ると、鹿角一家の人達は涙を流していた。しばらくして鹿角父が口を開いた。

鹿角父「なんて父親だ！朝倉君と妹さんと病気の奥さんを捨てて出ていくななんて最低だ。」

鹿角母「そうよ！それに八神君もお姉さんと一緒に両親に捨てられたなんて可哀想だわ。」

聖良「そうです！そんなの間違ってます。」

理亞「そうよ！そんなの酷い。」

明「そんな事をするなんて許せない！」

鹿角一家は和也と透に同情するかの様に口々に言葉を発した。

しばらくすると和也と透は店に戻って来た。鹿角一家は和也と透を悲しそうな顔で見ていた。

鹿角父「朝倉君、八神君大丈夫かい？」

鹿角母「大丈夫？少し落ち着いた。」

和也「すみませんでした。もう大丈夫です。」

透「さつきは申し訳ありませんでした。気を遣わせてしまって。」

和也と透は鹿角一家に謝罪をしたのだった。

鹿角父「本当に大丈夫かい？まだゆつくり外の風に当たっても良いんだよ。」

透「いえ。ホントにもう大丈夫ですから。有難うございます。」

和也「俺達はもう大丈夫ですから。それにせっかく鹿角さん達が作ってくれた料理も冷めてしまいますから。」

そう言つて和也と透は席に戻つて、浩二と共に食事を再開するのだった。

透「ご馳走さまでした。有難うございます鹿角さん。」

和也「ご馳走さまです。美味しかったですよ鹿角さん。」

浩二「ご馳走さまでした。本当にすみません鹿角さん。ご馳走になつてしまつて。」

食事を終えた浩二達は鹿角一家に感謝したのだった。それからしばらくの間、浩二達は聖良と理亞と明とゲームをしたりして一緒に遊んだりしたのだった。

そして、もうすぐマナの女神の指定した時間が迫つてきてる為、浩二達は鹿角一家に帰る事を伝えたのだった。

明「もう行つちやうの？浩二お兄ちゃん、和也お兄ちゃん、透お兄ちゃん。」

浩二「ごめんね明君。もうすぐ帰る時間なんだ。」

和也「俺達そろそろ東京に帰らないといけないんだ。」

「そう言うとも明は残念そうな顔をした。」

透「そんなに残念そうな顔しないでくれ明君。また、会いに来るから。」

明「ホント!!」

和也「おう！必ず会いに来るよ。春休みか夏休みか冬休みの時にな。」

浩二「何時になるかわからないけど、会いに行く時は必ず連絡するよ。」

明「ホントに!!約束だよ!!」

浩二「うん！約束だ明君。」

「そう言うって浩二達はまた会いに来る事を明と約束したのだった。」

聖良「今日は本当に有難うございました。」

理亞「また来てね。お兄ちゃん達。」

鹿角父「土見君、朝倉君、八神君本当に有難う。また函館に来たら家に寄ってくれ。いつでも歓迎するよ。」

鹿角母「元気でね土見君、朝倉君、八神君。もし良かったら今度家族の人と一緒に来てね。」

浩二「はい！必ずまた来ます。」

和也「本当に有難うございました。」

透「皆さんさようなら。」

そうやって浩二達は去ろうとした時。

明「待って！和也お兄ちゃん。」

和也「どうしたんだい明君？」

明「和也お兄ちゃん銀行強盗をやっつけたでしょ。どうしてあんなに強いのか？」

和也「ああ。俺はテコンドーやってるんだ。」

明「テコンドー？」

和也「格闘技の1つだよ。子供の頃からやっててね。」

明「じゃあ僕もそのテコンドーをやったら、和也お兄ちゃんや浩二お兄ちゃんや透お兄ちゃんみたいに強くなれる？」

和也「ああ！信じて頑張れば明君はきつと強くなれるぞ。」

明「ホントに!!パパやママやお姉ちゃん達を守れるくらいに強くなれるの。」

浩二「うん。明君ならきつと強くなれるよ。だけど1つ約束してくれ明君。力だけ強くては駄目だ。心も強くなってくれ。力は必要だけど、力を悪い事に使う人もいるからそんな人間にならないでほし

い。人はね力だけでなく心も強くなければならないんだ。」

明「心も強く？」

透「そうだ明君。和也はテコンドー、浩二は剣道、そして俺は合気道やってるから力はある。でも、心も一緒に鍛えてたんだ。人は体だけでなく心も鍛えなければならぬ事を忘れないでくれ。」

浩二「だから明君。人を守れるくらいの力と心を持った強い男になつてくれ。そして、如何なる事があつても悪い事をする男には絶対にならないと約束してくれるかい？」

明「うん！約束するよ。絶対に悪い事をしない。人を守れる男になるよ。僕和也お兄ちゃんがやってるテコンドーを習うよ。そして、いつか僕と勝負してくれる和也お兄ちゃん。」

和也「ああ！もちろんだ明君。」

透「頑張れよ明君。」

浩二「君ならきつと出来るよ。応援してる。」

明「有難う。浩二お兄ちゃん、和也お兄ちゃん、透お兄ちゃん。必ずまた函館に来てね。」

浩二達は明と約束すると「茶房 菊泉」を後にし、人気の無い場所へ移動する。そして、指定時間になるとマナの女神の元へ戻つたのだった。

一方、ある場所では。

大沢「何だと!!立川の奴が失敗した。お前銀行員の立場を利用して裏口から手引きしたんだろ一体何やってやがったんだ。」

銀行強盗の立川洋一を強盗教唆した。今回の黒幕の大沢泰介は立川を手引きした相手に向かって怒鳴りつける。その後もネチネチと怒鳴り続ける。

大沢「ええい下らん言い訳なんか聞きたくないわこの役立たず!」

そう言つて大沢は電話をきるのだった。

大沢「くそー。中学生くらいの男3人に邪魔されて失敗しただと、全く立川といい、彼奴といい使えねえ奴らだ。彼奴等を利用して鹿角達に復讐する作戦が水の泡じゃねえか。それよりも立川だ。このままだと取り調べで俺の事を話されたら不味いな。最近警察の連中が動いていると、警察にいる彼奴等から連絡を貰っているがこのままでは過去の事も調べられるのも面倒だ。こうなったら彼奴等を使つて

立川の口封じをさせるか。」

？「例の作戦は失敗したみたいですね大沢さん。」

その声を聞くと大沢は恐る恐る後ろを振り返る。そこには道化師の格好をした不気味な男がいた。

？「どうやら貴方はとんでもないミスをしましたね。」

大沢「も、申し訳ありません。奴等が使えない連中だった為に。」

？「言い訳は結構です。あと、立川の事は心配しなくていいですよ。既に始末しましたから。これを見て下さい。」

そう言つてその男はパソコンにある映像を見せたのだった。

それは銀行強盗の立川洋一が護送中のパトカーの中で血を吐いて死んだシーンの映像だった。

？「こんな事もあるかとワタクシの闇の力で死ぬ様に細工しておいたんですよ。」

大沢「あ、有難うございます。おかげで俺の事が公にならなくてすみえました。」

？「くつくつく。何言ってるんですか大沢さん。貴方の為なんかこんな事をすると思いますか。」

大沢「え？待ってくださいいどういう事ですか？」

？「どうもごうも言葉通りの意味ですよ。ワタクシは貴方の鹿角一

家の復讐を利用したに過ぎないんですよ。それに貴方はもう用は無いです。」

大沢「何だど!! 散々利用しておいて結局はこういうことか。おい野郎共此奴を始末しろ。」

? 「呼んでも来ないですよ。貴方の部下達は既に殺してますから。」

それを聞いた大沢は急いで逃げるようにその場を離れた。

大沢「こうなったら暴力団の彼奴等に連絡するまでだ。」

? 「やれやれ無駄なことを。」

大沢は急いで地下に逃げて、ドアに鍵を掛けたあとで交友関係のある暴力団に電話する。

? 「はい。」

大沢「おい!! 助けてくれ例の男に殺される。すぐ来てくれ。」

? 「残念でした〜大沢さん。この携帯の持ち主の暴力団のメンバーとその仲間達は俺と俺の仲間達で殺しましたので、もうあんたの味方はいねえよ。あと、あんたのパソコンにあるデータを送ってあるんで見たほうがいいよ。まあ生きていてもあんたは終わりだけどね。」

そう言われて大沢は自分のノートパソコンを確認してデータ確認するとこれまでの全ての悪事の証拠や恐喝している人間の犯罪や汚職のデータ全てと今回の銀行強盗の計画のデータまでもネット上に流出してしまっていた。それを見た大沢は顔が真っ青になっていた。

？「悪いね。俺の仲間の中にはハッキング技術とコンピュータウイルスを上手く扱う奴がいてさ。最初からあんたは切り捨てる予定だったんだよ。まあ悪く思うなよこれは俺達の主の命令なんだな。」

大沢は崩れ落ちる様にその場にへたり込んだ。その時にドアが鋭利な刃物で切られて破壊されてしまい、鎌を持ったさっきの男がやって来たのだった。

？「残念でしたね。我々の事を話されると困るので死んでもらいますよ。貴方の魂はワタクシが頂きますからね。」

？「やめろ。やめてくれ。頼む金なら幾らでも出す。だから助けてくれ！」

？「申し訳ありませんがワタクシは金に興味はありません。ワタクシがほしいのは魂ですよ。貴方の魂がね。」

？「た、助けてくれー。ぎゃあああ。」

その後、大沢は道化師の男に殺されて絶命した。

？「あはははは。最高傑作でしたよ。あの偉そうぶってた大沢の命乞いの姿はね。」

？「そんなに大笑いするものではありませんよ。とにかく此奴だけでなく、暴力団共の死体を片付けておかないと痕跡を残したら面倒な事になりますからね。」

？「分かっていますよ。でも、良かったんですか？大沢の様な金づる消してしまつて。それにこの建物はどうするんですか？」

？「なあーに問題ありませんよ。他にも大沢と同じ様にワタクシ達の武力で脅している者は幾らでもいますから。それに大沢の奴から軍資金の為に結構な額の金も脅して頂いた事ですし。奴の始末も我等が主、仮面の道士様からの命令ですからね。さらに、この建物は明日取り壊しの予定ですし、血の跡はペンキで落書きしておけば作業員も単なる子供の悪戯だと思つて気にもしないでしょう。」

？「それもそうですね。」

？「では、例の暴力団のアジトへ行つて彼等と合流しましょう。早く連中の死体を処理しないといけませんからね。」

？「了解。さつさと片付けて戻りましょうぜ。……死を喰らう男様。」

己の覚悟と信じる正義

現在、浩二達は再びマナの女神の元に戻ってきていた。鹿角明の人殺しの阻止した事で鹿角一家の今後の様子はどうなるかをマナの女神が用意した映像で確認していたのだった。映像を見ると、浩二達の活躍で鹿角明は家族と共に幸せに暮らしている姿が映っていた。それを見た浩二達は安心していた。

マナの女神「ご苦労様でした浩二、和也、透。貴方達のおかげで鹿角明君は家族に捨てられずに済んだうえに家族と共に暮らして行くことが出来ています。」

その映像を見終わると、次は別世界の明と大沢達の映像を浩二達は見ていた。大沢と交友関係の暴力団を初め、聖良と理亞と明の同級生の父親や母親、学校の担任と養護教諭、近所の何人かの住人、さらに校長までも逮捕されている所の映像だった。大沢に脅されていた内容については、まず聖良の担任は聖良の同級生の母親とは不倫関係で結婚する前からの付き合いでありその子供は父親ではなく、担任の子供だった事。それを担任と母親は知っていたものの真実を隠して、今の夫の子供として育てさせようと企てていた事。次に理亞と明の担任と養護教諭と現在の校長は先代の校長からパワハラやセクハラ被害を受けていた為に我慢が出来ずに共謀し、雨の日に神社へ呼び出して階段から事故に見せかけて転落させて殺した事。他の同級生の親達は学生時代にグレていた時に犯罪を働いて少年刑務所入りの前科がある者、痴漢冤罪を利用して示談金詐欺を働いていた者、同級生にいじめを働いて自殺させた者、揉み合いの中で相手を殺してしまつた者、自分の会社の金を横領、違法な金に手を出していた事等の悪事や汚職を働いていた者がいたのだった。それを大沢は得意の情報網や隠れてビデオカメラで録画したり、会話を録音する等の様々な証拠を手に入れ、それをネタに彼等をゆすっていた事が判明した。その

親達から口止め料の金を要求、会社の顧客の情報を流すように命令していた事、警察の関係者も大沢と交友関係の暴力団に警察の情報を流していた事が判明した。中には借金の返済の肩代わりと金欲しさのために協力していた者もいたとのこと。

そして、大沢は明が正当防衛で銀行強盗を殺めてしまった事を利用して真実を隠すためにその同級生達の親達と担任と養護教諭と校長に過去の罪や不正行為等を理由にゆすりや借金の返済の肩代わりと裏金の条件として隠蔽工作に協力させていたのだった。

別世界では、真実が明るみになってからは大沢と交友関係の暴力団、校長と担任と養護教諭、同級生の父親や母親は逮捕されたのだった。大沢は恐喝や悪質な地上げだけでなく過去に5人の人を殺していた事が判明。さらに大沢は反省の色はなかった。

判決の結果、大沢は死刑となったが、彼と交友関係のあった暴力団や他の者達は無期懲役や懲役10〜20年以上の実刑判決となった。さらに新聞や週刊誌に顔写真付きで載った為に学校や同級生の家にマスコミが来るぐらいの大騒ぎになり、誰が行ったのかインターネット中にもその情報が流れる事になってしまったとのこと。それが原因で聖良と理亜の同級生は以前の聖良と理亜と同じ又はそれ以上のいじめや嫌がらせを受ける事と家に落書きやゴミを捨てられる等とされる事となり、その同級生の兄弟達も学校でいじめを受けてしまう事、親族も肩身狭い思いをしてしまう羽目になった様子だった。さらに同級生の兄弟の中には高3や中3の兄と姉がいてその兄や姉は決まっていた大学や高校の推薦は取り消しになってしまった事。学校で孤立したり、家に引き籠もりになったり、グレて問題行動や暴力事件等を起こして少年院入りしてしまったり、余りに酷い場合は少年刑務所送りになったとのこと。

黒幕である大沢の犯行の動機は聖良と理亜と明の母親とは中学時代の同級生で中3の時に告白したものの断られてしまった事。さらに当時犬猿の仲だった聖良と理亜と明の父親を選んだうえに人並みの幸せを送っている事への逆恨みという下らない理由で強盗教唆と殺人教唆して立川洋一を利用した事。そして、真実が明るみになった

後、明は保身を守ろうとする罪人達によって家族と引き裂かれた悲劇の少年の扱いとなり、人殺しから悲劇の少年となった。

その後、鹿角一家は明を迎えに行くも既に里親となった奥山零に引き取られた後だった。

鹿角家はその連中に精神的苦痛と名誉毀損等で訴えた事により多額の慰謝料を手にする事となった。残された加害者達の家族である同級生と同級生の父親や母親、祖父母等の親族は何度も謝罪するがもう手を遅れも同然で彼等は一生罪の意識を背負う事になる様子だった。

しかし、10年後に明は家族と復縁したということが映像を見て浩二達は喜んでいた。

和也「別世界の明君は鹿角家と引き裂かれてしまったけど、後に復縁して家族の絆を取り戻したんだな。」

透「そうだな。Aquarsと里親の奥山さんのおかげだな。」

浩二「しかし、愚かな事をしたものだな大沢という男は。下らない逆恨みで犯罪を行い、さらに他の奴等も金欲しさや自分達の罪を隠すためにあんな馬鹿な事をするとは、そんな事をしなければそれ以上の実刑判決を受けなくて済んだのにな。この連中は。」

浩二は大沢とその連中を毛虫を見る様な目で見ていた。

和也「なあ浩二。これで良かったのか。明君の事をほっとくわけにはいかなかったけど、俺達が行くラブライブの世界のあの子達と同級生達を始めとする残された加害者家族の人達はきつと酷い生活を送ることになるぜ。それにこの子達はその加害者の親達に人生を狂わされた被害者も同然だろ。中には子供にいじめをするように仕向けた親もいたわけだし。」

透「確かにな。和也の言うとおり別世界とはいえこの子達のした事は許せないけど。この子達は加害者である親達の被害者だ。それに俺達が行くラブライブの世界のこの子達や他の家族の人は酷い生活を送ることになってしまう。そう考えると。」

浩二「和也、透。僕達は間違ったことをしたわけじゃない。僕達にも守らなければならぬものと譲れないものがあつたんだ。それに別世界のこの子達と親と教師はいじめや明君を家族と引き裂いた事に反省の色もなかつたんだ。それに子供だからといって、何でも許されるわけじゃない。この子達もいじめ等をすればそれ相応の報いを受ける事を学ばなければならぬんだ。僕達のやった事が仮に罪だとしても。その覚悟がなければ誰も守る事は出来ない。例えば誰に恨まれる事になるとしても僕は信じる正義の為に人を守る為に戦う。そう決心したんだ。そうじゃないか和也、透。」

和也「そうだな。別世界と俺達が今から行くラブライブの世界の子達には気の毒だけど、俺達は一度決めた以上それを破るわけにはいかない。俺もラブライブの世界を守る為の覚悟は出来てる。」

透「俺もだ。それに明君達や多くの人達を守らなければならないんだ。誰が何と言おうと。俺達も一緒に戦い続けるぜ浩二。」

浩二「有難う和也、透。これからも仲間として頼む。」

浩二はそういうと和也と透と握手を交わすのだった。

マナの女神「浩二すみませんが、話しがあります。」

浩二「わかりました。和也、透すまないがマナの女神様と話があるから席を外してくれるか？」

2人「「わかった。」」

和也と透が退室してから浩二はマナの女神と内密の話をしていた。

浩二「そうですか。大沢と暴力団、銀行強盗の立川が死を喰らう男とその仲間達に殺されてしまったんですね。」

マナの女神「ええ！痕跡を上手く消していました。さらに大沢と大沢に脅されていた人達が行った過去の犯罪の証拠のデータと現在行なっていた不正行為と汚職のデータがインターネット中に流出していました。世間ではコンピューターウイルスが原因で情報漏洩したという事となっていますが、これは連中の仕業だと思われまます。これが原因で残された加害者の家族や親族の人達といった。多くの人達が苦しむ事になってしまおうでしょう。」

浩二「マナの女神様すみませんが1つお願いがあるのですがよろしいですか？」

マナの女神「何でしょう浩二？」

浩二「その人達の事なのですが、実は頼みたい事があるんです。」

その後、浩二はマナの女神に加害者の家族の人達の事であることを頼んだのだった。

マナの女神「それなら可能ですが宜しいのですか浩二。あの銀行強盗の事件の事を知ったら、加害者と加害者家族の人達から銀行強盗を捕まえた事が原因で貴方を恨むかもしれないですよ。」

浩二「僕は前世で検事として、加害者と加害者の親族から恨まれてきた身です。それに明君を救うためにしたことです。これは全て覚

悟の上です。」

マナの女神「加害者と加害者家族の人達があの事件の事を知られたら、貴方に逆恨みをする可能性があります。私でもその人達の恨みまで取り除く事は出来ませんよ浩二。」

浩二「それらも全て背負う覚悟です。それに覚悟がなければ何も守ることは出来ないと自分に言い聞かせてます。」

マナの女神「あまり無理をしないで下さい浩二。私も出来る限り貴方と和也と透の手助けをします。何かあれば私を頼って下さい。」

浩二「お気遣い感謝しますマナの女神様。」

マナの女神「では浩二。和也と透と彼等の家族と貴方の家族の皆さんを呼んできて下さい。これから転生の準備をするので。」

浩二「はい。」

マナの女神にそう言われると浩二はすぐに和也と透に連絡してから家族を呼び、転生の準備をするのだった。

マナの女神「では、これから転生させます。浩二達A―RISEとラブライブの世界をお願いします。皆さんにマナの加護があらんことを。」

そして、浩二達は家族と共に転生し、彼等のいた場所から姿が消えたのだった。

マナの女神「彼等も転生したことで、これでラブライブの世界を守る聖剣の勇者は12人になった。出来れば彼等と協力して戦ってく

れた方が良いのですが、浩二は協力しない様子ですから望みは薄いですね。とにかく彼等にも出来る限りの手助けをしなければ。それに転生前に浩二に頼まれていた例の事も実行しないと。」

マナの女神は浩二に頼み事を行い始めたのだった。しかし、浩二の身を案じていた。例の事も含めて。

マナの女神「本当に不器用な人ですよ浩二は。」

転生後の出来事 浩二編

浩二、和也、透。3人の聖剣の勇者は家族と共にラブライブの世界に転生して3年の月日が経った。中学1年の設定でこの世界に転生してから最初は慣れない事があったが、浩二達と家族の人達はこの世界での暮らしに慣れて忙しい事があるも平穏な日々を過ごしていた。現在、浩二は携帯電話である少年と電話をしている最中だった。

浩二「そうか聖良ちゃん和理亞ちゃんとお父さん、お母さんは元気で良かったよ。確か4月から聖良ちゃんは6年生で、明君と理亞ちゃんは4年生だね。どう明君小学校の方は楽しくやってる？」

明「うん！浩二さんの方はどう？和也さんと透さんも元気？」

浩二「ああ。元気にしてるよ。それから明君この前のテコンドローの試合優勝おめでとう。」

明「こちらこそ優勝祝いのプレゼント有難う浩二さん。和也さんと透さんからのプレゼントも嬉しかったよ。」

浩二「そう言ってくれて僕と和也と透も嬉しいよ明君。これからもテコンドロー頑張つて。あと、明君すまないけど僕と和也と透は明日から高校生でこれから忙しくなるからしばらく会いにいけないと思うんだ。」

明「そうなんだ。残念だなあ。浩二さん達がまた来てくれたら嬉しいんだけど、高校で忙しくなるなら仕方ないね。」

浩二「ごめんね明君。でも、もし予定が空いたら必ず会いに行くよ。聖良ちゃんと理亞ちゃん、君のお父さんとお母さんによろしく伝えて

おいてくれ。」

明「うん。じゃあ浩二さん高校生活頑張つて。和也さんと透さんと家族の人達によろしく。」

浩二「ああ。じゃあね明君。」

そう言うのと浩二は携帯電話の通話を切ったのだった。

浩二「さあて明日は高校生活初日だ。転生したとはいえまた高校生活を送れる事をマナの女神様には感謝しないとな。いけないもうこんな時間か明日の入学式に備えてもう寝ないとな。」

そして、浩二は明日の入学式に備えて睡眠をとるのだった。

次の日の朝。

浩二「うーんいい天気だ。今日の入学式の日は晴れで良かった。雨だったら最悪だからな。」

そう言うつて浩二は今日から通う高校の入学式に向かっていた。浩二は時間を確認するもまだ十分に余裕がある時間であった。

浩二「ちよつと早く出過ぎたか。どうするかな?。」

そう言っている時に浩二は人がいない公園に目がとまった。

浩二「誰もいないな。じゃあ折角だし歌を歌ってから行くとしよ

う。」

そう言うと浩二は鞆からイヤホンとウォークマンを取り出して、イヤホンをつけてウォークマンから曲を流し始めたのだった。曲は浩二が前世で好きなゲームの1つテイルズオブジァビスの主題歌である「カルマ」だった。曲を聴きながら浩二は歌を歌い始めたのだった。

~~~~~♪

？「こんな人気のない公園に歌声？何だか楽しそうに歌ってるわね。それに何だかいい声。」

浩二の歌声に誘われて一人の女子高校生は歩いていた。その女子高校生はUTX学園の制服を着ていた。

~~~~~♪

歌声のする所にやって来た少女は浩二の歌っているカルマに目を見開きながら聴き入っていたのだった。浩二は歌に集中している為か全然気付いている様子は無かった。ようやく浩二は歌を歌い終わったのだった。

浩二「はあく。何でカルマを歌おうと思ったんだろう。まあ好きな歌だけどき。この曲が好きになったきっかけは彼奴等と遊んだゲームであるテイルズオブジァビスだったんだよな。」

寿「ねえ浩二君。敦也君と龍馬君も誘ったんだけどさ良かったら一緒に僕の家でゲームをしよう。」

浩二「良いの寿君。僕も一緒に。」

敦也「当たり前だろ。浩二も一緒にだと俺も寿も龍馬も楽しいからや。」

龍馬「そうだよ浩二君。一緒に寿君の家で遊ぼうよ。」

浩二「うん!!」

敦也「よっしゃ。じゃあ早速寿の家に行こうぜ。」

龍馬「もう敦也君は相変わらず頭より先に体を動かすタイプなんだから。」

浩二「ねえ寿君。何かおすすめของเกมとかある?」

寿「そうだね。色々あるけど、今おすすめของเกมはテイルズオブジァビスかな。」

浩二「テイルズオブジァビス?」

寿「うん!浩二君もやってみない。絶対面白いよ。」

浩二「くそ。何で今更あの時の事を思い出すんだよ。全く。」

浩二は苦々しい顔をしながらも、前世での小学校時代の寿達との日々を思い出していた。その時。

？「ねえ君さっきの歌凄くいい声だったよ!!」

浩二「うわあ何だいきなり!!」

？「ねえ君さっきの歌は何の曲?!良かったら教えてくれない!!」

浩二「え!貴方もしかしてあのA―RISEの綺羅ツバサさん?」

浩二の前に現れたのはスクールアイドルA―RISEのリーダーである綺羅ツバサだった。

ツバサ「君私の事知ってるの。もしかして君も私のファン!!ねえ君の歌声とても良かったよ。良かったら名前教えてくれない!!」

ツバサの押しに浩二はどんどん引きそうになる様子だった。そしてついに。

浩二「ちよつと顔が近い!!」

ドン引きしながら声を出したのだった。

浩二「あの褒めてくれて有難うございます。僕これから学校なのでさよなら。」

そう言つて浩二は逃げるようにその場を離れたのだった。

浩二「何なんだよ一体。てか追いかけてくるし。」

ツバサ「待つて君。せめて君の学校と名前だけでも。」

浩二は追いかけてくる綺羅ツバサを振り切るために走り続けるのだった。ようやく浩二は近くの駐車場に止めてあつた車の後ろにしゃがんで隠れたのだった。

浩二「一体どうなってるんだよ。何で人気のない公園でA—R I S Eの綺羅ツバサと出くわすんだ。しかも僕がカルマを歌ってる所を見られるなんて、一生の不覚だ。」

和也「何やってんだ浩二こんなところで?」

透「どうしたんだ。」

浩二「うわあ!!和也、透。」

和也「オツス浩二。」

透「おはよう。」

和也「てか浩二。どうしたんだ?」

浩二「実は向こうにA—R I S Eの綺羅ツバサが。」

和也「なにイ!!A—R I S Eの綺羅ツバサちゃんが何処何処?!つて何だよいないじゃねえか。」

透「ホントだな。誰もいないぞ。」

浩二「ああなんだ良かった。」

安心した浩二はすぐに立ち上がったのだった。

浩二「和也、透。二人とも制服似合ってるよ。」

和也「そうかサンキュー浩二。」

透「浩二も似合ってるぜ制服。」

浩二「有難う。じゃあせつかくだし一緒に行こうか。」

和也・透「おう。」

浩二は和也と透と一緒にこれから通う学校である日比谷高等学校へと登校するのだった。